
魔王の懐刀

みのたか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の懐刀

【Nコード】

N15810

【作者名】

みのたか

【あらすじ】

人を斬ることしか能の無かった男がそれにふさわしい死に方をするのだが、幸運にも魔界という場所で魔人として生まれ変わることができた。男の名をイズウという。

イズウは自分を助けたベクトルという魔導師の部下となって忠誠を誓い、人と魔が入り乱れる世界を戦い抜く。つまり、異世界ファンタジー。

登場人物紹介（前書き）

人物は登場した順に紹介していきます。

登場人物紹介

登場人物

・イゾウ

元々は人間のあふれる世界で人斬りをやっていた足軽の息子。志半ばで主に見捨てられて獄中で毒死するが、生まれ変わりという形で命を救ったベクトルに対して忠誠を誓い、魔人として生きていくこととなる。根は真っ直ぐだが乱暴者で、わりと小物。今はまだ強くない。享年二十七歳。

・ホウ「ノーレッジ

悪魔一族の永遠の名誉長老格。植物状態。初代魔王の命で不老不死の頭脳に情報を蓄え続ける。いわゆる生体コンピュータ

・あの方

イゾウの元の主。尊皇攘夷の旗の下に過激な活動を先導する闇のカリスマ。

・ベクトル「モリア

イゾウを魔物あふれる魔界に召喚した魔導師。学者風の魔物で、魔法で選ばれた魔王候補の一人。持ち前の膨大な魔力で不可能を可能にする。

・ククリ

ベクトルの弟子。鬼の子供で、未来を覗き見る能力を持つ故に幽閉されていたところをベクトルと契約を結ぶことによって自由の身となった。今は自らの意思でベクトルの元に留まっている。

・鉄鬼

体が魔力を帯びた金属でできている鬼。魔王候補。体を化学反応させることで斥力を伴う熱を発する。

・奇奇怪怪

雨傘山の山賊の頭領で、魔王候補の一人。ククリの予知に曰く、「ベクトルの最大の障害となる男」であり、完成された幻術を用いる。自らのロジックを幻術によって実現させる妖物。

・コントン

奇奇怪怪の義兄弟。元魔王候補。自分を打ち破った奇奇怪怪のもとで山賊の参謀役をこなす。

・バグ（ゴキブリ）

ベクトルと同じく、大師匠の弟子。蟲術という蟲を使役する術を操る。大師匠と親子に近い関係を持つ。やせこけた老人の姿でゴキブリの称号は既に弟子に譲っている。

・大師匠

バグとベクトルの師匠。魔界で一二を争うほどの魔導師であるが、現役を既に退いている。

・バテレン

人間帝国神祇長官兼特殊部隊『クルセイダー』指揮官。正体不明の術と話術を使いこなす。勇者を洗脳して支配下においている。

・勇者

バテレンに付き従う少年。魔王と対を為す『勇者』としての才能をバテレンに見出された。

・四六^{シム}

バテレン直属の部下であり、黒い仕事をこなす。殺し屋だった所をバテレンに拾われる。人殺しをさせるには有能な技術者であるが、得体の知れない野望を持つバテレンに恐怖を抱いている。

・ゲンナイ

バテレンの元で働く人間の発明家。魔法生体工学に関して天才的な頭脳を持つが、他の分野でも驚異的な成果を残している。

・魔剣の精霊

イズウの持っていた魔剣の人格が顕現した九十九神のようなもの。魔剣の中でもかなり高位であるため知能は高い。

登場人物紹介（後書き）

登場人物紹介でした。

内容は随時追加、編集をしていくつもりです。

魔王軍大將軍の記録 壱（前書き）

はじめまして。

この作品を手にとっただき、真にありがとうございます。

突然ですが、私は初心者で、そのうえアホであります。

グロイかもしれない。中二かもしれない。つまらないかもしれない。ません。

ですが、がんばるのです。私もあなたも。

魔王軍大將軍の記録 壱

どなたに申し上げても恐らく信じていただけないことなのですが、私がかつて、この世界の生き物ではありませんでした。

ましてや、かつては人間であったなどと聞けば、驚く方も多いことでしょう。

ですが、事実として私はこのことを記憶していると断言させていただきます。

先の大戦において、他世界の住人の関与があつたために魔王軍は未曾有の危機に直面しました。

過ぎた事を悔やんでも仕方ありませんが、魔王様はあれから他世界のことを更に探求されるようになられ、私に、私の異世界の記憶を記録するようにと仰られました。

ですから今こうして、『記憶の湖』と呼ばれる悪魔の長老ホウ＝ノレッジ殿に私の半生を記録していただくべく、お話を始めようというところなのですが……。

ホウ殿、大丈夫ですか？。

……そうですね。眠られてはいるが、話は聞いているから続けて構わないと。

わかりました。

始めに一つお断りさせていただきませんが、私は普段このような口調でものを申し上げることがございません。ホウ殿の『知識』に加えていただくにあたり、申し上げた言葉を魔法によって加工していません。堅苦しい口調は余り好みませんが、仕方がありません。

言葉に不自然な箇所が見受けられることがございますが、魔法で

の加工による不具合でございます。見苦しいところがございますが
どうかご諒承ください。

それでは私、魔王軍大將軍『イズウ＝フリート』の記録を始めさ
せていただきます。

人斬り毒死

日本のお話である。

その頃、幕府は高まる尊王攘夷の波に恐怖を覚えていた。

文士の集まりでしかなかった運動がまさか影から幕府の喉元を喰らい裂こうという勢いを持つことになる。誰に予測できたであろうか。

無数の刺客を天誅の名の下に暗躍させている何者かを幕府は血眼になって探していた。各地には秘密裏に諜報機関が設けられ、国の水面下では智で血を洗う情報戦が繰り広げられていた。

しかし当然ではあるが、闇を蠢く破壊者の姿を捕らえることなど到底出来はしない。果てには毒には毒をと新撰組等という野良ヤクザを飼いならしてまで対抗を試みるが、所詮はごろつき上がり。上がる首は野獣の爪先のような、得たところで何の意味もないような下っ端だけであった。

しかし、その努力も決して無意味というわけではなかった。そんな中幕府はついに、黒幕へとつながっていると思われる一人の男を都の外れで捕縛したのである。

男の名は岡田以蔵。凄腕の刺客で上層部とのつながりが疑われていた男であった。

この頃は幕府にでさえ闇の勢力の首魁がどこの藩の者かさえ分かっておらず、そのパトロンの名など拳がりようもなかったが、この捕り物によって初めて幕府に切り札と呼べるカードが入ったのである。

しかし、敵の方が一枚上手だった。

以蔵が捕らえられている牢屋の前に一人の男が現れた。

以蔵はこの男を味方として知っていた。あらゆる場所に紛れ込む

恐ろしい暗殺者であり、自分のような暴力装置よりもっと上、武と志の道で自らより遙か高みを行くと胸の内では認めた、心の師であった。

闇に揺らぐ男は以蔵に対して口を開く。対して以蔵も何かを言ううとしかけたが、男は黙って聴くように合図をした。

男は語る。

こんなに簡単に奴らに捕まっちゃまうなんて情けねえな。

悪いが、お前を助けることはできない。

お前は組織に切られた。

『あのお方』曰く、人斬り包丁としての価値しかなかったがよく役に立つてくれた、だそうだ。

実際、お前は良くやってくれたよ。だが、お上の決定だ。諦めるんだな。

お前はその後連中に拷問されることになるだろう。だが、安心しろ。

お前に持たせてあった情報は全て偽り、いわば釣りの餌だ。好きなだけ吐いてかまわない。

あのお方はこうなることをずっと前から分かってたんだらうなあ。ああ、恐ろしい。

ドスリと以蔵の胸に刺さるのは無力感である。あの方とその志に敬虔に闇の奉仕を続けてきた以蔵にとって、その使命感は侠の概念、生命そのものであった。それが失われた今、以蔵が闇の中でどんなに情けない顔をしているかは窺い知れない。

暗殺者は続ける。

で、へまをしたお前にはもう死んでもらう他無いんだが、最後に、あのお方からの差し入れがある。

見ろ。お前の故郷、土佐の地酒だ、懐かしいだろう。

毒入りだ。

この毒入りの酒を呑んで故郷に思いを馳せながら苦しみ悶えて死ぬか、奴らに拷問されて苦しみ悶えて死ぬか、好きにしる。

まあ俺らとしては、奴らに偽りの情報を飲ませてから死んでいてもらいたいんだがな。お前は本当によく働いてくれた。

あの方らしくはないが、最後の情けというもんさ。

さあ、選びな。

以蔵はしばらく音も発さずに考え込んでいたが、震える手を男に對して差し出した。

目には心なしか涙の膜が張っているように思われる。

男は続ける。

何だ、呑むっていうのか？。

まあ、仕方ねえか。

あばよ、人斬り以蔵。

戦乱の世だったら一角の将にもなれたかも知れねえのにな。

全く、恐るべき太平の世だぜ、気に入らねえ。

ふう、と一息をつくとき、そこにはすでに男の姿が無かった。

以蔵は薄れゆく意識の中、自分の血みどろの人生を思い返していた。

戦乱の世だったら一角の将にもなれたかも知れねえ、だと？。ふざけやがって……。

毒酒あおって死んでんだぞ、俺は。

あのお方に見捨てられて、情けねえ死に様晒してんだ。

畜生、あのお方の下だったら何だってできると思ってたんだ。

畜生、情けねえなあ……。

怨霊とも成りうるであろう情念を残し。以蔵は二度と動けなくなかった。

そして翌日、公には以蔵の首が晒された。

辞世の句を詠み、潔く死んでいったと後世には伝わっているが、これは何者かによる脚色である。

そして、この一件は幕府の勝利に思われたが、本当はそうでないことを読者の諸君は知っているだろう。

勢力は再び姿を晦ましたのだ。

さて、岡田以蔵の人生はこれにておしまい。

しかしその時、どこか遠くから彼を呼ぶ声がしたのであった。

人斬り毒死（後書き）

少し書き直しました。

召喚と主従（前書き）

更新は週一となりそうです。

召喚と主従

毒酒をあおり、地に伏す以蔵を呼ぶ声がする。

言葉のようで言葉でないような、声のようで音のような、そんな奇妙なものが以蔵の頭の中に延々と響いていた。

（地獄の鬼が歌っているのか……？）

それを理解するすべを持たなかった以蔵はそれを歌と表現するしかなかった。

それは一定のリズムを刻み、とにかく何かを訴えかけてくるようである。

しかし、もはや目は光を映さなくなり、耳は音を伝えず、鼻と舌は酒と毒の味を忘れ、地に付している感覚や苦しみが消え、脳はものを考えられなくなっていた。

ただそれに魅かれるような気持ちを感じながら、以蔵は死に殉じていくのだった。

そして意識が途切れた瞬間、そこに繋ぎ合わせたように新しい、新鮮な意識が割り込んできた。

それは死後の世界と人が言うものなのだろうか。突如広がる形を成さない光は、以蔵にとって希望ではなく恐怖の象徴であったことだろう。

そして、広がると同時に形作られていく視界に入ったのは、見たことの無い人工物の群れであった。

『魔人が起きたね』

「そうですね、師匠」

男が二人、見たことも無いようないでたちで立っている。
以蔵は思った。

（もしかして、本当に鬼か？）

彼らの服装もさながら、片方の男はすらりと背が長く、雪のように白い肌と藍染めにされたような青い髪をもち、もう片方は日の輪のように輝く髪、頭頂には角を生やしている。

物の怪や鬼の類に分類されるものであることは疑いようが無かった。想像していた地獄の鬼ほど醜くもなければ、人間でもない。

とつさに身構えようとした以蔵は新たな異変に気付く。赤ん坊が母の胎内から出でて初めて自分の手足の形を認識するように、まじまじと自分の手を見つめる。

幸い指は五本であったが、おかしいのは色である。常識的な肌色の、土に汚れていたはずの肌が、燃えるような紅い色を帯びている。それはまるで、体を流れている真っ赤な血を自分でそのまま見ているような気分だった。

『大丈夫ですか？』

青い方の男が話しかけてきた。その柔らかい表情には敵意がないように見受けられたが、後にこの表情は巧妙に作られた作り物だといふことが分かる。

「あ、ああ……」

何かなんだか分からない。だが以蔵は徐々に冷静を取り戻しつつあった。

やっぱりここは鬼神（死者の靈魂）の世界なのだろう、と腹を半ば括っていた以蔵の元に、先程の角の方が茶のようなものを持ってきた。

「あの、これを、どうぞ」

見た目の派手さとは裏腹にも静かな声の彼は、人にして十四、五程に見える顔つきである。心なしか以蔵を恐れているように見える。以蔵も自分の真っ赤な姿が少しばかり怖かった。

以蔵は茶のようなものを手にとって飲む。ついさつき毒をあおったばかりにしては間が抜けている。これが紅茶という以蔵の世界の西方でも慣れ親しまれたものであったということ、以蔵は知る由がなかった。

「かたじけない」

以蔵がだいぶ落ち着いたのを悟ったのか、青髪の方が口を開く。

『魔人殿、あなたが何も知らないことは承知しています。簡単に説明させてもらってもよろしいですか？』

事の経緯を知っているような口ぶりだ。この男が仮に三途の川の舟渡しであったなら、このような説明的せりふを数万回は口にしていくのだろう、などと以蔵は思った。

以蔵は落ち着いてはいたが、現状についてはもちろん何も理解していない。何故死んだはずの自分がこんなところにいるのか、ここはどこなのか、自分の目の前の二人は一体何者なのか、自分の身に何が起きているのか……。言葉に出来るものだけでも数え切れない。以蔵は目の前の青髪の話聴くことにした。

『自己紹介を簡単にさせていただきますましよう。私はベクトル、魔導師です。そして、こちらはククリ。私の弟子で、鬼の児です』
さらりと聞き捨てならないことを言われた、と以蔵は思った。

「本当に鬼なのか、こいつは？」

以蔵が指をさすと、鬼の児はとっさに目をそらす。

『ええ、あなたが仰る鬼というものとは多少異なるかもしれませんが、この世界では鬼と呼ばれる種族で間違いありません』

「やはりここは黄泉の国か？」

ここで一転して、ベクトルが聞き返す。

『黄泉の国、とはなんですか？』

「死者のいく所だ」

『あ、成る程成る程。では、失礼かもしれませんが、あなたは一度死んだのですね？』

奇妙な質問だ。以蔵は現状に対応しようと脳を回転させる。

（死ぬと閻魔と押し問答をさせられると聞いたことがあるが、まさかこれのことじゃないだろうな……）

渋々答える。

「死んだ、はず、だ……」

『そうですか、ならばいいんです』

以蔵はどうにも、このベクトルという青髪の話にはついていけないと思った。

『簡単に説明すれば、あなたは生まれ変わったのです。もっと正確に言えば、あなたの幽霊とか魂とか、そういうものがその体に取りついた、というほうが正しいんですがね』

頭の悪い以蔵であるが、なんとなく今のでストーンと一つ疑問が落ち着いたように思える。もちろん疑問は未だ山積みなのであるが。

『あなたのその体は、ある目的で私が作った最強の魔人の体なんです。ですが、体だけあってもそれでは生きていくことになりません。ですから、死者の魂を呼び寄せて、この体に移り移ってもらうことにしたんです。そして、たまたま呪文の言葉に呼ばれてきた屈強で新鮮な魂があなたであつた訳でして……』

「たまたま」という言葉が聞こえたが、以蔵は特に気にしなかった。

（確か、術士の中には死者の魂と会話できるものがあると聞いたことがあるな。こいつ、魔導師と称していたが、中々できるらしいな）

以蔵の持つ世界観においては、こういうことが出来るのは仙人かである。そうか、仙人みたいなものか、と、以蔵は魔法という言葉を知らなかつたが、こうした虚構のような物事をこの時は難なく受け入れることが出来た。

しかし、以蔵はもう限界であつた。

『ですから、あなたは今あなたがいたのとは違う世界にいるわけである意味では死後の世界とも……』

（ええい、まどろっこしいな！）

「お前が俺を呼んだことは分かつた。ならば、俺は何をすればいい？」

『ほう？』

魔人だの、魔法だの、鬼だの魔導師だのというのは関係ない。目の前の男は何を求めて魔人として自分を呼んだのか、そこが以蔵に

とつての問題なのだ。

「お前が誰で、ここがどこであろうと知ったことか。望みを言え。お前が俺を助けたよしみで手伝ってやる。それとも、俺は何の用も無しに呼ばれたのか？」

かつて生涯を、指令を受け、それを忠実にこなす刺客として生きていた男の言葉であつた。以蔵は馬鹿と思えるほどに愚直であつた。殺す人間さえ指示されれば人を殺せる、そんな人間を太平の世は愚か者と言い捨てるだろう。それは時代の性であつた。

しかし、この以蔵の性格をベクトルは喜んだ。

『フツ、素晴らしい！』

さて、その言葉にまるで意を得たかのようにベクトルは表情を変えた。彼は以蔵の直線のような性格を見抜いたのである。

『成る程、我々は思ったよりも面白い魂にめぐり合つたらしい。そういう魔人ならば話が早い。』

嘘のような笑顔から、嘘もつかせないような迫力の顔に様変わりした彼をみて、以蔵だけでなく鬼の兎の表情も変わった。ベクトルは興奮していた。

そして、先ほどもまでの温和な表情からは想像もつかない、刺すような瞳が狂喜の中に安置してある。

『単刀直入に申し上げる。我が魔人よ、私の力、私が魔王となるための力となつていただきたいのだ。』

その時、

『戦乱の世なら、一角の将にもなれたかもしれないにな……』

ハツと今わの際に贈られた言葉を思い出した。

以蔵は何か劇的なものを感じて興奮していた。

(もしかしたら、これは運命か何かかもしれない……)

今まで考えたこともなかつたようなことを以蔵は考え出した。もしも自分が戦乱の世に生まれていたら？、もしも自分が暴力を、もっと大きな戦いのために振るえていたら？、これは絶好の機会なのではないだろうか……？。

以蔵は捨てられてしまった自分の、人を斬ってばかりいた人生のことを思い返す。

（『あの方』は俺をただの人斬り包丁だと言って捨てた。実際、俺はその程度のでくの坊かもしれない。だが、もう一度、暴れてみてもいいんじゃないか？。この、どことも分らないこの世界で……）
目の前の見知らぬ天下人が、自分を戦乱へと誘ってくれている。狂喜が体に満ちてくる。

（やるのだ、やるしかない）

そういう思いがにわかには蔵を支配した。

ベクトルは続ける。

『私にはあなたのような戦士が必要だ。だから呼び出した。どうか、我が勢力に加わって、この戦乱の魔界を共に戦っていただけないだろうか？。』

魔王とは何だ、魔人とは何だ、もはやそんなことはどうでもよくなり、目の前の天下人と新しい世界にただただ心を魅かれる以蔵であった。

死んで生まれ変わったばかりとは思えない、力強いものがこもった眼で以蔵は言う。

「何も分からぬ身であるが、仕えさせていただく。かつての我が名は岡田以蔵。イズウ、とお呼びください。」

この時、奇しくも以蔵がこの異世界へと転生してからまだ一刻も経っていない。

この奇跡的なやり取りは後に『一刀の召喚』と呼ばれ、この魔界と呼ばれる世界に長く語り継がれることとなる。

そして、これが以蔵の魔人としての誕生であった。

次の日

一晩が明け、昨晚の異様な興奮から覚めたイゾウ。

新たな主、ベクトルの魔法研究所の一室で目を覚ますと、彼はそれが夢でなかったことを再確認した。狂喜の余韻が真紅の身体を痺れさせていた。

「イゾウ様、お師匠様がお呼びです」

鬼の児、ベクトルの弟子ククリである。彼の鬼の姿を見て、イゾウは昨晚からの異常事態がどうしようもなく現実のものであることをくどくどと認識する。

イゾウは小さくため息をついて応える。

「承知した」

さて、改めて自分のいる館を観察してみるとこの研究所と呼ばれる館はいささか広すぎるように思えた。

イゾウのいた日本でも、これほどの大きさの館を持つ人間は限られている。城と言うほどでもないが、大したものだ。

そして、それだけベクトルという男には力があるものと思われた。それが財力であれ、権力であれ、腕力であれ、イゾウがそれに魅かれないことはない。力とは分け隔てなく人を誘惑するものである。

イゾウが連れて行かれた部屋は、彼らが最初に出会った部屋であった。

主ベクトルが奥から現われた。顔中にすすのような埃をかぶって昨日のような威厳は消えうせていたが、そんなことは気にせずベクトルは口を開いた。

『イゾウ、君は武器を使うか？』

「剣を」

イゾウは間髪いれずに答えた。

記録によれば、岡田以蔵は小野派一刀流剣術、鏡心明智流剣術、直指流剣術等の剣術を学び、その上我流剣術でも中々に聞こえた腕

であったという。それが新世界で通用するかは別であるが。

『よろしい。ならばこれを使え。』

ベクトルは、そう言っただけで古ぼけた長剣を懐から取り出した。

『これは見た目こそ悪いが由緒ある魔剣だ。だまされたと思って使うのだ』

イゾウは由緒、という言葉が嫌いであったので、最初はこの剣を受け取ってあまりいい気はしなかった。そもそも魔剣や妖刀の類は人に言えない様な薄暗いものがあってこそその物ではないだろうか。

「ありがたく……頂戴します」

剣を受け取った時、イゾウは何かが違う、そんな思いにとらわれた。

そして、思ったことはすぐに口に出すのがこの男である。

「……が、ベクトル殿、あなたは本当に天下を狙いなさっているのか？。昨日仰ったことは真なのか？」

イゾウにとつての天下人とは、将と参謀に囲まれ、甲冑を身に付けている者であった。今こうして見てみると何故こんな男が王になると豪語し、自分がそれに対して忠誠を誓ったのかが分からなくなる。狂気と理性のせめぎ合いである。

ベクトルはイゾウの何を言わんとするかが分かつたらしく、

『そのようには見えないかね？』

と、言葉に昨日の気迫をほんの少し込めて返した。イゾウには感じられなかったが、この時ベクトルは気迫だけではなく、常人ではすくむような量の魔力を無意識に放出していた。

イゾウは案の定、

（おお、この刺すような空気は！。やはり、只者ではなかった！）と、主を見直し、

「御見それ致しました」

と言っただけで何も言わなかった。

「お師匠様、準備が整いました」

埃に塗れたククリがベクトルに告げた。なにやら古めかしい書物を

手にしている。それは本の形をしているが、地図であった。

ベクトルはククリから受け取ったそれに目を通して、言う。

『イズウ、君には、私が虫も殺せないような様に見えるかもしれないが、そんなことはもちろんない。その証拠に、今から君に殺しの命令を出す。心して聞きたまえ』

鬼斬り

舞台はベクトルの魔法研究所から遠く離れた鉦山へと移る。

その山に住んでいたのは『岩鬼』という鬼たちであった。

岩鬼族は鉄鬼という男を筆頭に、魔王の座を狙う勢力の一つである。

さて、鬼といってもそれが持つイメージは数え切れない。トラ柄ぱんつに金棒姿の原始的なファッションの鬼もいれば、夕闇に紛れて処女の血を貪る鬼もいる。

それぞれが我々にとって物語の典型的な悪役であり、現象への畏れを象徴していた。

過去の人間たちが、自分達のロジックで解決しない現象に対しての畏れを人格化して表現して誕生したのが我々の鬼である。

現在、我々のほとんどはその存在を元の現象から切り離して考えるようになり、怖れるようなこともはやないだろう。

しかし、この世界には魔法があるように彼らがいる。

誰が鬼と名づけたかは分からないが、人外の化け物でありながら人の形をしているものは大体が鬼と呼ばれていた。

その中でも岩鬼とは岩を食う鬼であり、その多くは魔石を好む。

魔石とは魔力を含んだ物質である。種類によって様々な魔法現象を化学反応のように引き起こすことから神聖視されており、古くは魔王への重要な献上品とされてきた物質である。

その中でも純粋な物質に大量の魔力を含有する『魔鉄』という金属系の魔鉱物があるのであるが、彼らの首領鉄鬼は唯一岩に加えこの金属を食うことができた。

食べるということはそれと同化することに他ならない。

魔石と金属の起こす反応が突然変異的に彼の身体を強化し、彼を岩鬼の頭とするまでに到る。

魔王を志す者たちというのは基本的にこういった、生物種として

異常な立場にある者が多かった。ちなみに、異常であるという点においてベクトルも例外ではないのだが、それが大きく物語を左右するのはずっと先の話である。

岩鬼たちは自分達の鉱山を城砦に改造していた。

我々の世界の常識で言うならば、山に砦を建てて拠点にするというのは非合理的である。

戦をする上で兵糧や水の調達が困難であるからだ。

通常ならば籠城するのには向かない、そこいらの盗賊のようなやり方にも思える。コミュニティをさっさと捨てて逃げるつもりがなければこんなところに拠点はおかないと通常ならば誰もが思う。

しかし彼らは『岩鬼』であった。

彼らには体力があり、また山においては食料である岩に事欠かないため、打って変わって山は籠城にもっとも適した場所へと変貌を遂げる。

岩鬼族は総兵力千を満たない比較的小さな集団であったが、そのような事情のために力を持った者達にも中々手を出されなかった。

だが、そこに手を出したのがベクトルであった。

目的はイゾウの魔人の体のテストに加えてもう一つあるが、それは少し先の物語に関わってくるので伏せておくこととする。

『鉄の体を持つ鬼がいる。首を持ってこい。他は捨て置け』
それがベクトルの下した指令であった。

「鉄鬼様、敵襲です！」

鉱山の最奥部、鉄鬼の居室に伝令が届く。

「数は？」

鉄の塊にも見える巨体から発せられる言葉は妙な威圧感を持っていた。

「それが、襲撃者は一人だと言っていますが、どこから紛れ込んだかわからない上、手に負えない強さでございます」

鉄鬼はこの時、この襲撃を良い暇つぶしができたぐらいにしか思

つていなかった。

「突然現れた、か……。大方魔導師か何かの工作だろう。おい、警護の奴らを撤退させる。俺が行く」

鉄鬼はそう言って笑みをこぼした。

もちろん襲撃者とはイゾウのことである。

ベクトルの魔法によってこの山の城砦に侵入したのだ。

イゾウは警護の鬼たちを斬りながら奥へ奥へと突き進む。その動きに無駄はなく、斬られた鬼たちは皆きれいに首筋を裂かれていた。こんなにバサバサと鬼どもを斬っていてイゾウは何を考えているのかといえば、

（この体、良い！。鬼たちがこんなにもろく、弱いと思う日が来ようとは！）

と、血に塗れた通路を駆け抜けながらその快感に打ち震えていたのである。

鬼斬り(後書き)

鉄鬼

鉄鬼は手強かった。

(化け物め！)

鬼の住処を荒らしに荒らしたイゾウでさえもそう思った。

奥へと突き進んでいたイゾウは手痛い迎撃をもらった。地中、一つ下の階層から突き上げられた鉄鬼の拳はイゾウの胸をかすめ、イゾウを下の階に引きずり込んだ。

魔人の体は丈夫だった。激しく地面に叩きつけられても意識がぶれない。だが、突然の反撃はイゾウの心を揺さぶりに揺さぶった。

(何だ、何だ！？)

この世に化け物があると知らない者は大砲の弾が何かに当たったと錯覚するであろう衝撃であった。

状況が飲み込めていないイゾウを鉄鬼は確認した。

「お前が曲者か」

声を発したのはイゾウの背丈二人前はあるつかという鉄の鬼である。イゾウには最初、鉄の塊がしゃべっているとしか認識できなかった。それが標的であると勘付く前に第二撃目がイゾウを襲う。今度は体勢を立て直してかわそうと試みるが完全に避けきることはかなわず、拳はイゾウを地面に叩き込んだ。

「よくも同胞たちを斬ってくれたな。誰の差し金か、たつぷりいたぶって吐かせてくれよう。」

鉄の拳の一撃はこたえた。魔人の体でなかったら四肢が千切れ飛ぶような衝撃。

(殺し合いの次元がこいつに限って全く違う……)

イゾウは己の体の頑丈さにも、鉄鬼の段違いの攻撃力にも等しく感動を覚えた。

しかし、そんなものに浸っている暇はなかった。第三撃目がイゾ

ウに追い討ちをかけようとする。

すんでの所で拳をかわし、例の魔剣をかまえる。

刺客時代（とは言っても未だ彼は刺客であるが）、チンケな刀の交わりに興じていた頃の癖で剣を構えはしたが、鉄鬼の巨軀の前では木の枝ほどの頼もしさすらない。

種族の視点においては同じであるにもかかわらず、ここに至るまでに斬ってきた岩鬼たちと鉄鬼とでは巨大な差があったのだ。

鉄鬼は魔剣を恐れなかった。

「ふん、そんな針のような剣で私を斬れるかつ。」

第四撃目。イゾウは振り下ろされた拳をかわし、手の甲を剣で突き刺す。

不思議な事に鉄鬼の鋼鉄の皮膚は剣に対抗することができずにブツリと音を発てて裂かれた。

すると、鉄鬼の表情がほんの少し驚きの色を帯びた。

「貴様、何をした！」

イゾウは素早く剣と共に飛び退く。

（おお、効いている。不思議な剣だ）

引き抜いた剣には赤紫の粘液がまとわりつく。重金属の混じったその血液は、イゾウに勝算と畏怖の念を起こさせた。

（よし、次は首だ）

という思惑と、

（これが血なのか！？、化け物め）

という悪寒に似たものが同時に彼を占拠していたのだ。

対する鉄鬼は不思議そうに自らの腕の傷口を見つめる。既に血の一部は鉄のように塊となって傷をふさいでいた。彼自身が溶鉱炉のようなものであるから、この程度でへたばるようなタマではない。

鉄鬼にとって、傷よりもそれを作った魔剣の方が気になるようであった。

「魔剣か、それも相当な品と見える」

ポツリとそう言うと彼の体に紅い筋がさっと走り、それは脈動の

リズムを刻みながら黒い肉体に溶けてゆく。

「魔力のこもった金属という意味ならば、我が肉体も魔剣と言えよう。魔剣士よ、先のようににはもう行かんぞ」

どうやら彼は体内の魔石、魔鉄の魔力を開放したらしい。人間にしてみれば、運動で身体を燃やしているようなものであるが、鉄鬼のすさまじい熱量は周囲の空気を歪める程であった。

鉄鬼の体は内から吹き出る熱で膨張し、熱された鉄の赤色も相まって、さらに一回り大きな怪物へと変貌を遂げていた。

恐らく、彼にとつての戦闘がやっとこさ始まったのである。

イズウは動じず鉄鬼の首を落とすべく魔剣を構えていた。短期決戦。刺客の思考と言えよう。

「赤くなるうが何のことかやあらん。覚悟！」
飛び上がったイズウは鉄鬼の首めがけて剣を突き出した。

斥力（前書き）

今回は遅い上に短いです。すみません

斥力

イゾウの突き出した剣は、鉄鬼の首に今に届くというところでもかき強く弾かれた。

金属同士の激しい衝突によるもののような金属音が空気をつんざき、弾かれた魔剣は宙を舞った。

そして、鉄鬼は思った通りといった顔をして真っ赤な右拳を振り上げると、拳の一振りは熱風を伴った『何か』を巻き起こし、イゾウを強く打った。

何故剣が通らなくなったのか、また、避けたはずの拳に自分がなぜ打たれたのか、イゾウには理解できない。ただ苦痛があるのみである。

後にこのことについてベクトルは語ることもある。

熱とは振動、エネルギーだ。鉄鬼の放つ魔力由来の特殊な熱は、強力な斥力をも発生させた。魔剣を弾いたのはこの力だ。

つまり、魔鉄の硬度が増して魔剣が刺さらなくなったのではなく、それ以上の力で押し返されたために起こった事態なのだ。つまり、この時点ではイゾウの力不足によるものだ。打つ手はあった。

だが、もちろん、それを理解出来たところで状況は変わらなかった。お前を責めたりはしない。

奴の前では本来、ただその熱量に圧倒されるがままに朽ち果てるしかないのだ。

「どうした、その程度の腕で私を討ちに来たのか？。魔王『選定』候補が一人であるこの私を！」

鉄鬼の怒号と共に、熱波が斥力を伴って押し寄せる。まるで天地が九十度傾いてしまったかのような光景であった。

重力に勝るとも劣らない斥力は、イゾウを壁に押し付けて放さない。

イゾウはもはや、その力に逆らって身動きすることも出来なかった。

勝負は決した。

鉄鬼は力をさらに加え、イゾウを締め上げる。

状況は戦いではなく、拷問へと発展しつつあった。

「さあ、もう手も足も出まい。答える。お前は誰の手の者だ?。」

イゾウは答えない。しかし、気を失っているからではなく、目を鋭く尖らせて鉄鬼を睨んでいたのだ。それは鉄鬼を大いに苛立たせ、鉄鬼は更に力を強める。部屋中の壁、天井、床のことごとくに亀裂が走る。

その、岩が碎ける圧力を受けて苦しくないわけがない。全くのやせ我慢であった。

魔王軍大將軍の記録 貳

いやはや、ホウ殿には迷惑を掛けしてしまって申し訳ない。

何しろ何十年も前の事ですので、当事者の私でありましても、正確にあつた事を述べられるような自信がないのでございます。

加えて、ここは過去の記録を作る場所。確かにあつた事実だ、と言えることしか申し上げられない場がありますから、自然と味気のないお話になってしまっていた事だろうと思われます。

私めとしましてもなんと歯がゆい思いでございますが、仕方がありません。

さて、ここで一つ、「ベクトル殿とは最初どのような主従関係にあつたか」についてお話し申し上げようかと思ひます。

以前にも、魔界に来た当時の事を話したことがあつたのですが、質問される事が決まって、

『何故、出会つたばかりのベクトル殿に主従を誓つたのか？』
ということでもあります。

恐らくはこの記録を見られた方もそう感じられるかと思ひますので、そのあたりについて、もう少し詳しく。

そうですね。まず『一刀の召喚』などと、半ば伝説視されているあの晩のことについて振り返ってみましようか。

魔王軍大將軍の記録 弐（後書き）

色々試行錯誤を凝らしているのですが、おかげで中々話が進まない上に文字数もスカスカでございます。恐らく、この先もこの状態を幾度となく繰り返すことになりましょう。ごめんなさい、がんばります。

あと、来週はお休みさせて頂きます。テストなのです。

ベクトル殿(前書き)

先週の方でござります。

ベクトル殿

あの晩はその言葉の通り、私の住む世界を変えた一夜でありました。

新しい世界に新しい体。全ては魔王様に与えられたのです。

極論してしまえば、そのことだけでもあの方に仕える理由には十分でございます。ですが、それではお話をさえぎってまで口を出した甲斐がありませんから、もう少しだけ、語らせていただきましょう。

さて、この世界に来て最初に会った方は、あの方と、その弟子ククリでした。

もちろん、彼らが魔人として私をそこに召喚したのですから、それは当然のことです。そして、私の魔界での運命は、その時点で既に概ね決まっていたように思われます。

それはなぜかと言えば、あの方がとてつもなく魅力的な方だったということに他なりません。

あの晩、本当に最初の最初ですが、あの方は私に対して温和な人間の面と、激しい魔族の面をお見せになり、私と主従の契約をなさいました。

激しさも、温和な笑顔も、野望も、須らくあの方の一部であり、『似せ』ではないということに当時知ることはいまありませんでしたが、両極端の性質をすり合わせたような激しいズレは、私を魅了していたに違いありません。

相反する二つの性質のものを一つにしようとするのには莫大な力が必要とします。ですが、あの方は全てを最初から一緒くたにしてお持ちで、その結合が持つ莫大なエネルギーこそが、魔王ベクトルⅡモリアの力の根源だと私は信じております。

あの方はベクトル「モリア」としても、魔王として常に一貫していたのです。

聞いたところによりますと、ベクトル殿が『鉄鬼』退治を行った後、ゴレム軍団による挙兵をなさって、『奇奇怪怪』の砦を攻撃するまでの間、世間では全くベクトル「モリア」という名前は知られていなかったといえます。

それがあの方の計算だったのか、偶然なのかは分かりません。しかし、それよりも前からあの方は、私にとって魔王たるお方だった……。

何度も同じ事を申し上げるようで気持ちが悪いのですが、全てはあのお方の才に端を発していると私は考えておりますゆえ、自ずとこのような語りとなってしまいました。

そう、結局のところ、私のこの世界で生きる意味はあの方の刺客であること以外にありえないのです。

変な欲や執着は、元の世界の薄暗い獄に置いてきてしまったようなのです。きっと、他の誰にも分かりません。つくづく不思議な感覚です。

あの方についてはまだまだ語りつくせないところでございますが、物語の進行上、今はまだ伏せておいた方が良いと思われる事実もございませぬ。

ですから、もう少し物語が進むのを待って、頃合を図ってまたお話を持ち出そうと思えます。

そうしたほうが面白いでしょう。

ベクトル殿（後書き）

明日か明後日には今週の分が参ります

意地

さて、話は再び鉄鬼の山に戻る。

既に鉄鬼がイゾウを捕らえてから数十秒が経過していた。

圧倒的な力を見せ付けて勝負を制した鉄鬼であるが、内心不思議でたまらなかった。

「強情なやつめ、このままくたばる気か？」

余裕の表情を見せてはいたが、頬には金属質の汗が伝っている。

この一見奇妙な焦りは、この強情な魔人がどうしても口を割らなためであった。

鉄鬼は、生かさず、殺さず、捕縛し、痛めつけるのに最適な力加減の熱波を調整して放っている。最初の格闘でイゾウの頑丈さを肌で感じ取っていたのだ。

したがって、イゾウはそれをものともしていないわけでも、潰れてしまったわけでもなく、強く恐ろしいその熱波の苦痛をどうにかして耐えているということが分かる。

鉄鬼はそれがまさかただの気合や根性の類だとも思えない。この刺客にはまだ策があるのかもしれないと思い、力を強めるが、反応は変わらない。

イゾウはぎらついた目を時折鉄鬼に向け、まるで勝ち誇っているかのように口を曲げる。

そうするとまた鉄鬼は不思議に思えてきてしまうのである。そんな事のくり返しが、もう4、5回は続いているだろうか。その度に鉄鬼は対処に困るのであった。

さて、仮にこのことの原因を説明するとすれば、それはイゾウが優秀な刺客であったということだ。

イゾウは元の世界でも刺客として生きて、死んだ。その名残がここで発露しているのである。それは一つの『道具として』の忠義とでもいえようか。

イゾウは最後は見捨てられたとはいえ、最後まで刺客、人斬りとしての役目は果たし続けていたのであった。

では、何故イゾウがそこまで強烈な意思を持ちえたかを考えるとすれば、まずは『人斬り』というものについて考えてみなければならぬ。

そもそも、イゾウに冠せられた『人斬り』の称号は、辻斬りのような、強盗や殺人狂の類のことを指してはいない。

人斬りはもつと組織に取り込まれた殺し屋、いわば、組織の首吊り判事だったのである。彼のいた尊皇攘夷組織は危険な思想の組織ではあったが、暗殺という仕事はごく少数の実行部隊によって行われていた。

イゾウのように元が浪人崩れであったような男もいれば、イゾウに毒を渡した男のように、仕事単位で契約を結ぶ、現代で言う忍者のような男もいる。

後者は完全な仕事をこなすが、その職人芸は高くつく。逆に前者は安いが質が悪い、といった具合であるが、イゾウは組織への忠誠と武者修行により、殺しの職人に劣らない仕事をこなすにいたるのである。

その過程で、情報管理の術と拷問への対処は教育されていたと見て間違いない。

そのために、イゾウは死ぬまで最大限に活用された。

忠誠と実力を兼ね備えた上、常に殺しに奔走している恐怖の首吊り判事。それが人斬りというものであり、イゾウを表す言葉なのである。

つまりは、そのやせ我慢の理由はプロの意地とでも言えばいいだろうか？。とは言え、別にイゾウには隠し通すべき情報も何もなかったので、ただの負けず嫌いな男の意地とも言えるだろう。このときのイゾウはあまりにも無知であった。

イゾウは単純なだけに心情を理解しにくい男である。何か裏があるのではないか、と邪推してしまうのが心というものである。

援軍（前書き）

鉄鬼編を乗り切ったら本腰の展開へと入ることができるので、それまであともう少し、私めの試行錯誤にお付き合いいただきたく存じます。

今のうちに何かご意見をいただけましたら、新章までには改善を試みますので、どうか、何かお気づきになったことがあればご指摘ください。

援軍

鉄鬼はもはや諦めた。この男から裏を聞き出そうというのは無理なことだと考えた。

それと言うのも、魔界には刺客や密偵が捕縛されたときの対策として口封じの催眠術を用いる魔物がいるのである。ここまで耐えられてはもはやそれに達しない、とその線を疑い、やがて曲がりなりにも確信した。

何故すぐにそのことを疑わなかったかというところ、その手の術は下っ端に用いるものだという常識があったからだ。

力を出してはいなかったとはいえ、一時は自分と対等に渡り合った相手がそんな術をかけられているような下っ端だったとは思いたくないという心理も働いただろう。

推測は見当違いではあったが、とにかく、鉄鬼は無駄にエネルギーを消費しないうちにイゾウを殺すことにした。

そんなことは簡単だ。動けないイゾウを、渾身の力で叩きつければいい。

本気の力に本気の拳を乗せれば、イゾウの体などは跡形もなく叩き潰せるという自信が鉄鬼にはあった。

「この報い、裏で手を引いていたものには嫌と言うほど味わせてやる。」

この時点で、早くもイゾウの第二の生の可能性は尽きたように思われた。

イゾウには、棚から牡丹餅、といった程度の第二の人生が終焉を迎えることに何の悲しみもなかった。

ただ、何もかもが『俄か』で終わってしまうことにいささかの苛立ちがあったのみだ。

「所詮は死ぬ間際の一時の夢か。夢の中でもとっつかまって死ぬと

は、嫌な末路だ。」

何の抵抗もしようとしないイゾウが、鉄鬼は憎かった。

こんなにつまらない刺客に同胞が殺されたと思り返し、怒りを晴らす鉄槌を構えた。

「死ねい。あの世で同胞に二度殺されるがいい。」

対して、イゾウは鉄鬼にすら聞こえないような声で、誰に言う訳でもなく呟いた。予定上の最期の言葉だ。

「ふん、あの世とはここだ。一度死んだ身なら、何の未練があろうか。」

最初の毒死とは打って変わって潔いことこの上ない。

ここでこのまま死んでいても、それはそれでイゾウらしい最期ではあったかもしれない。

だが、そんな事態を許さない男が颯爽と現れた。

援軍（後書き）

アクセス解析という機能をはじめて知りました。

沢山の方にご覧になっていただいていることがわかり、感謝のき
わみでございます。これからも宜しくお願いします。がんばります。

満足

鉄鬼は敵の存在を知覚した瞬間、斥力を伴った熱波を放つ。

しかしどうしたのか、男はその熱波をかわずとも受け止めることもせず、何事も無かったかのような顔でそこに立っている。

その熱波はイゾウを拘束するのに用いた熱波とは比べ物にならない強さであった。だが、力を一度に凝縮して放たれたそれは、男に對して何の作用ももたらさずに掻き消えた。

鉄鬼は再び焦る。だが、そのローブの男は鉄鬼にとっても知らぬ人物ではないことに気が付いたらしい。

「お前は……、ベクトル、魔導師ベクトル、ベクトル!! モリア!。魔王候補の中で最も勝ち目がないと言われた、あのちっぽけな魔導師!。」

そう、ベクトル。イゾウに鉄尾に暗殺を命じた男だ。

鉄鬼にとって今回の襲撃の憎むべき黒幕が突然ここに乗り込んできたのである。

鉄鬼も、彼の姿を確認した瞬間全てを悟った。

イゾウはこの時、突然現れた主ベクトルを見て思う。

(この方は今、化けておられる……。)

温和な状態のベクトルを平常とし、そこから突然魔王の器へと化け、自分を死地に放り込む。イゾウはベクトルの豹変を『化ける』、と、この先も表現する。

『鉄鬼よ、この刺客は、どうだった?』

とは、ベクトルがこの時言い放った言葉である。

ベクトルは、この奇襲に鉄鬼の暗殺と、イゾウを試すという二つの目的を設定していた。

イゾウという駒がどれだけ性能を持っているかは、実はベクト

ルも把握していなかったのだ。もちろん、未知数として期待していた体をとっていたから、決して無知の類ではない。

見たところ、イゾウは負けはしたが、鉄鬼という異常種、魔王候補の一人に名を連ねられる相手に対して手傷を負わせられる程度の実力がある。

負けたのは仕方がない。選ばれた魔王候補たちには須らく、他の魔族とは常軌を逸する能力を備わっているのである。

それは、魔王候補を選別する魔法『選定』によって規定されている事柄であり、疑いようのない事実である。

ベクトルは、他の魔王候補たちは自分の手で倒すつもりであったから、イゾウはその補佐ができるだけの力があればよいと考えていた。

また、それよりも、苦痛による拷問に対して抵抗したことの方が重要であった。

召喚獣が術者に忠を尽くす行動を見せるということは、あらゆる意味でよいことである。

召喚獣を使役するということは、術者にとっても、標的にされた相手にとっても等しく危険である。

当時はまだ召喚契約のシステムが確立していなかったため、誰でも儀式さえ執り行えば召喚が可能であった時代だ。

召喚獣と契約を結ばないことは、召喚獣に殺されても文句は言えない、ということであり、術者に力量がないと判断すると、召喚獣は容赦なく術者を殺す。この頃の召喚獣システムを便利だといえたのは強者のみであった。

さて、イゾウは召喚されて魔界に生れ落ちたわけであるから召喚獣と定義される。根本的に他の召喚獣たちとは成り立ちが異なるが、それが、他の召喚獣のように術者に逆らわない理由になるとも言い

切れなかった。

場合によっては、イゾウをを力で屈服させて従わせることも辞さない、とベクトルは考えていた。

ベクトルにとって、イゾウは唯一の兵力であったのだが、信用はしていなかった。

だが、今、最初の対面のとときと同じく忠誠と契約を貫くイゾウの姿が、ベクトルの信用の不確定要素を氷解させた。この時、ベクトルは始めてイゾウを信用し、清らかな主従関係が構築されたのである。

テストと称されたイゾウの一連の仕事は、実際にはベクトルとの主従関係を構築するという人間味のある成果を出すこととなったのである。

彼はこの時既に鉄鬼を殺害した後の戦略を頭に起こし始めていた。

そこで先ほどの言葉、

『鉄鬼よ、この刺客は、どうだった？』

である。ベクトルはイゾウにとても満足していた。この言葉はイゾウへの満足と、鉄鬼への挑発との1：1構成でできていたのである。

鉄鬼は、怒りで心も体もより一層赤く燃え上がる。

「つまらぬ事を聞くな、魔導師。ノコノコと修羅場に出てきおって生かして返すと思うな！」

そう言つて、鉄鬼はベクトルに向けて拳を振るう。

『そうこなくては、魔王候補の戦いは感情にあふれていなければ…』

ベクトルは恍惚とも取れる表情をじわりと見せる。この時既に、鉄鬼は罠にはまっていた。

満足（後書き）

書き方を模索するのって、とても楽しいですね

灼熱と魔鉄の爆弾（前書き）

何を思ってたか二日連続の投稿です。

灼熱と魔鉄の爆弾

鉄鬼は弱くない。決して、弱くない。たとえその鉄の体が黒く錆びついてしまったとしても、魔王候補のような特別な存在でなければ、決して倒せない強者である。

魔鉄の体はほぼ無尽蔵に力を生み出し、魔法による攻撃もものともしない。果てにはそのエネルギーを高度な形で扱う技術も会得しているのであるから、一隻の戦艦、一城の要塞と戦力を比べてもいづらいためである。

相手が悪かったと言っしかない。ベクトルは策と罠を用意していたのだ。

ベクトルに向かつて振るわれた拳はベクトルの体に直撃し、骨格を砕くものと思われた。

鉄鬼は高揚し、イズウは戦慄し、ベクトルはその衝撃に直撃する。そこに、何らかの『術』が発動した。

ベクトルの体だったものは、拳に触れたそばから透明な液体にすり替わり、鉄鬼の右の手から肘までにかけて大量に付着した。

まるで空を打ったような感触に、鉄鬼は違和感を覚える。

イズウのいた場所からその光景を見ても、ミスディレクションのようなトリックを使ったようにも見えない。

思ってみれば、この襲撃において鉄鬼の想像の範疇であるようなことはほとんどなかった。鉄鬼の正常だった精神の城壁は、同胞の死と異常事態に半ば崩されつつある。

そんな中、

『魔王の太祖たる大魔王よ。魔王の礼によりここに選定を行う……』

そう言ったのは、どこからか現れた二人目のベクトルである。

鉄鬼には既に冷静に状況と相手を分析できる余裕はない。たとえ

手玉に取られていると分かっているとしても、もがかずにはいられない精神状態にあった。

「そつちかあ！」

ベクトルに避けられる隙を作らないように、左手で大きくなぎ払う。だがこれも、水のように液状化した何かを掴むのみで、ベクトルの実体には迫らない。

「駿の命に従い、魔王塚に彼の首を晒す。」

今度はベクトルが三人、鉄鬼を囲うように現れ、合唱のように声をそろえて言う。

「須らくは魔族のために……。」

ここに来て鉄鬼は更なる異変に気付く。ベクトルが化けた液体が鉄の肌を黒く焼き焦がし、付着した部分から肉体としてのあらゆる機能を奪ってしまったのだ。

まるで壊死してしまったかのように両腕は力なく、不自然に垂れ下がる。

「魔王の為すべき大儀は唯一つ。」

三人のベクトルのうち、二人は鉄鬼の両足に、もう一人は胴体からみつき、再び体を犯す怪液体へと変化しては、鉄鬼の体を駄目にしていく。

「軍を進めよ。そして……。」

鉄鬼は気付けば、動かせる体の箇所が首から上しかなかった。

不思議、では済まないこの状況に、もののわずか数十秒で陥れられた鉄鬼は、訪れる死に対して覚悟を問う暇もない。

イズウの使っていた魔剣をいつの間にか拝借していた新しいベクトルは、片手で鉄鬼の体を押し倒す。

鉄鬼は何の抵抗もできなかった。何かわめきたい気持ちもあったが、肺が言うことを聞かない。

ベクトルは魔剣を鉄鬼の首にあてがって、文句の最後を口にする。
「願わくば、人類廃滅の礎となれ……。」

振り下ろされた刃は鉄鬼の首を一刀両断し、首は力なく地に落ちた。
傷の断面からは血が吹き出るといふこともなく、既に、鉄鬼の体
としての機能が破壊されつくしていたといふことを悲しげに物語っ
ていた。

魔王軍大將軍の記録 参

魔王様は鉄鬼を何の支障もなく殺してしまわれました。

しかし、まあ、魔界の戦いにおいては限りなく王道に近い戦いであったように思われます。

魔界の戦闘にはご存知の通り、『血の戦い』と、『術の戦い』という二つの要素があります。

血の戦いとは、文字通り、血によって決着のつく戦いのことを言います。肉弾戦のことですね。

血によって決着がつくというのは、種族によって結果がおおよそ決まってしまうという意味と、流血が憑き物であるという二つの意味がかかっていますね。

私の場合は、もっぱらこちらが専門ということになります。鉄鬼もこちら側と言えましょう。

さて、もう一方の『術の戦い』とは、呪いや法術、魔法での戦いのことでございます。策略や権謀術数もこちらの領域でありまして、こちらの戦いには種族の優劣が影響をおよぼす事はあまりありません。努力と発想と準備が敵を殺すのです。私のようなうつけには到底手の出せない戦いでございます。

魔王様は元魔導師であらせられましたから、当然術の戦いを得意となさるわけでございます。

『術の戦い』を得意としなかった鉄鬼にとって、魔王様の魔法は天敵だったと言えましょう。

と言いますのも、あの方の魔法の真髄は『変質と操作』というものでして、物の定義を好きなように弄り回したり、特定の物体のあべき姿と言うものを設定して、あのような不思議な出来事を演出していたのでございます。

はい、そうです。あの液体に変化した魔王様も、殴られる直前まではちゃんと魔王様、ベクトル＝モリアそのものであります。

ちなみに、あの液体は魔王様本人が開発なさった物質で、金属の命を奪って水へと変身する液体でございます。あの方は当時『魔王水』と命名なさっていました。これは余談ですが、私の体にも血の如くこの魔王水が巡っておりまして、あのまま鉄鬼が私を殴り殺してしまっていたら返り血、もとい『返り魔王水』が噴出して鉄鬼は死んでいただろう、と魔王様は仰っていました。

以上のような次第で私は魔王様に助けていただきましたが、それ以降からこれまでの戦いを思い出してみますれば、鉄鬼との戦いなどほんの肩慣らしに過ぎなかったのです、魔王様にとっては。私めにしてみれば、最初から地獄のような仕打ちを受けたわけですが……。

おや、もう夜が明ける頃でしょうか。この悪魔の館も大分に静まり返り、まるで火が消えたようでございます。そう言えば、ロウ殿にも休みなくお話を記録していただいておりますから、さぞお疲れになってのことでしょう。

今日のところはこの辺りにして、続きはまた今度ということでしょうか。

はい、分かりました。それでは、そういうことで。

そうですね……。次は、魔王様が宿敵の一人、『奇奇怪怪』の登場の辺りから、話をさせて頂きましょう。ここからはもっと派手に人物が動きます。私としましても、鉄鬼殺しの時は何の活躍も無かったに等しいようなものですから、その後の事を早く申し上げたいという気持ちがあります。

早く次の機会が来る事を楽しみに、今日のところは一時お開きとさせていただきます。

それではまた。

魔王軍大將軍の記録 参（後書き）

第一章兼プロローグ的な何かで終わりました。
いかがでしたでしょうか？

イソウの知らない話（前書き）

十五話目。めでたいですね、そこはかとなく。

イズウの知らない話

鉄鬼の砦を襲撃した日の晩。

イズウは傷を癒すために回復術を受け、今は深い眠りへと落ちて
いる。光でできた無数の線が、蛆虫のようにイズウの肌を這って
いるが、当のイズウは思いの外心地が良いらしく時々気の抜けた息を
吐き出す。

ベクトルは一通りの処置を済ませた後、留守を任せていた弟子、
ククリの居室へと向かっていた。その傍らには大きな木の箱が浮遊
し、ベクトルに従って移動している。

部屋の前に着くと、既に扉は開いており、ククリは茶を淹れた所
であった。

「お師匠様、お待ちしていました。」

ククリは、まるでベクトルがこの時間に訪れることを予知してい
たのように席を整えていた。

ベクトルは木の箱を降ろし、用意された席に着く。

「ククリ、また未来を予知したのか。しかも、こんなくだらないこ
とで。」

ベクトルは遠出の疲れも相まって不快の表情を見せる。ベクトルは
転移魔法に加え、鉄鬼を安全に殺すための魔法を幾重にも重ねて使
用していたため、魔力疲労に伴う精神的疲労に苛まれていたのだ。

対してククリは悪びれる様子もなく、

「お師匠様、未来とは知覚できないものです。私が未来を見通すな
どと仰られますが、私にはそんな大層なことではできませんよ。」

と、本来の能力と比較して遙かに低い自己評価で答える。

ベクトルは不快の色を強める。

「だからといって多用はするなと言っているのだ。」

ベクトルがククリに対して見せるのは、師匠としてというよりも上
司としての態度のようであった。ククリの未来予知という特殊技能

はベクトルには逆立ちしても手に入らない。ベクトルの態度はまるで、その能力に対して劣等感でも覚えているような様だった（実際は違う）。

ククリはそれが気に入らない。それは弟子としてではなく、契約相手としての、本来の関係が損なわれたことへの憤りであった。

「前にも申し上げましたが、分かってしまうものは仕方がないのです。私の能力はあなたの所有物ではありません。それでは私がいたあの鬼の郷と同じ様です。あと、私はあなたの弟子という体はとっています、お分かりですよね。」

ベクトルは自分がいささか疲労していることを改めて自覚し、顔からは不快の色が流されるように掻き消えた。

「ああ、分かっている。弟子入りという体をとってはいるが、契約の本質は限りなく対等な関係にある。」

返ってくる言葉が分かっていたかのようにククリは矢継ぎ早に答える。

「その通りです。弟子入りは、鬼の郷から連れ出していただく動機づけ以上の意味ありません。」

「と言いつつ、私からもいくつか技術を盗んでいるのだろうか？」
ククリはわざとらしく口調をおどけさせて言う。

「弟子なので、師匠から技を盗むのは当然のことですよ。立場とは利用するものです。あなた様の究極の目的も、魔王の立場を利用して始めた達成できるものなのでしょう？」

次の言葉までの間がとてつもなく長く感じられる、そんな一瞬があった。

『どこまで知っている？』

「この質問をしたら、お師匠様が『どこまで知っている？』とお聞きになるということまでです。」

用意された茶に口をつけるベクトルの表情は複雑である。

『末恐ろしい奴だ。』神眼』の名にも恥じない。』

「そうやって恐れるだけでは鬼たちと同じですよ。」

ククリは未来予知の能力のおかげで、話術では魔界でもトップクラスの實力を持つ。後の人間帝国との交渉においても、その技能は遺憾なく発揮される。

「おっと、そんなことより、箱の中身を。」

『ああ、契約だったからな。』

「そうです。これが見たかったのです、お師匠様。」
中身は鉄鬼の首であった。

首の惨い様を見たククリは、今までの態度を急変させ、愛想のよい弟子を演じる彼に戻った。と、ベクトルは解釈した。

「ふう。これで一つ、鬼の郷の思い出と決着が付きました。」

歡喜と不快が入り混じった目で首を見つめるククリに、ベクトルは何も聞かなかった。

しばらく感傷に浸っていたククリだったが、思い出したように口を開く。

「お師匠様、一つ忠告をさせていただきます。よろしいでしょうか、鉄鬼はほんの序の口なのです。『術の戦い』に手も足も出ないこんな奴、お師匠様なら簡単に殺せるはずです。」

そう言つて箱を軽く蹴飛ばすククリの顔は、どこか愉快げであった。『分かっている。あの襲撃はイズウのテストと、お前との契約執行つまり鉄鬼の暗殺が目的だ。他には何の意味も持っていないに等しい。魔王候補つぶしはただの結果だ。』

「その通りです。で、ここからが本題なのですが、実は、鉄鬼の件のお礼にと、あなた様の魔王への道の最大の障害となる者について予知をしたのです。」

『ほう、それは素晴らしい。』

「そうとも言つてはいただけません。そいつがお師匠様を大変苦しめるものと、私は予知しています。」

『で、それは何者だ?』

「予知できたのは猿、狸、虎、そして蛇という四つのシンボル。それ以上はまるで霧に包まれたかのように見えません。普段ならこのようなことはないのですが……。」

『フッフ、お前の予知は完全無欠だと聞いていたのだがな。』

「申し訳ありません。先ほど申し上げたこと以上のことは、本当に霧がかかっていて分からないのです。」

『ふむ、興味深いことを言う。だが、霧に包まれるということ自体が、我々の敵を意味する象徴とは言えないだろうか？』

「今はどうとも言えません。」

『そうか、用心しておこう。では、私は部屋に戻らせてもらおうか。』

「はい、お休みなさいお師匠様。」

二人は師弟関係という次元には存在しない。

未来を予知できるククリにとって、未来の魔王も、自分の目的のための足がかりとしかそのときは思えなかった。

しかし、まだ、このような契約の節目において以外は、二人は師弟のように振舞っていた。

奇奇怪怪(前書き)

スピードアップを図ります。

奇奇怪怪

魔王、魔界の王。魔法の存在するこの魔界において、その権威は絶対であつた。

その王位を定めるものは魔法という彼らにとっての絶対的なルール以外の何者でもない。

魔王となるために定められた二つの条件。これは魔界のしきたりであり、同時に大魔法使いであつた一代目魔王によって定められた絶対的な魔法でもあつた。

一つ。第一代魔王による魔法『選定』によつて認められた証『魔王のしるし』を体に宿していること。

先代魔王が崩御する度に魔法『選定』が執行され、魔界中の選ばれた魔物たちにしるしが与えられる。しるしは体に浮かび上がり、それを偽造することは出来ない。

二つ。他の『魔王のしるし』保持者達を屈服させる、又は殺すことによつて『勝利する』こと。

しるし保持者は、他の候補者に屈服することで戦いから降りることを表明する以外には、死ぬか魔王になるかしかない。

魔界が魔王の代替わりの度に大きな戦乱に巻き込まれるのはこのルールのためである。

さて、ベクトルとイズウが出会つた日から一年が経過していた。

この時、先代の第54代魔王『大魔眼のアイ』崩御から十八ヶ月が経過しており、すでに『魔王のしるし』保持者達はその勢力を確立していた。

魔界は絶対王権の統治であつた。

魔王という圧倒的な大義名分の下に魔王軍が組織され、それに従う有力者が将軍として各地を治める。

魔王という絶対的なカリスマはその死まで存続し、その間は魔界が一つになる。

魔王の死はその大前提の消失であり、つまりは社会の崩壊なのである。

しかし、この崩壊が一定のリズムを刻むことによって、人間社会よりも自由と変革の激しい歴史を築き上げているのだ。もっとも、そのことについて深く理解しているのは、魔界のインテリでもごくわずかである。

魔界にも賢者は数多くいるが、歴史や政治を考える者、ましてや道徳を考える者などは数えるほどで、大抵そういった者達は人間に化けて人間界に隠居してしまうのである。

ここで初めて、この世界において人間の社会が話に登場した。

魔王の大義名分とは人類滅亡であり、目下の目的は魔界勢力の拡大であるのは魔界中の常識なのであるが、魔界と区別される領域、人間界を詳しく知るものは中々いない。

魔界が人間界に干渉行為を行うのは魔王が魔王軍を組織し、人間攻略を試みる時のみであるからだ。

しかし、人間が物語にからんでくるのはもっと先の話となるので、今はこの程度の知識でも問題はない。

話を魔王候補の戦争の話に戻そう。

この度の戦乱の中でも特に迅速に勢力を拡大し、幾人もの魔王候補に対し勝利を納めていったのが元・山賊の頭領、『奇奇怪怪』である。

雨傘山と呼ばれる、常に陰鬱な雨に晒されている山に築かれた城砦。

奇奇怪怪はそこに拠点を構えていた。

彼は多くの山賊たちを率い、その情報網の緻密さと速さにおいて右に出るものはいなかった。

訓練された密偵たちは魔界中をとび回る。

奇奇怪怪は、雨傘山の城砦の奥深くにいなながら魔界の情報の全てを得ることができたのだ。

「吸血鬼同盟が動きました。今回の盟主は『大黒天』、しるしの保持者です。」

「同じく吸血鬼同盟、『大黒天』の後ろに『伯爵』がついた模様です。」

「エルフの里にとばしていた者からの情報です。」

伝令が口々に伝える大量の情報の中の、ある情報に対して奇奇怪怪は興味を示す。

『お前、もう一度今の情報を伝える。』

伝令はかしこまって伝える。

「はい、申し上げます。頭領が目を付けなさっていた保持者が一人、魔導師ベクトル・モリアが姿を晦ましました。」

『おう、何の沙汰も無しにかあ？。』

「いえ、『鉄鬼』たちが消されたとの噂がありますが、真偽はたまたま確認に向かわせております。まだ定かではないので申し上げますべきではないかと思ひまして……。」

『よし、下がっていいぞ。それにしても、鉄鬼か……。なあ兄弟、それが本当ならば面白い、いや、面白くなった、とは思わないかあ？。』

兄弟、と呼ばれた副首領コントンは、頭領である奇奇怪怪の頭脳である。奇奇怪怪にそれこそ、兄弟同然の信頼を置かれている。

「奇の字よう、そんなに面白いか。」

さも面白そうに城砦の主は口を開く。

『いいかあ。鉄鬼が、あのでくの坊が今まで勢力足りえていた理由は、単にその体に埋まっていた魔鉄のためだ。鬼の唯一の弱点だった魔法攻撃を魔石がカバーするように進化したのが『岩鬼』一族だつてんだから不思議だ。』

「そりゃ、そうだなあ。でも、魔石信仰なんぞ野蛮が匂う。」

『うむ、だがなあ、それは今まで効をなして、奴らはまともに生き残つて来た。鬼のあの強靱な肉体ならばあながち馬鹿とも思えん手だ。魔導師では敵わん相手のはずだろう？』

副首領にとつて、魔導師がどうということには興味がないらしい。

「だが、魔導師がそれを倒したから、面白いつて言うのかよ。」

『魔導師風情が、何か面白い力を使うに違いない。』

「おいおい奇の字よう。噂を真に受けて何になるつてんだ？」

『いや、そうに違いない。でなければ魔導師じゃアレは倒せん。』
奇奇怪怪には、意識が時折自らの世界と現実とを行き来して、コミュニケーションが成り立たなくなる時がある。そんなときには、義兄弟であるコントンであつても彼には声が届かない。

奇奇怪怪の強烈な興味を冷ますようにコントンは付け加える

「はあ……。どう考えてもこの世の術士の中ではお前が一番に決まつてんだから、魔術師の小細工なんか気にするな、つて言つてんだ。」

「しばらく間をおいて、奇奇怪怪は自分の陶醉の世界から帰つてきた。」

『いや、俺を越える術士もいずれは現れる。そうに違いねえよ兄弟。』

奇奇怪怪の術が最強と信じているコントンにとって、奇奇怪怪の言つていることが杞憂にしか思えない。

「そのときは俺も終わりだな、奇の字よう。ま、ありえないがな。」

『おう、もつと褒めやがれ。クハ、クハハハハハハハ！』

「クへへへへ、へへへへへへへへ！」
下品に笑っている組織のナンバー1と2を見て、側近達は身震いをした。

しばらくして、コントンは言う。

「で、その魔導師が気になるんなら、俺が見てきてやるつか？」

奇奇怪怪はだいぶ興から覚めた表情で答える。

『いや、いい。恐らくは転移魔法で姿を晦ませただろうから追っても無駄だろうよ。』

「いいのか？」

『いいのだ。魔導師というのは用心深い。下手に使いを出すぐらいならば何もしない方がいい。』

「おい、下手に、だと抜かすが、いつも俺が頭使ってるからこのやぐざ商売がうまくいってるんじゃないかねえか！」

『クハハ、全くだ。まあいい。俺は他の魔王候補連中の品定めをしてくる。たまには俺が前線に出るのも面白いだろう。』

そう言って指をパチンと鳴らすと、そこには既に奇奇怪怪の姿はなかった。コントンが制止する間もなく奇奇怪怪は飛び出していった。

雨傘山の雨はより一層強まり、山の頂から異形となって飛翔した奇奇怪怪を隠すように、吹きすさんでいた。

五里霧中の男

呪術による洗脳とは得てしてこのようなものだ。

俺は『奇奇怪怪』だ。

私は『奇奇怪怪』です。

ぼくは『奇奇怪怪』だった。

アタシこそ『奇奇怪怪』よ。

わしが『奇奇怪怪』である。

我は『奇奇怪怪』かも知れぬ。

お前は『奇奇怪怪』か？

誰もが『奇奇怪怪』だろう。

どうせなら『奇奇怪怪』がいいよな。

あなたも『奇奇怪怪』でしょう？

『奇奇怪怪』だって認めちまえよ。

『奇奇怪怪』が怖いか。

『奇奇怪怪』について考えてみましょう。

『奇奇怪怪』が来たわ。

『奇奇怪怪』万歳。

『奇奇怪怪』にならなきゃずっとこのままだぞ。

『奇奇怪怪』を受け入れる。

『奇奇怪怪』が嫌だなんて言わないわよね。

『奇奇怪怪』だったら良かったのに、……。

『奇奇怪怪』が嫌いなら許してあげようよ。

『奇奇怪怪』ならどうするだろう？

『奇奇怪怪』は君のためだ。

『奇奇怪怪』がよもや『奇奇怪怪』だと『奇奇怪怪』ですら『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』のために『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇

『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』だ。『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』で『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』だ。『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』だ。

お前はもう『奇奇怪怪』さ。

もう『奇奇怪怪』でしょう。

『奇奇』、『怪怪』、『奇奇怪怪』。

明日はきつといい『奇奇怪怪』だな。

悲しいか？

悲しいわよね。

『奇奇怪怪』は悲しまない。

『奇奇怪怪』だったらこう笑え。

『奇奇怪怪』なら楽なもんさ。

ほーれ、一丁あがり。

『奇奇怪怪』

おい、『奇奇怪怪』。こっちにまだ自我が残ってるぞ。了解。

副首領コントンは、魔界においても異様な光景を誇る奇奇怪怪の儀式的呪術を見ていた。

「おい、終わったかい、奇の字よう？」

『おう、『奇奇怪怪』が『奇奇怪怪』だ。』

「馬鹿野郎、俺にそんなこと言っただろう。洗脳は終わったか？
って聞いてんだよ」

『『奇奇怪怪』だ』

意味不明。どうやら、まだこっちの世界に帰ってきていないらしい。エクスタシー系の術者にはよくあることである。

「ああ、そうかいそうかい」

コントンはふてくされてタバコを吹かした。

奇奇怪怪は皆を飛び出してから数時間後、ぼろぼろの雑巾のようになつた一匹の狗の死体を持って帰つてきた。「魔王のしるし」の表示されたその左頬のような部分から、『狗夜叉』という魔王候補の一人であつた剣客であると判断できた。もちろん、奇奇怪怪が殺したのである。殺した理由は特にないだらう。

奇奇怪怪はずつとその死体に幻術を試みている。

「副首領殿、あの頭領殿と言えども、あんなボロクズを操るなんて無茶じゃないですかい？」

「馬鹿野郎。奇の字がそれに成功したらよう、おれたちあ不死身の軍隊にだつてなれるかも知れねえんだぜ」

「どういう意味です？」

「奇の字は真正銘の不死身だから死なねえんだよ。もちろん分かっているよな」

「ええ、分かってますとも」

「あいつは不死身なんだから、あいつが幻術で生き返らせ続けてくれたら俺らも不死身だよな？」

「成る程」

「おうよ、無敵だけおれたちあよお、そうなつたら」

「でも、成功するんすかねえ？」

「知るかつ」

この盗賊たちは奇奇怪怪という男無しではとても成立しない集団である。

副首領のコントンでさえ、今ではほとんどの指揮を奇奇怪怪に任せてしまっている。

そこには、かつて奇奇怪怪に挑み、敗れた策士『渾沌』の面影はないかのように思える。コントンの頭脳が未だ全盛期に比べても少しも劣ることのない状態であると知るものは少ない。

ただ、奇奇怪怪の圧倒的実力に任せてしまるのが楽だったからそうしていただけなのだ。

彼らが盗賊として生き延びていられるのは単に奇奇怪怪のおかげであるが、奇奇怪怪にとっては魔王をめざすことと子分の面倒をみることはほぼ同義であり、どちらもお安い御用と謳っていられるほどの実力と余裕を持っていたのだ。

この適当さが奇奇怪怪の特徴であった。

幻術の種

ぐちゃぐちゃの死体であった狗夜叉の肉体が、気色の悪い音を立てて元の形に戻ろうとしているところであった。奇奇怪怪の幻術がまさに生命の理を一つ踏破した瞬間である。

奇奇怪怪は初の試み、『死者蘇生』と『死者洗脳』の成功を喜び、コントンと酒を飲んでいたところであった。

ただ、奇奇怪怪は奇妙な違和感を感じていた。

『そんなことよりも兄弟よ、俺はさつきからずっと、誰かに覗かれているような気がするんだが、なんとも感じねえか？』

毎度毎度馬鹿なことを言いやがる、とコントンは思った。酒を飲むたびに奇奇怪怪には途方もない話を振られるためであり、今回もその類であると思っていたのだ。

「おいおい、馬鹿を言うな。ここには俺が結界を幾つも取り付けてあるし、魔法や千里眼じゃここは視られない仕組みにしてあるだろうが。その犬っころのせいじゃないか？」

普段ならばここでコントンに言いくるめられて引き下がってしまう奇奇怪怪であるが、今回のことは割りと本気で気にしているらしい。

『分かっている。分かっている、が、何か、もっと高度な次元の覗きをされているような気がしてならねえ。本当に何も感じねえか？』

一度気が付くと、違和感とは否応無しに膨らんでいく。生命の理を弄ぶ奇奇怪怪にとってですら例外ではない。

そして、その感覚はコントンへも難なく感染するのであるが、コントンは、やはりそれは錯覚のようなものだと言え付けてしまっている。

「馬鹿馬鹿しい。だったら、その覗き魔にこっぴどく幻術で仕返しちまえよ。目が腐って、鼻糞で鼻が詰まっちゃうような、心が『奇奇怪怪』一色になっちゃう幻術をよ。」

奇奇怪怪が持ち出す話題に対して、コントンは大抵このように奇

奇奇怪の幻術能力に任せるようにして話を打ち切ってしまう。奇奇怪の幻術は、話合いの上においても殺しのときにおいても便利なものであった。

奇奇怪はそれに乗ることにした。

違和感という抽象的で曖昧なイメージに対して幻術をけしかけるという高度で難解な技術も、奇奇怪にとっては造作もないことである。人間にとって指の操作が自由自在であるのと同様に、奇奇怪はかゆいところを幻術でかきむしる。

『そいつは名案だぜ兄弟。そうさ、俺の名は奇奇怪。俺という深淵を覗くということはなあ、そのまま深井戸にはまっておっ死ぬちということだ！』

奇奇怪は幻術を展開した。

奇奇怪の幻術が現実そのものに作用することはない。彼が何者かに対して見せる幻術には質量が全くないのである。『白昼夢』を操る能力とでもいえようか。彼自身が触媒となることで相手の五感を狂わせ、思い通りの幻を作り上げる。

実際には無い事を相手にそう見せることができるということは、あの手この手で相手を自殺に追い込むことが出来るということだ。五感を狂わされた生物にとって、半狂乱のうちに振るった一撃で自らを滅するということは簡単なこと。五感^は生物^{にとつて}の根本であり、狂わされては一卷の終わりに限りなく近いものである。

狗夜叉という一人の魔王候補は、奇奇怪の幻術に惑わされて、なす術もなく自らの手で自分の体をずたずたに切り裂いたのだ。残酷なことこの上ない。

だが、そんな狗夜叉も、次の陽が昇る頃には奇奇怪の忠実な部下となっていることだろう。

奇奇怪の幻術はかくして恐ろしいものではあるが、さて、奇奇怪をこの時覗いていたのは何者であったか。

言うまでもない。ベクトルの弟子であり、未来予知の異能者である、鬼の子ククリだ。ベクトルの障害となる敵とは奇奇怪怪であるのだ。

奇奇怪怪はククリに幻を植えつけた。

鉄鬼襲撃の前後に時を越えて植えつけられた幻術の種は、ベクトルとククリ、そしてイゾウの運命を大きく狂わせることとなる。

幻術の種（後書き）

奇奇怪怪というキャラクターを書くのが楽しいです。

創作においての楽しみの一つを味わっている気分です。

自分はまだペーパーのビギナーですけど、こつこつ具合に楽しんでいけたら幸せですね。

傀儡

鉄鬼襲撃の日の晩に遡る。ククリはあの日、自分の知らない何かがあつて、自分にとって重要なものが壊れてしてしまったような気がしてならなかった。

似合わない服でも着せられたような羞恥に近い感情だったり、外からの刺激に対して反抗しようする条件反射のようなものがとめどなく発動する。要は、妙にそわそわして落ち着かないのである。

かつて、鬼の里で自分をいじめた鉄鬼があっけなく死んでしまったことで、何かが吹っ切れた、などということでは断じてない。この感覚は、憎かった鉄鬼の死から起こる気味の良さや空しさなどは含んでおらず、なんとも意味ありな不安のみが心の中に巣食っていた。

また、ククリは奇妙な夢を見る様になった。夢の中に誰かが干渉しているのではないかと意識するほどに、奇妙な夢である。だが、具体的に何を夢に見たかを思い出そうとすると、内容は霧に包まれてしまうのであつた。ベクトルの宿敵について予知したときと全く同じであつた。違和感は異常を正常にククリに訴え続けていたのである。

かなりの精度で未来予知を行うことのできたククリである。夢の中にまで、未来に起こる事のエッセンスを垣間見ることができた。

何の異能も技術も持たない平常者にとって、ククリのような能力者や儀式を介する予知よりも、自らの夢に映る未来のほうがよっぽど信憑性があるものらしい。他者による予知には恣意的な要素が入る可能性が大いにあり、自分だけの閉じられた夢の世界にこそ、そういった超常現象があると考えられてきたのである。

ただ、ククリの場合、なまじ未来を垣間見る能力が優れていたために、夢という無意識の世界で見たくもない未来を度々見せられることがあつた。また、それらを信賴して、不幸を覚悟することがク

ククリには必要だった。ククリは出来るならば夢という形で未来を予知したくはなかった。

だからこそ、今回の夢はククリにもっとも恐ろしいものであったに違いない。まるで、その夢はククリの死や、能力の喪失という、彼にとつて最悪の未来を暗示しているとすら思われた。

彼にとつて夢とは、生理的なものに近い、最終警告なのである。だが、少しずつ幻術はククリから情報を絞り上げ、ククリの行動、現実の行動にまで関わろうとするようになる。

ベクトルはククリに対して、自分と同等に近い能力の持ち主であると評価していた。違う世界に手を出すことに成功したベクトルではあるが、為すべきことはこの魔界にあるに違いなかった。そのためにククリの能力は眩しかった。

そのことは、ベクトルとククリの仲が恐ろしい情報と魔法の戦争に発展しないことに一役買っていたわけだが、今回は裏目に出た。時を越えてものを見る能力は恐るべき異能だが、偶然とはいえずそれを逆手に取ることで今やククリを虜になさんとする幻術能力も、十分ベクトルにとつては脅威であり、計算外のことであつた。

ククリの幻術騒動に関して、ベクトルは最大限に出遅れることとなるのは、ククリを過信しすぎ、彼が幻術の傀儡となりつつあることに気付けなかったためである。

ベクトルが気付けないほどであるから、イゾウなどは尚更である。魔法によつて驚くほど早く傷を修復したイゾウは、魔界という新天地に順応しつつあり、魔物と戦う術をベクトルの教えからひたすら吸収し続けていた。この時であつたら、鉄鬼との勝負も結果がわからなかったかもしれない。

ククリはここ数日の幻術による違和感のために、体の調子をすっかり崩していた。ベクトルが医学と呼べる知識と技術を持っていたために大事には至らなかったが、安静にしていることが命じられる。館の中庭からベクトルの声がする。

『今度のゴーレムは魔法を使う。上手く対処してみせる。』

イゾウの修練のためにベクトルが作成したゴーレムが、イゾウに火炎を放射する様子が窓から見える。イゾウは炎を掻き分けるように振り払い、素早い踏み込みからの一太刀をゴーレムに打ち込む。

ククリにとってはここ数日で見慣れた光景であったが、ククリに潜ませた幻術を媒介してそれを覗き見ていた奇奇怪怪は、その巨大エネルギーの応酬に息を呑んだ。奇奇怪怪自身は幻術以外には何の取り柄もないと自負していたから、こういった強力な力が欲しいといつも思っていたのだ。

奇奇怪怪のそうだった思念の運動がククリを通して行われているわけであるから、違和感を感じたり、調子を崩すのは仕方ないことであり、奇奇怪怪も、それにさらに幻術を上乘せしてごまかすほど気が回らなかった。

奇奇怪怪とククリが、奇奇怪怪をベースに同調し始めていた。

ククリはふと、自覚することなく呟いた。

『ほう、あれがベクトルモリアか。楽しみだ。』

老魔（前書き）

ちょっと早めの更新です。あと、本文が三万字を超えました。

老魔

ベクトル＝モリアの館の一つはエルフ人種の里が点々と広がる深い樹海の中にあつた。

エルフとは智慧と礼の民であり、古くから魔界の勢力の一端を担ってきた有力民族である。魔界の中で唯一人間との微かな交わりがあり、魔界と人間界において貴重な中立者である。容姿は人間に近く、肌の青白色さえどうにかすれば人間に化けることも可能なほどである。

魔物には人間憎し思想を持つものが多く、エルフを快く思わない輩が多くいる訳であるが、彼らを攻撃することは魔界での声望を落とす行為となる。人間と交わりがあるうと、賢く気高く強い者が畏敬されてしかるべきが魔界の掟なのだ。また、そもそもエルフは長寿である上に強力な魔力と優れた魔法技術を持っているため、里そのものと争うことになれば、ただではすまない。例えそれがベクトルであっても、結果は分からない。

ベクトルがエルフの領地である森林に館を構えられるのは、ベクトルがエルフの血を引いていたためである。ベクトルの白い肌、青い髪はエルフ由来の典型的な遺伝である。エルフは同族の血に対してフレンドリーであり、ベクトルが初めて森に訪れたときも難なく受け入れられた。

ただ、イゾウやククリのような他種の魔物かつ、危険な能力を持つものは歓迎されない。ククリがエルフの森に入ったときには、鬼の郷からククリの返却を求める使いが訪れて外交問題が発生しかけたということもあり、ベクトルとしては慎重に取引をしなければならぬ相手であることには変わりない。エルフの森は一度受け入れられれば魔界でもっとも安全な場所とも言えるため、拠点とするためにどうしても手放す気にはならなかった。

エルフの森は侵入者を嫌い、排除するように出来ている。木や川、

空気のような自然物の働きすらもがよそ者を嫌うつくりになっているのだ。道を知らないものにとっては木は無限の壁となり、川は入り乱れて方向感覚を蝕み、植物の吐き出す清浄過ぎる空気は、強制浄化を発生させて毒ガスのごとく身体のあるゆる働きを殺す。天然の要塞といっても差しつかえのない強固で排他的な土地であった。

さて、何故このような話をしたかというと、その天然の要塞を外から越えて、ベクトルたちのいる館に向かっている訪問者がいたからである。その訪問者にとっては、どこが目指して然るべき場所か手に取るように分かるようであった。エルフですら気付かないような最適の道を的確に選び取っていたのである。

そして、この訪問に対して最初に気が付いたのはイズウであった。その何者かは不規則な軌道を描きながらゆっくりと館に近付いていく。まるで竹馬でスキップでもしているような軌道の浮遊移動である。

中庭にてゴーレムの相手をしていたイズウはその異変に気が付いて、即座にゴーレムの首を落とし、迎撃の邪魔にならないようにしてしまった。エルフですらベクトルの館には近づかなかったため、異常であることに違いなかった。

「誰だ。」

言葉が通じる相手とは、その移動の軌道からは予想できなかったが、お約束である。

イズウの言葉に耳を貸すようなこともなく森の暗がりから出てきたそれは、老人のような魔物であった。少なくとも人型、イズウはそう認識した。ただ、四肢を天から糸でつるされているような奇妙な体勢で空中浮遊をするような老人は未だかつて見た事がなかったから、老人のような姿かたちは仮の姿ではないかと本能的に悟ったのである。

老人のような者の口がもごもご動く。人間のするような発声法には聞こえなかった。

「ヴィクターのテのモノか？。もしそうならば、ヴィクターにヨウがあるからアンナイしろ。」

しゃべった。正体不明の人物はイズウの正面斜め上三十度の空中でピタリと止まり、まるで道でも聞くようにイズウに話しかけた。

イズウはヴィクターという名を聞いたことはなかった。

「ヴィクターなど知らん。ここはベクトルⅡモリア様の館である。」

気味の悪い場所違いの訪問者にはさつさと去ってもらいたいといゾウは思っていた。だが、その老魔物は引かなかった。

「ナンだ、やはりヴィクターのヤカタだったのではないか。おいコゾウ、あまりふざけたことはイわないことだ。」

イズウはこの老魔物が痴呆であると勘違いした。知らないと言っているのかえって納得されてしまつては、困るばかりである。

「ふざけているのはお前だ。お前のようなジジイをベクトル殿に合わせられるかつ。」

ベクトルがそう言つて魔剣の切っ先を老魔物に向けたとき、老魔物の腕は大きく弧を描いてイズウに何かを投げつけた。握りこぶしほどの大きさすらないが、確かにイズウに向かって真っ直ぐ飛んでいった。

「ア、アウア……。」

老魔物の投げた何かはイズウに当たったが、投擲して武器になるような重さも速さも感じられなかった。で、あるのに、イズウはそれを喰らつて茫然自失と立つたまま何かを呻いている。

老魔物は、呆れたような顔をしながら地に降り立った。

「オロカモノのイナカモノめ。あやつのVECTORというナは、ベクトルともヴィクターともヨめるではないか。どうしてワタシがイナカモノのハツオンにアわせてやらねばなんのか。マツタくもつてフユカイだ。」

イズウの意識は先程よりも覚醒の方向に戻りかけていたが、もはや老魔物に逆らう気が起きなかった。

（何か術を仕掛けられたらしいが、もう手遅れだろう。抵抗する気

が起きん……。)

老魔物はイズウに最後の一押しを加えた。

「ハヤクアンナイしろ。」

イズウはもはや自分の言葉を自分の意思でコントロール出来なくなるほどに、正体不明の術に支配されていた。

「か、……かしこまりました。」

イズウはこの言葉を吐き出したあと、操り人形のように老魔物を館に引き入れた。

勝負あり。イズウ、鉄鬼に次ぐ二度目の敗北であった。

老魔（後書き）

今回出てきた老魔物についてですが、彼のカタカナ交じりのセリフはどうだったでしょうか？。もし、読みにくいところのご意見をいただくことがあれば、修正させていただきます。

蟲術

イズウは呆けた顔をしたまま、老魔を連れてベクトルの研究室に隠されていた秘密階段を降りていく。もちろん、イズウの意思ではない。操られていた。

その階段、及びその奥の真の研究室は、魔法研究者としてのベクトルにとって最も他に知られてはならないトップシークレットであった。

魔法の溢れる魔界ではあったが、魔法に関する能力者の情報共有意識、ましてや学会のようなものは存在しなかった。定期的に戦乱が始まる魔王選定システムは、魔物たちに敵味方の別を極端に意識させたのである。

できるだけ優れた能力や味方を独占しようと極端に偏った行動原理は、初代魔王による『選定』以来、魔界に宿命付けられた呪いのごときものであった。

魔導師の世界は特に閉鎖的気質が強く、一子相伝に近い方式を採っていたために、同じ師にいた弟子同士ですら命の取り合いが日常茶飯事であった。また、情報秘匿の技術は魔法のみならず、話術、催眠術、妖術など、あらゆる方面に向かって進化していった。

つまりは、魔導師の世界はごくごく原始的な情報戦争時代を永らく展開していたのである。

それはベクトルにおいても例外ではなく、彼がその心中で切り札と定めたいくつもの超高等魔法術式は、彼の編み出したいくつもの秘法によって厳重に秘密の研究室に封印されていた。

そのうちの一つはイズウを生み出した異世界依存型魔人製造法である。ベクトルのような優れた魔導師にとっても異世界に関わる技術は全くもって未開の分野であったから、その重要度は今後の発展性も含めて最重要であった。

また、それによって生み出された魔人の性能は、今イズウが使い

こなせているものよりもはるかに強力であり、ベクトルはイゾウの成長にかけている部分がある。イゾウには成長の余白が十分にある。だが、秘密の全てをこのまま謎の敵に持っていかれては元の木阿弥である。

「ふん、このワタシが、こそドロなどするものか。」

老魔は、イゾウがその場にいたために発動されなかったいくつもの魔術トラップの痕跡をせせら笑う。

「このテイドのブカにまでキをツカうトラップとはキのマワるものだな、ヴィクター。」

やがて、老魔の視界は薄暗い階段から地下とは思われないようないような空間、秘密研究室へと広がった。そのドーム上の空間の広がりの中に既に侵入者を察知していたベクトルが立っていた。

当然ベクトルは侵入者である老魔に対して迎撃準備を済ませているはずである、と、かすかに残るイゾウの意識は考えた。

だが、ベクトルは全く「化けて」いない。この出来事は彼にとつて危機とはとても呼べないものであったらしい。

（私が操られていることにお気付きでないのか？）

老魔の術が安定したと思われる現在、首から下の全てが老魔の支配下にある。老魔が仮にイゾウをベクトルにけしかけたらどうなるのであろう。などとイゾウは考えていた。

そんなイゾウの緊張をよそに、ベクトルは実に機嫌の良さそうな顔をして老魔を見つめている。操られているイゾウは、何がなんだか分からなくなった。

『お久しぶりです。ようこそいらつしやいました、ゴキブリ様。』
ベクトル、老魔双方に殺意どころか緊張すら起こらなかった。むしろ、友好的な雰囲気であるといっている。

老魔のほうは相変わらず何を考えているか分からないような無表情ではあるが、敵意はないらしい。

「よせよヴィクター。ワタシにはモハヤ、かつての『ゴキブリ』のシヨウゴウをナノるほどのチカラはノコっておらん。イマヤアリテ

イドのハタラきしかデキんだ。よって、ワタシのイマのナは『バグ』である。いいな、『バグ』とヨぶのだヴィクター。」
『老魔』改め、『ゴキブリ』改め、『バグ』は、敵意の無い鋭いまなざしをベクトルに向けた。かすかに微笑んでいるように見えなくもない。

イゾウはこの時初めて老魔を安全だと理解し、主人の客に対して無礼を働いたことを恥じた。

(それならば、今のこの仕打ちも仕方がないか……)

かつてイゾウが人間であった頃、イゾウの早とちりや一方的な感情によって多くの者がその暴力の餌食となっている。イゾウは酒癖の悪い男であった。イゾウはもちろんそんなことを一々覚えているほどまめな男ではないのであるが、今回の失敗は自分が操られるというただ事ではない恐怖体験をしたために彼の心に一生残ることとなる。イゾウはそんな都合の良いところのある男であった。

(やってしまったな……)

そう思ってイゾウがうなっていると、ベクトルはバグの後ろにいたイゾウに気が付いた。

『ところで、あなたの後ろにいるのは私の配下なのですが、見たところ蟲ムシを入れられているようですね。もしや、何か無礼を働きましたか？』

実際にそうであったから、イゾウは首から上だけがただ面目なさそうに首をしょげている。謝罪の言葉を述べたい所だが、肺までもがバグの支配下にあるために呼吸以上の動きが出来ないのである。発音などもつてのほかであった。

「ふん、ワタシはアンナイをコウただけだ。アンズるな、ムシは又く。」

バグがそう言うと、イゾウの首筋の辺りからミミズほどの大きさの蟲が剥がれるように取れ落ちた。先ほどイゾウに投擲して起こした術のトリックは、全てこのミミズ形の寄生虫にあったのである。

そのミミズを小指ほどの太さに拡大したような蟲は、パワフルか

つ繊細な動きで転がるようにバグの足元にまで移動した。人間の世界では見る事のできない特殊な生物の運動である。

バグはそのミミズのような蟲を手でつまみ上げ、そのまま口に運んで飲み込んでしまった。イゾウはそのグロテスクな所業に露骨に反応して見せたが、ベクトルとバグにとっては何でもないようなことらしい。

バグが用いたのは『コ蟲コ』の術である。

『コ蟲コ』は『コ』や『ムシ』と呼ばれる、太古の昔から暗殺や呪術に用いられたワーム系の虫のことである。蟲を利用する術の起源は毒のそれと同等かそれ以上に古いものとされ、原因不明の変死の立役者として歴史の裏に君臨し続けた。蟲は微生物の次に単純な脳の構造をしているために、その習性を把握さえすればいとも簡単に魔法で操ることが出来る。バグはその『コ蟲コ』を操るエキスパートである。バグのかつての称号『ゴキブリ』とは、腹部に大量の寄生虫をばびこらせたままその強靱な生命力で無限に増え続ける異界の怪物をモデルにした、コ蟲コ術師業界最高コの称号である。

ただ、彼はその見た目相応に老いているらしく、『ゴキブリ』の座を弟子に譲ったらしい、と後にベクトルはイゾウに語る。

そうこう言っているうちにイゾウに自由な体の感覚が戻ってきた。イゾウはまず、バグに対して非礼を詫びた。

「申し訳ありません。客人とは露知らずにご無礼を。」

バグは深々と頭を下げるイゾウに軽く視線を流した後、

「もうイイ。」とだけ呟いて、ベクトルの方向に再度意識を傾けた。

「ヴィクター、ダイシシヨウサマからのコトツテをここにツタえる。ココロしてキけ。」

どうやら、本題に入るらしい。

大師匠

ここでククリの動向について少し述べておく。

気付かぬうちに精神の一部を奇奇怪怪と混合されてしまったククリは、顔色が優れないということとでベクトルに自室で休んでいるように言いつけられていた。ベクトルの扱う魔法や薬品にあてられたという可能性もない訳ではないから、大事を足らなくてはならないという判断である。

ベクトルは自分の魔法や薬品の管理に徹底した魔導師ではあるが、自分の徹底にも万が一のことがあると常に疑いを持っていた。徹底に徹底を重ねるベクトルのまめな根性は、何も魔王候補の戦いのみ発揮されるものではなかった。

ここに、ベクトルの大きな才能の一部が垣間見えている。ただ、それはあまりにも人間的な長所であるともベクトルは考えた。努力する魔王などというキャラクターは、人間を滅ぼす役目においては不必要であるどころか、魔王という絶対無比のロイヤリティーに泥を塗る逆効果さえ生んでしまいそうだと考えられた。

魔王とは『予定された絶対者』であるべきだとベクトルは考えていたのだ。

ベクトルは、魔王とはどうあるべきかを哲学しつつ、魔王という伝説的立場をも野望の手段として利用できる男である。その成そうとすることは魔王候補の中でも随一を誇っていいほどの大きさであった。

ただ、そんなベクトルにも大きな見落としが一つある。それは、ククリが未来予知者であるということだ。ベクトルが想像しているような魔術的事故は、ククリの予知によって回避されていて当然のことであることにベクトルは気付くべきであった。

原因は、ククリの予知能力を超えたところにあったのである。そ

れは見過ごせない事態であるが、ただし、奇奇怪怪の幻術もさることながらベクトルはこの当時、腹心たるイゾウの教育に多忙であった。

イゾウはベクトルの教えを吸収してだいぶ強くなっていた。バグにこそ負けはしたが、そもそもバグはベクトルに匹敵する力量の術者であり、その若かりし頃に至っては完全に今のベクトルの上を行く暗殺者、蟲術師『ゴキブリ』だったのである。敵うわけがない。イゾウがその面前で醜態を晒す羽目になってしまったのも全く仕方のないことなのである。

地下研究室にいたベクトルは、イゾウと共に侵入者が入ってきたことを魔術トラップで感知し、鉄鬼に勝てるほどには強くなったはずのイゾウの失態に、ほんの少し落胆の表情を浮かべていた。

だが、その相手がバグであると他のトラップから察知した時には、危機感と落胆は放り投げたかのように消えうせてしまったのである。『ゴキブリ』殿が相手なら仕方ない。そう思わせることの出来るバグであり、イゾウなのであった。

話をククリに戻そう。

ククリ自身も当然、自身の不調がベクトルが予想したような魔術や薬品の漏洩による事故ではないかと予想していた。数日も寝ていないような、異様な虚脱感がククリを襲っていたのだ。現代でいうならばコカインなどの麻薬のような、精神、肉体のハイ・ロウに関わる薬品を間違って吸い込んでしまったものと考えるのが一番自然な診断なのである。

そんな時にはそれらを断ち切って養生するしかない。

ククリは床に入ると目を閉じ、速やかに睡眠した。だが、それこそ奇奇怪怪の思うつぼなのであった。

『寝ている間、こいつの体は俺のもの。』

ということであった。ククリが深い眠りについたことを自覚すると、奇奇怪怪に支配されたククリ、『ククリ』奇奇怪怪』は起き上がった。

た。

ククリ〓奇奇怪怪は、ククリに潜入していたときに研究所の大まかな内部構造を覚えることが出来た。ただ、ベクトルの秘密地下研究室のことは潜入中にククリが訪れなかったために知らなかった。このことがベクトルにとつて救いであつたともいえる。

『屋敷のどこにもベクトルがいねえな。どこだ？』

ククリ〓奇奇怪怪にはこれといった行動の目的はなかった。ただ、ククリの未来予知を逆流してククリの意識に侵入することが出来たために出来る、暇つぶしなのである。奇奇怪怪自身はそれをいつやめてもよかつたのだが、ククリに乗っ取っている現在でも、どうしてククリに自分が覗かれていたかが分からないままであつたから、半分は好奇心で動いていたといつてもいい。

それが、偶然自分が目をつけていた魔導師ベクトル〓モリアの弟子に行き着いたのはうれしい誤算であつたとも言えるだろう。ククリ本体の口からベクトルの名を呼ぶ声が聞こえた時、奇奇怪怪はこの偶然を大いに喜んだ。このアドバンテージを面白おかしく使いこなしてやろう。そういった悪戯じみた意地がククリ〓奇奇怪怪を動かしていた。

ククリ〓奇奇怪怪は、夢遊病患者のように館の中を歩き回る。

このように寝ている間でさえ脳を使われ、体を動かされ続ければ、本体の体、精神に不調をきたすのは当然のことである。

他人の体に乗っ取る術者というのは得てして身勝手なのである。

『おい、誰もいねえのかよ？』

地下研究室の三人は、そんなククリ〓奇奇怪怪の徘徊のを知る由もなかった。

バグが言う。

「では、言伝の封を開く。魔剣の小僧も心して聞け。貴様の主人の師であるのだからな。」

バグは懐中より短剣を取り出し、地面に突き立てた。すると、床が

断然盛り上がっては少しずつ人型らしきシルエツトへと変形していく。まるで地面から泥人形が浮き出してきたようだ。

十秒そこらで変形はおさまり、見てみれば、老いここに極まれんという老人の姿である。

どうやらこれが、バグの言う大師匠の姿であるようだ。老人の姿の魔物のバグでさえ、この老人の前には若々しく見えるほどに老いた姿であった。

『大師匠様、ベクトルでございます。』

老人の泥人形の前に跪くベクトルに合わせて、イゾウも跪く。だが、イゾウにはこれから何が起こるのかいまいちわからなかった。

何時の間にもやらバグも跪いている。はたから見れば、偶像崇拜の現場のようにも見えたかもしれない。かつての仲間内にキリシタンがいたからイゾウには見覚えのある構図であったが、やはり、どうにも異様にしか思われない。

すると、大師匠の人形が口らしきものを開いて声を発した。先ほどまで自分の稽古相手だったゴーレムと、同様のものなのだろうか、とイゾウは色々想像した。魔法ははたから見ているとファンタジックなのである。

「久しぶりだの、ヴィクター。うむ、バグもここにおるな。おお、懐かしいの。我々が術式を通してとはいえ、再開するのはここ十年は無かつただろう。なあ、バグよ。」

「ええ。十二年前、ヴィクターがあなたの元を立つたとき以来の再会にございます。」

バグは、さっきまでの気難しい角ばった話し方を丸め込んで答えた。「そうかそうか。もう、十年にもなるか。月日が経つのは老いれば老いるほど速くなるものよ。ホホホ。」

イゾウの見る限り、大師匠の人形は老木か何かのように枯れ果てた姿をしているのだが、その一挙一動を通してその強力な生命力が伝わってくるようであった。『強大な力を持った仙人』が、率直にイゾウが感じ取ったイメージである。分身を通してさえこれなの

だから、間近に会えばどんなにすさまじい力を放っているか分からない。

大師匠のほうも、イゾウの存在に気付いたようだ。何もかも見透かされているような、それでいて本質を問いかけるような眼で、大師匠はイゾウを見た。

その視線を感じて、イゾウは、

（このお方にはたとえ、命をかけても隠し事はできないだろうな……）

と、別に何も隠し立てなどする予定も無かったはずなのにそう考えた。この場にいると、人間であった頃、自分が如何に小さく、つまらない世界に生きていたのかが実感される。

思えば、魔界の中でも高位レベルの術者三人（内一人分身）の会談の傍らにいたのである。人間時代のかつての主『あのお方』ですら、その印象を薄らいでしまうほどのVIPの集いなのである。我々の世界観で言うならば、織田信長と安倍晴明と源義経が一同に会するほどとも言えようか。まあ、読者諸君は未だこの魔界についてはあまり詳しくないだろうから、おいおい彼らのすごさは説明することになるだろう。

「して、その魔人のような君は誰かのう？」

「拙者めは、こちらのいらっしやるベクトル」モリア様が配下。イゾウにございます。」

無理に恭しく言おうとしたせいで、そのような言葉を使い慣れないイゾウはタジタジである。

大師匠はそんなイゾウに微笑みつつ、透視に近い、ククリの予知眼とはまた異なった神眼を向けた。イゾウはその眼に、嘘偽りどころではない、今までの自分の過去全てを洗いざらい引っ張り出されてしまったような印象を受けた。実際にその通りであったが、押し入り強盗のような持ち出され方ではない。目の前に座っている相手に語り聞かせるように、イゾウは心を大師匠に開いたのだ。それは、悪用出来るものならば恐ろしい術であるといえるが、大師匠のおお

らかな心をもつてして始めて発生する神秘である。イゾウは貴重なものを体験した。

大師匠は一通りイゾウを見尽くしたのか、ベクトルのほうをちらりと向いて言う。

「ヴィクター、自らの父の研究をついに形にしたな。やはりお前は天才じゃ。お前を弟子にしてもう三十年は経ったが、今ほどお前の成長を喜んだ日はないぞ。ホホホ。」

大師匠が褒めたのは『異世界召喚』のことであったが、ベクトルは何か釈然としない表情で大師匠を見上げている。

『ありがたき光栄。全てはあなた様の教えと父の仮説があればこそ、です。』

ベクトルが大師匠に褒めちぎられているのをみて、バグは少し機嫌を損ねた。別に嫉妬心があるわけではない。大師匠が、自分とベクトルと一度に会す程の用事を早く聞きたかったのである。

実はバグも、大師匠の使い魔に分身の術式の封じられた短剣を渡され、

「ベクトルと共に開封せよ。」

と伝えられただけなのである。いくら年老いた師匠の指令とはいえ、腑に落ちない点がある。

大師匠はそんなバグの心も瞬時に読み取り、やれやれといった心持で表情を無にした。

大師匠の二人の弟子、ベクトルとバグに対して大師匠の分身は本題に移るべく、真剣な眼差しと共に口を開いた。

大 師 匠（後書き）

この話を書き始めてだいぶ経ちましたが、一回ごとの文の量が増えてきています。書きたいことも少しずつですが、上手く書けるようになった気がします。

ビギナーなりの感想ですが、やっぱり努力って大きいですね。

遺言（前書き）

さて、物語そのもののペースを速めてみようかと試みているのですが、果たしてこれが効をなしているのか、主観だけではどうにもつかみきれないところでもあります。

遺言

「わしは今日、殺されるだろう。お前達に最期に言葉を残して逝きたい」

大師匠の口からは、バグ、ベクトル双方にとっても予想だにできなかった言葉が発せられた。ベクトルは平常の表情のままではあったが、眉がピクリと動いた。

バグはその鋭いまなざしを一気に丸く押し広げ、驚きの表情を見せた。ビツクリ、どこの驚きではない。

「何を仰るのですか!？。あなた程のお方が死ぬ?。しかも、殺されるなどトツ」

バグは大師匠の力と知恵に、絶対の信頼と忠誠を誓ってきた魔物である。こんな事を言われていて引き下がっているわけがない。たとえそれが、大師匠本人の言葉であっても、である。

大師匠もそのことが分かっているからこうしているのだ。

「バグよ、お前の気持ちは痛いほど分かるが、ここは黙って聞いてはくれまいか。時間がない。わしも自分の死を予感したばかりで動揺しておる。まさか、これほどの怪物が人間に紛れておったとは…」

『人間』という言葉にベクトルが動く。

『人間、と仰いましたか。大師匠様は人間に殺されるのですか?』

「うむ、そのようだ。どこから魔界に忍び込んだのかは分からんが、わしが死を覚悟するほどの化け物が、わしの結界をぶち壊しにしてこっちに向かってきておる」

暢気な語調で大師匠は答える。彼にとっては死が恐ろしいものではないのかもしれない。

「そんな馬鹿な」

バグのこの言葉が、一番その場の緊張をよく伝えているように思える。

ほんのしばらくの緊張と静寂が走る。三秒程度のことであったが、イゾウには何倍もの時間に感じられた。

『ではお師匠様、我々は助けに向かわなくてもよろしいのですか？。まるであなた様には助かる気が更々ないように見えます』

死の間際を自称する恩師に対してこれまで冷静に対処できる弟子がいるだろうか。ベクトルは大師匠を救出に向かうつもりのようにだが、全く平常の表情と言葉である。

「いや、来てはならん。お前とバグの二人であっても、今のままではその人間に返り討ちにされてしまうじゃろう」

『そのような恐ろしい人間が、あなたを殺しに来るのですね？』

「そうだ」

顔を真つ青のバグの後ろにいたイゾウは、この世界に人間が他にもいることをはじめて知った。自分だけがこの特別な世界に来ている、訳ではなかった。イゾウの中で『魔界』あの世説』ほぼ定着しつつあった。魔界と異世界召喚については散々ベクトルが解説したはずだが、イゾウには理解できなかつたらしい。

ベクトルは、別の救出案を考えた。

『では、魔法であなた様をこちらにお連れするのは？』

「ならん。わしは相手に既に遠隔魔法でマーキングされておる。よいか、わしを助けようとは思うな。そんなことのためにお前達を集めたわけではない」

大師匠の形をした土くれは、大師匠のわずかな焦りまでをその表情に反映していた。「本当に時間がない」と、言わんばかりである。誰も大師匠に逆らえなかつた。

大師匠の遺言が始まった。

「バグよ。お前とは実に長い付き合いであったな。師弟とも主従とも言いがたい関係だったが、お前が『ゴキブリ』として働いてくれたおかげで助かったことばかりだ。あと、ゆめゆめわしの敵討ちなどは考えるなよ。いいな、お前はわしの死によって自由となるのだ」

バグの眼に涙がうつすらと映ったのにはベクトルだけが気付いた。突然のことではあったが、大師匠の来るべき死は、どうしようもない未来だということを悟つての涙であった。

大師匠はバグのことを「師弟とも主従とも言いがたい関係」と言ったが、バグにとっては、大師匠はその親に相当する存在であった。大師匠が木っ端魔物の童だったバグを引き取ってから大よそ一世紀。このような形でどちらかの命が尽きるとは思っていなかった。

ただただ、大師匠の言葉にうなづくことしか出来ない。

「そして、ヴィクターよ。お前とはバグほどの長い付き合いではなかったが、お前の才能の末恐ろしさだけはきちんと見抜いたつもりだ。だが、それだけでは人間を滅ぼすというお前の野望は果たせぬだろう。最後に、お前に宿題をやる。久しぶりの魔法研究課題じや」

『宿題、ですか？』

「そうだ。しかも、わしですらこの一生を使って解けなかった『宿題』、難解で、強力な魔法がこの魔界に一つだけ残っている。それを読み解くことが出来たのならば、お前は人間を滅ぼすことが出来るじやろう。」

その魔法とは一体何か。イズウとバグにはわかりようがなかったが、ベクトルと大師匠にだけは秘密の暗号のように通じ合うものがあったらしい。こんなときであるが、バグはベクトルと大師匠の間に自分の知らない秘密があることにひそかに嫉妬した。

『分かりました』

「お前は本当に賢い子だ。もう何も心配はいらんだろうな。」
そう言うと大師匠は一息をついた。ちらりと目を移すと、そこにはイズウがいた。

大師匠は、バグとベクトルに対して言うことは全て言い尽くしたつもりだった。だが、このイズウを見て何かがつつかえるような思いがした。イズウに何かを感じたのである。

「君、もう少し近くによってはくれまいか。もう少しよく見たい」

大師匠の視力を老人のそれと同じだと思っではならない。大師匠は姿こそ老いていたが、老いをほとんど克服していた。老いて見えるだけで、若い魔物の体の中身と見比べても劣らないほどである。

イゾウを近くに寄せたのは近眼だからではなく、その魂の質を見定めるためであった。

「面白い魂じゃのう、おぬし。イゾウ、だったかな？」

「はい。」

大師匠はのっそりとベクトルの方を振り返る。やはりその目には死の影などは感じられない。

「ヴィクターや。イゾウ君は魔界をまだよく知らないようだな。

彼をを部下としておくつもりならば、こんなところにじっとさせておいてはならん。一年か二年ほど、旅に出させてやるべきだ」

「いや、しかし……」

「ホツホツホ。死ぬ間際にこんな話をするのもなんだが、彼には光るものを感じるぞ。お前とイゾウ君の組み合わせはこれから先が楽しみになるほどに興味深い」

あくまでほがらかな大師匠であったが、そこにバグが割って入る。

「大師匠様、そのように暢気でいらっしやらないでください。あなたのいうことが本当ならば、あなたはもうすぐ……」

この世の悲しみの全てを背負ったような顔をしてバグは立っていた。死を恐れぬ大師匠も、普段の無表情な怪人としてのバグとのギャップに大きく心を動かされた。

「いや、すまなかつたな、バグ。本当にすまない」

大師匠は複雑な気分であるが、自らが先ほど判断したように、自らの死は免れぬものと確定していた。それに対して出来たことは、痕跡を残さずに自分の分身をバグに届けることだけである。

だが、よくよく考えてみなくても、遣り残したことが多くあるよ
うな気がしてくる。

自分はまだ死ぬべきではないのではないか？、無理だと悟った今からでも出来ることはないのだろうか？。若かりし頃のように疑問

と意欲が湧き上がるような気さえた。

残される弟子達のために、せめて来る敵に一つでも傷を負わせようという思考にまで大師匠がたどり着いたとき、大師匠の口が開いた。

「もう時間がない。さらばだ諸君、達者でな」

三人が引き止めるような間も無く、大師匠のゴーレムはぴよんと飛び跳ねると内側に畳まれるようにして小さく集まり、やがて一つの塵となってしまった。

三人はそれぞれ、悲しみ、好奇心、困惑に心を支配されたまま、秘密研究室の沈黙に立ち続けた。

遺言（後書き）

都合により、まことに勝手ながら来週はお休みとさせていただきます。

魔王軍大將軍の記録　く大師匠とベクトル　その一

大師匠様とお近づきになれたバグ様との一件と『ククリ』奇奇怪事件』は分けて語ることが出来ないものでありますから、どこで私の回想を挿入しようかと迷っておりましたところ、ここに至ってどうにも詳しい説明が必要な場面に行き着いてしまったようで、中途半端な形でのお話となってしまいました。

拙い話者である、この私めの不手際に違いありません。申し訳ありません。

それはそれとして、とりあえず、私の知るベクトル殿のルーツについてお話しようかと存じます。

大師匠様との死別はベクトル殿にとって重要な出来事であったようである、バグ様曰く、

「あの一件が間違いなく、魔王ベクトルを生んだ一番大きな要因である」

と言わしめたほどです。

あの時が大師匠様との最初で最後の機会となってしまった私にとっては、永遠に理解できない事であります。皆様にとってもそうでしょう。なにせ、あの頃のベクトル様は全くもって無名でいらっしやいましたし、大師匠様に到っては二、三世代は前のお方なのですから。

ですからせめて、まず、私が知りえた大師匠様と出会う前のベクトル様についてお話ししようと思うのです。

そもそも、皆様は魔王様の生まれをご存知でしょうか？

そうですね、代々魔王という役職に就くような強力な力をお持ちの方は、たいてい有力魔族の家柄から出るのが概ねだったようです。種族的に偏りの多い構成となっているのでございます。

例えば、強力な魔力と肉体、そして不死性を持った『吸血鬼』の一族は、今までの五十五名の魔王のうち、およそ三分の一となる十

六名を輩出しています。

『奇奇怪怪』と後に義兄弟の杯を交わすこととなる『大黒天』も吸血鬼の宗家の出身でありましたから、今もその勢力は衰えを知らずと言えましよう。

そんな種族的な要素の大きく現れる（『血の戦い』らしい）魔王『選定』であります。ベクトル様に限ってはご存知の通りどの種族においても正統とされない、悪く言えば『雑種』の生まれでございます。人間界では亜人と呼ばれる種族系統です。

ベクトル様ご自身は気になさらなかったことではございましたが、人間帝国との戦時中は魔王様の種族に関する誹謗中傷が水面下を飛び回っていたように思われます。

特に、人間の血が混ざっているということが保守的な者にとって格好的になったのでありましよう。

ベクトル様は、生涯の最初の15年間に、亜人として人間界で暮らしていたと仰っていました。ここで一言に亜人と申しましても種族血統的な意味で他の種族との交わりを持つていたというだけでございますから、種族的に劣るとか、そういうようなことがあるわけではないはずなのですが、どうにも雑種は劣等であるという迷信じみた差別意識が魔界にも人間界にもあったようでございます。魔界に住むものには人間界との交わりを、人間界のものには魔界との交わりを疎んじられ、非常に肩身の狭い思いをされていたようでございます。

また、当時の人間界における亜人の扱いは使い魔よりも悪いほどで、亜人差別というものが横行していたと聞いております。

人間帝国に『バテレン』が現れたためだとベクトル様は仰っていました。

ベクトル様の人間憎しの思想は、こうした亜人差別を温床として育まれていったのではないかと思えます。ベクトル様はよほど人間の汚い部分に打ちひしがれ、自らに流れる寸分の人間の血すらも恨

まれたのでしよう。

ベクトル様の人間廃滅への野望は、先の戦争で皆様も当然ご存知でしょう。ですが、ほんの少し運命が狂えば、その矛先が魔界に向いたかもしれません。ベクトル様は魔物であると同時に人間でもあり、魔界も所詮は排他的なものだと私も近頃分かってきたのです。

それはさておき、ベクトル様のご両親はエルフと亜人の夫婦であらせられたようでして、亜人の父君は大師匠様の弟子でいらっしやうったそうです。恐らくバグ様と同期の弟子であらせられたのだろうと思います。お父様もバグ様も、大師匠様も既に故人でありますから、事実の確認のしようがありません。

ですが、どうやらベクトル様の父上こそが今の私を生み出した『異世界魔法』研究の第一人者であるというようなことをベクトル様から聞いたことがあります。

魔界から異世界魔法を盗み出した人間帝国がその技術を本格的に軍事利用しようとした際に耳にしたことでありましたから、ベクトル様のそのお言葉がどのような意味を持っていたのかは当時の私には分かりかねましたが、なんとなく今は分かります。

保守的で排他的な性質が人間と魔物に通底するように、自由奔放で世界の枠を飛び出すほどの開拓的な思考もまた、人間、魔物の双方に持ちうるものであり、たまたまそれについて深く考えさせられる境遇にあったのが、亜人やエルフのような中立の方々であったのです。

大師匠様から受け継いだという可能性もありますが、ベクトル様と父君とは多少方向が違えど、亜人的なアンチ保守主義的立場にいたところが変わりないと想像してみれば、やはり、『異世界魔法』は彼ら親子のものだったのでしょうか。

彼らは、人間と魔物の関係をどうにかして変えようとしていたものと思われま。

とは言え、これ以上のことは私には知りようもないことでもあります。いつか、ベクトル様の口から直接お聞きできる機会があればよ

いのですが……。

魔王軍大將軍の記録　く大師匠とベクトル　その二下

今こうして振り返ってみると、大師匠様とバグ様、そしてベクトル様の御三方は魔界最強の師弟集団でございました。

魔界を意のままに操ることの出来る大看板、『魔王』。魔界の裏家業の中でも最高位の仕事屋の一つであり、数十億もの蟲たちの頭領である蟲術師『ゴキブリ』。そして彼らを育て上げ、異世界魔法の基本理論を立ち上げた偉大な『大魔導師』。

よくよく考えてみれば、最強の組み合わせだったのです。この偉大な組み合わせが魔界を束ね、纏め上げることになっていたらどれだけ素晴らしかったでしょう。恐らく、大師匠様によって新たな才能がいくつも魔王軍の中から発掘され、バグ様の蟲の情報網によってつながった、最強の軍団が出来上がったのではないかと思います。いや、そんな私の浅はかな想像をもっと、はるかに凌駕する魔王軍が出来たに違いありません。

しかしもちろん、これは実現せずに終わってしまいます。大師匠様は人間に殺されてしまったのです。これは魔界にとって戦の勝ち負け等よりも重大な損失であったことは間違いないでしょう。

大師匠様は当時既に百五十を越える大高齢ではありましたが、大師匠様には単なる、敵を殺す、殺さないの域をはるかに超えた秘密をお持ちだったと推測しています。

それは、バグ様やベクトル様のような優秀と形容するのすら十分な程の伝説的な面子を育て上げた教育手腕からもいえることです。よくよく考えてみれば、ベクトル様も、バグ様も、魔界の種族的ヒエラルキーでは圧倒的弱者であったはずです。

ご存知の通り、魔物にとって、いかに純粹で優れた血統をもって生まれるかが何より重要であります。魔界を牛耳る者達のほとんどは、一族の魔力や能力、体力を実に閉鎖的な形で現在に至るまで継承し続けてきました。

それに比べて彼らは、魔人の肉体を無条件で手に入れた私よりも圧倒的に弱い雑種の肉体、魔力を持って生まれた方々のはずです。そんなお二人がどうして私が手も足も及ばないような強者の高みに君臨していたかといえ、全ての元は大師匠様の弟子教育にあったはずなのです。

もちろん、私が今どう足掻いたとてわかり得ないことではありませんが、お二方が大師匠様を表面に現れている以上に慕っていられたのには、私を知る大師匠様をはるかに超越した大師匠様の秘密が関わるものであることはほぼ間違いないのです。

彼らのことを考えるに、どうにか、どうにか彼らの過去の時間に歩み寄って行きたいという感情が私を強く締め付けます。

しかし、蚊帳の外の人間の、幻想や妄想に塗れた欲望であることは自明で、胸の奥に封殺するにふさわしいものであります。人間であった頃はこんな事、考えもしなかつたでしょう。不思議なものです。

とにかく、ここまで話してきて申し上げるのも文字通り、『申し訳ない』のですが、結論は、

『私ごとときにはあの方たちのことは窺い知れない』
ということなのです。

ただ、ベクトル様のみは今もご存命であり、大師匠様の師弟の命脈は既にククリへと受け継がれています。我々はその師弟の姿を見ることがのみ、かつて魔界にあった最強の師弟の姿を窺い知ることができないのではないのでしょうか。

ああ、結論と呼ぶべきものもない雑談に話の腰を折ってしまいました。そろそろそれも置いておいて、元の本編の話に戻ることと致しましょう。

魔法使いの海

無論、大師匠はみすみす殺される気などなかった。

大師匠には長い年月を戦い抜いてきた知識と経験、そして膨大な魔力がある。さらに後述の、この上ない地の利があった。自分が殺される未来がなんとなく目の前を揺らいでいるのを第六巻が知覚しているが、そのような悪い予感ですら払拭できる、安定した自身がその胸の内に大木のように泰然と存在していた。

大師匠はベクトル達とのゴーレム通信が切れるや否や、老人らしいしわがれた声で呪文を唱えだした。すると、大師匠の住んでいた小さな庵は彼方へと消え、青黒い深海のような空間が大師匠を包んだ。大師匠の頭の上には太陽のような光源が浮かび上がり（実は太陽である）、やがてその深海の世界に天地が設けられ、大師匠の望む迎撃の支度が大規模に施されていった。彼の世界で天地創造が擬似的に行われたのである。

大師匠が住むのは魔法使いの海という、次元の狭間に浮かぶ真空空間を改良して作られた亜空間である。そこは魔界と四次元的な位置関係にあり、開拓者である大師匠によっていかようにも作り変えられる夢の空間でもある。

例えば、仮に大師匠がこの世界の中にもう一つの魔界を作りたいと願ったとしても、必要なデータや設定さえあればそれは可能なことなのである（何らかの情報のコピーが必要であるからクローンに近い）。

繰り返すが、魔法使いの海と呼ばれるこの空間においては大師匠がルールだったのである。

本来ならば、外敵がここに攻め込んできた所で意のままに排除できるはずであるし、そもそもこの空間を開拓できるほどの魔力を持つ大師匠は超高等位術者なのである。殺されるわけがない。

大師匠自身、自分が人間に殺されると予言はしたが、誰に、どの

ように、何故負けるのかは全く闇の中のもののようにうかがい知ることが出来なかった。仮に、この時ククリが奇奇怪怪にマインドジヤックされていない正常な状態であったとしても、別次元にある（四次元的な意味で）この世界で起こりうることを知るのとは不可能だったのではないだろう。

とにかく、『魔法使いの海』で大師匠が負けるなどということはありえないことなのである。

そして、大師匠の世界はいまや大師匠が考えうる最高の要塞へと変貌を遂げていた。

大師匠が若かりし頃に考案し、自ら机上の空論と揶揄してお蔵入りにしたいくつもの超高等かつファンタジックな術式が、そこにはいとも簡単に存在できた。例えば、永久に自らの運動を止めることなく一定のエネルギーを供給し続ける『永久機関』。永遠に回転し続ける無数の歯車の列が、あらゆるエネルギーの形式で大師匠に力を与え続けているという荒唐無稽な大技が、大師匠が念じるだけで実現するような世界である。

大師匠は、自分を殺しに来るであろう人間を、この永久機関の生み出す膨大なエネルギーで焼き尽くしてしまおうなどと考えていた。大師匠にだって魔物らしい魔性が少なからずある。ただ、大師匠はそれを理性でコントロールできたから、今まで生き残れたのである。しかし、このような茶目っ気にも似た魔性の高ぶりは、大師匠自身が振り返るに、この7、80年の間に起こらなかつたものである。それは、大師匠のこれまでの生涯150年の内の7、80年である。大師匠自身も意識しないほど深刻に、静かに、老いは進行していたのであった。

『魔法使いの海』につながる最高傑作の結界が人間にたやすく打ち破られた』という、一方で最大限に大師匠自身のプライドを傷つけた事実が、大師匠をほんの少しだけ若返らせ、即ち全盛期の時間を一端とはいえ、取り戻させたのである。大師匠自身、複雑な心境で動いていたが、割と楽しんでいた。

あと数分もしないうちに算段を整えて刺客が現れる。大師匠は、心の底辺でそれを心待ちにしていた。まるで恋に焦がれる若者のようであった。

後になってから考察すれば、大師匠は死の直前のほんの少しの間、至福のときを過ごしていたといつてもいいだろう。力強さへの回帰。それは、魔物の本能的な快楽でもあるのだ。

もちろん、そんなことを口に出してしまえば、大師匠の死を極度に悼んだバグのクモの糸で絞め殺されてしまうわけであるのだが、このことを語らずして、後に『バテレン事件』と呼ばれる大師匠暗殺事件を語ることは出来ない。

さて、大師匠の『魔法使いの海』につながる呪具は壺の形をしていた。古来から壺は『壺中の天』ということばがあるように、他の次元や擬似世界との接点（出入り口）に使われることの多い道具である。イゾウが生まれたときの『異世界召喚』においても魔方阵の要素に取り込まれていた。

魔法使いの海につながる壺には大師匠がその技術の全てを注いだ結界が為されており、結界というよりもバリアーと言う方が相応しいような、破壊的で圧倒的な障壁がそこに存在しているはずであった。

そのバリアーをいとも簡単に破壊し、壺を取り囲んで中の異世界にまさに乗り込まんとしている人間が三人いた。

そのうちの一人が、後の人間帝国の、最初にして最後の邪帝、『バテレン』であることは、当然この時は誰も知らなかったことである。

伴天連登場

人間界と魔界の間には、それを隔てる大きな山脈がある。この山脈はいくつもの噴火口を持つ活火山である。人魔双方にとつて有害な瘴気を撒き散らし、魔物の住む『魔界』と、人間の住む『人間界』とを大まかに分断している。

この世界に住む人間たちは、魔物のみだりな侵入を妨げてくれるこの霊峰を『聖なる壁』と呼んで崇拜した。

『聖なる壁』は、この世界の気候、生態系を大きく二つに分けてそびえている。ちなみに、エルフの森は壁の魔界側に存在する。人間との通商のために人間界側に居住区をおくエルフの一派もいるが、その安全は保障されていないと言っている。ただ、人間の『宗教』においては、エルフは魔性を克服した魔族であるという記述がなされておられ、そのため、エルフに対して人間は比較的友好的であった。少なくとも、魔物と血を通わせている亜人達よりは、格別に扱いが良かったと思われる。

人間達は『聖なる壁』の向こう側、即ち魔界のことを忌み嫌い、打ち勝つための文明が栄えた。政事、宗教、文化、技術、そのすべてがアンチ魔物である。

そして現在、人間界ではいくつかあった小国家がある勢力によって一つに纏め上げられようとしている状況であった。それは後の『人間帝国』、魔王軍とこの世をひっくり返す大戦を起こした大帝国である。

彼らは、魔物の全てを滅ぼすまで人間が一致団結するという原則の下に集まり、勢力を拡大していた。

帝国は、人間による人間のための人間の世界を渴望する一種の邪教にとりつかれていた。亜人差別はこの魔王候補の戦の頃には『亜人弾圧』と呼べるものにまで発展していたのである。

「弾圧が、近い日に虐殺へとつながるのではないか」と、この頃

にはほとんどの亜人達がそれを恐れて魔界に亡命していたという。魔王となった後、ベクトルは彼らを手厚く保護した。

さて、この物語の真髄に迫るがごとき疑問であるが、「何時、何故、この人間対魔物の歴史がこの世界に生まれたか？」は不明である。

決定打となる歴史的資料が人間界にも魔界にもなかったからである。「なぜないのか？」と考え、歴史を紐解いて探求しようとしたものもいたが、何故、充実した資料が残されていないかすら不明であった。歴史書が魔物に焼かれた、というレベルのものではない断絶の徹底なのである。

この世界に住む生きとし生ける者が知りえたことは、まるで彼らが、何者かに戦うように命じられて同じ檻に入れられた剣闘士のようだとだけであった。

だが、戦うこと自体が双方にとっての究極目的であり、存在理由となってしまうてはもはやどうにもならない。

そうして、いつから始まったか分からない人間と魔物の戦いの歴史は更けてゆくのである。

さて、いま少しの間この世界における人間達の立場について説明したのは、これから新たに登場する人間の立場をある程度明らかにする必要があったためである。

その人間は名を『バテレン』と言った。

温和そうな表情を顔に浮かべたこの中肉中背の男は、二人の間を伴って『魔法使いの海』に進入しようとしていた。もちろん、『魔法使いの海』が魔界中でもっとも危険な場所だということを承知しているの行為であった。

バテレンに付き従う二人の人間のうち、片方の従者風の男は、名を『四六』という。四六は、バテレンに懇願するような目で何か、ものを言っていた。

「バテレンの旦那、本当にこのまま入ってしまうのですかい？。この中は相当やばいですが、勇者に防御の術式でも張らせときましようよ。」

四六に刹那意識を向けられた少年は、『勇者』と呼ばれた。彼は貴族とも、騎士とも言い難い、儀式に扱うような実用性のなさそうな戦闘服を着せられており、顔に何の表情も浮かべていなかったから、精巧な人形のような印象を振りまいていた。

バテレンは四六の言うことを臆病者の無駄な気苦労だと一蹴し、さっさと乗り込むつもりでいる。

『愚か者め、お前のような小物が一人でここをうるついでいたのだたらとつくに死んでおるわ。相手は今のところ勇者よりも強い。だから私がこうしてここに来ておるのではないか。』

ひどい言い様であるが、これ以上バテレンの気に障ることを言えば自分などすぐ殺されてしまうことは分かっていた。

『そんなに嫌ならお前はここに残って、黙って帰り支度でもしておれ。』

一瞬だけバテレンの温和な目の奥から、蔑むような冷たさの光が放たれた。四六はそれを見ただけで、これから相手取る魔物よりも、いま自分が仕えているバテレンの方が凶悪で恐ろしいということを感じた。

四六がバテレンという男に仕えるようになったのは半年前のことであった。当初は人当たりが良い上に、暗殺者上がりである自分を良い値で雇ってくれる最高の雇い主だと思っていたが、この男について仕事をこなしていくうちに、この男のどす黒い野望に付き合わされることについて呪うようになっていた。

バテレンはこの時、未だ人間界統一を成し遂げていなかった『人間帝国』の、神祇長官の役割に就いていた。現代風に言い換えれば、宗教担当大臣とも呼べるだろうか。元々人間界でもそこそこのVIPの地位を確立していたらしいが、その裏で行われる怪しい活動については人間帝国上層部でも知る者は少なかつたらしい。

さて、そんな怪しい男が何故魔界にやってきたのか。

壺越しに感じる大師匠の力に対して臆病風に吹かれた四六に対して、バテレンは口を開いた。

『元々お前に期待などしていない。そんなに付いてくるのが嫌なら、もつと嫌になるように、これから戦う相手の話を一つしてやる。』
そう言つてバテレンはふふんと笑つた。

バテレンは饒舌を誇る男である。話すこと、話術で野望を果たそうとする妖物であると、後にイゾウに評された男である。四六に大師匠のことなど話す必要はなかったのだが、話したいから話すのである。四六がこれを聞いてどう思おうがどうでも良いと思いつつ、語りだした。

『お前、『坊主事件』を知っているか。』

「へえ、もちろん存じておりますとも。何しろ人間界中の書物がたつた一晩で盗まれ、その次の晩に何事も無かつたように元に戻されたという大事件。しかも、目撃された魔物は坊さんの姿で後になるまで誰も怪しむことがなかつたという……」

四六は大して興味がなかつたから、適当に色をつけて、授業を受ける生徒のように返した。無愛想にしていたら、次の瞬間には首が飛んでいる。

『ふん、所詮その程度の知識だろう。だが、この事件には色々と裏があるのだ、この私しか知りえない秘密がな。』

「はあ、それはまた……」

『それというのも、この事件の首謀者は一つだけ人間の書物に痕跡を残して去つていったのだ。それこそ、その魔物がたいそれたことをしてかしてまで探そうとした秘伝書なのである。』

バテレンはいかにも楽しそうに自分だけが知っている事実を曝け出しているが、この男のちよつとした感情の発露ですら油断ならぬことが後に判明する。この男に裏表がないと思つた瞬間には、この男の話術に未来の全てをがんじがらめにされてしまうことが確定するのである。

四六はこの男に媚びへつらう立場であったからこそ、この男のいう言葉を心の中で無視することが出来た。

それを知ってか知らずか、いや、恐らく知っているのだろうが、バテレンはそんなことにはかまわず語りつくす。もはや話を聞く相手などいらぬかのようである。

『しかもそれだけではない。何故その魔物がその書物を求めたか、何故痕跡が残ったのか、も大体予測がついておるのだ。』

「へえ、それはまあ……」

『それは、簡単なことだ。その秘伝書の内容があまりにも難解で、その魔物は読むのに全ての魔力を費やしてしまったのだ。』

「は？」

『お前のように暗殺や諜報にしか魔法を使わない輩にはわからないだろうが、本というものは少なからず人から魔力を奪うものなのだ。人が本を読めば、本の内容に対する解釈や想像によつて体内で魔力が消費され、その分の魔力が本に蓄積される。そのようにして魔力を蓄えた本が魔物や妖怪になることは珍しいことではないのだが、件の秘伝書というのは別格だ。それは、読むだけで人の心など破壊し尽くしてしまえるほどの難解で、残虐な書物なのだ。恐らく、私が長年求め歩いた、とある秘伝の術がその書の中に隠されているに違いない。』

「じゃあ、もしかして、これからぶち殺しにいく魔物っていうのが『坊主事件』の主犯で、旦那はその秘伝書を奪いに行く？」

『そうではない。秘伝書はその隠された場所から持ち出せないように結界が張られていた。仮にそこから持ち出せたとしても、勝手にもとの場所に戻る仕組みになっていたのだ。だから、その壺の中の魔物も、あえてそれをしないで元にそっくりそのまま返したのだ。』

勿論、この事件の犯人は若かりし頃の大師匠であった。この頃は有り余る魔力をこつこつと無茶につき込んでいたらしい。

四六は困惑した。

「旦那はじゃあ、何をしに行くんですかい？」

『それこそ単純明快だ。その魔物に秘伝書の内容の解説をさせるのだ。』

そう言つてニヤリとバテレンが笑つた瞬間、四六の思考は放棄してしまつた。目の前の男は、強大な魔物に対して教えを乞い、そのうえ殺すと言つ。そんな方法があるわけがない。失敗するに決まつている。

そう思つた四六は、壺の外側で見張りをしたいと申し出て、いつでも逃げ出せるようにすることにした。

無論バテレンは、四六がそうなることを予想しつつ話を展開していった。何の不都合もないといった顔で、勇者と共に壺の中に入つていった。

伴天連登場（後書き）

前書きと後書きの欄をどうにか生かせないか？と考えてみましたところ、実験的に本編の解説を後書きに書くことにしました。本当は本文に書くべきだった色々な設定を実験的に書き綴っていかうと考えています。

まず第一回である今回は、この作品の世界観についてです。

さて、舞台はよくある剣と魔法のファンタジックな異世界であります。この作品では出来るだけ我々が住むこの世界とドッキングした世界にしたいと考えています。

今のところ行き来できる方法は、ベクトルが用いた『異世界召喚』の魔法だけです。ですから、今のままでは向こうから呼ばれない限り行き来できないのですが、我々の世界からも向こうの世界に行くことのできる技術が開発されることとなります。世界観について秘密にしておきたい設定があるのでそこを伏せるように書きますが、その技術は我々がよく知る技術で、幕末の頃には無かったものです。

あと、ちよいちよいとファンタジー世界にふさわしくないアジア風の設定が飛び出したりすることもあると思いますが（蟲術とかは中国の術）、それもある意味秘密に関するヒントです。

とりあえず、我々の住む世界と異世界との関係について今話せることはこんな感じです。

挨拶の魔法

バテレンはこの時至って生物学的に普通の人間であった。この世界は魔法に満ち溢れているからだの人間でも学べば魔法を行使できるが、それでも人間は魔力、体力の面で大きく魔物に劣っていた。確かに卓越した話術は持っていたが、どちらにしても、この時バテレンが大師匠に対して命の取り合いをけしかけることは生存権の放棄と呼ぶべき駄策であった。

バテレン自身、自分が立てた策略が確実に成るとは露も思っていない。だが、自らの野望のためにはこのタイミング、魔王の勢力が分散し切ったこのタイミングに事を起こさなければならなかった。だから保険として、未だ『未完成』の勇者を非常手段として伴わせただのである。最悪でもこの少年を捨て駒にすれば、少なくとも自分一人だけは生き残れる算段があった。

勇者という少年については後にまた詳しく述べなければならないと思うが、今はとりあえず、

『バテレンの操り人形』

と、形容しておくにとどまる。彼が物語に関わるのは、ベクトルの魔王候補戦争が終盤に差しかかった辺りからであるから、随分先のことなのである。

勇者の体からは大師匠への警戒、殺気が溢れ出ていた。だがバテレンにはまだやりあう気はない。

『勇者よ、戦闘態勢を解きなさい。』

勇者はバテレンの指示に速やかに従った。

魔法使いの海につながる壺はみだりに入り込むことが出来ないように大長老の結界を以って封印されており、大師匠の望まないものは行き来できないようになっていた。が、現在は勇者の一撃によって引き裂かれており、誰でも出入りが出来るようになっていた。壺自体の構造は至って普通の壺と変わらず、地面の一段くぼんだ場所

に設置されていたため、バテレンたちは地面に開いた穴に飛び降りるようにして壺に入った。

壺の中は荒地だった。白色の土の大地のはるか上空に、巨大な青い月と太陽が見える。

『そう、それはまるで……』

と、バテレンが心の中で表現しようとした矢先、自分の体が思い通り動かなくなったことに気が付いた。勇者も同様である。

『畏か。』

心の中でそう思ってもバテレンは慌てなかった。結界を破るという無礼を働いた後であるからこれくらいの仕打ちは当然と言える、と踏んだ。

そもそも『結界』とは仏教用語であり、修行のために現実とは異なる状況設定のフィールドを作り出すことを言った。現在の日本で考えられているようなバリアー、障壁的な意味とはもとの意味が多少異なるのである。『魔法使いの海』は原義的な結界で、壺に張られていた結界は後者のバリアー的結界である。

バテレンの目測では、このバリアー的結界を無理やりにも突破しない限りは大師匠にはいくらか外から呼びかけても相手にされないだろうということであった。

事前のリサーチによれば、大師匠と呼ばれる魔物は来客をひどく拒む偏屈な魔物だという。力の無い者が大師匠をたずねようとしても、この結界によって門前払いを食ってしまうらしい。人間であればなおさら会うのは難しい。

勇者を同伴させた理由の一つにこの結界への対策があった。大師匠が死を予感した発端はバテレンではなく、勇者の一太刀による結界の切断を通して『勇者』という異質な力に触れたからであった。

ちなみに、大師匠という魔物についてほとんどの情報は、魔物に扮した四六が魔界に潜入して集めたものである。人間界から魔界に潜入する人間のスパイは珍しくない。20年も魔法の修行を積めば、

難なく魔物に化け、もぐりこむことが出来る。ただ、魔王候補クラスの魔物には変身が見破られてしまうので、そういったスパイが人間と魔物の戦いを大きく左右したことはなかった。

話は戻って、バテレンは、畏にかけられて体が動かないことをいいことに、次の手について縦横無尽に考えをめぐらせていた。元々正面から敵うような相手ではないことは四六の情報でつかんでいる。荒業であるが、何とか話術で自分のペースに引き込まなければ自分はずただの哀れな自殺志願者なのだ。バテレンは不自然な重力によって重い体から力を捻り出し、声を出した。

『突然の訪問をどうかご容赦くださいませ。ご高名な魔法使いであらせられるあなた様にお願いがございまして参った次第でございます。どうかこの呪縛は解いていただかなくても結構ですから、私めの言葉に耳を傾けてはいただけないでしょうか。どうか、どうか……』

まるで神に物を申すような言いぶりである。バテレンは謙れる限界まで謙って、大師匠が警戒を解くように言葉を紡ぐ。

すると、初めて返事が返ってくる。

「まあ、いいだろう。人間。そうまでして私なぞに何を望むのだ？ 言ってみろ。」

ふと前方に目をやると、そこにはリサーチしたとおりの姿かたちの大師匠が立っていた。

大師匠は第六巻に従ってそれまで姿を隠していたが、人間達の妙な謙遜に少々肩透かしを食った形で意気消沈し、姿を現わすことにしたのである。

また、このような者達に自分が殺されるわけがない、とも思った。むしろずっと頭ではそう考えていた。この程度の呪縛で身動きを封じられるような弱者ならば、たとえ『勇者』であっても恐れるには足らない。実にふくよかな慢心であった。

先ほど「大師匠意気消沈し」と書いたが、それでもその威厳に満ちた姿は脅威であった。魔王クラスであったことは間違いない。

だが、バテレンの持った感想はとても淡泊で、
『 良し、事の半分は成れり。』
というものである。

ここで警戒を緩めたことは、大師匠の生涯で最大の誤算である。
一度ペースを掴めば後はいかようにでも大師匠を口説き落とせる
自信がバテレンにはあったのである。

挨拶の魔法（後書き）

では、具体的に異世界（魔界と人間界）についてですが、まず魔界について。

本編でも書きましたとおり、魔物は人間とは異なる形態の社会を形作っています。

まず、普通の魔物社会のように魔王がその頂点にいます。魔王には絶対の権力があり、基本的に全ての魔物は魔王の言うことを聞かなければなりません。そして、有力者たちが魔王の命によって担当の地区を治める形の統治を行っています。

我々の言葉でだったら、『魔王型封建社会』とでもいえまじょうか。

普通人間の王権社会の場合、王の力というのはちよつとした拍子に落ちぶれたり奪われたりしてしましますが、魔界にはそれが絶対ではありません。魔法が法律として機能していて、ただの権謀術数では魔王に離れないように設定されているのです。『選定』もその一つで、大卒の魔法はすべて初代魔王が組み上げたと伝えられています。

また、魔王の大義名分は『人間撲滅』にあります。人間との因果の所以は今のところはつきりしていません。ベクトルは自身の胸の内に人間撲滅の意思を持っています。あくまでも個人的なものであり、うやむやになりかけているのが実情です。多分、ベクトルがそこにメスを入れることとなります。

帝国（前書き）

遅れました。次回も遅れるかもしれません。

帝国

時を少しとばす。

バテレンが魔界の奥地に隠された『魔法使いの海』に進入した日から一週間が経過した。

この時、バテレンは人間帝国教会の神祇官執務室で、魔界遠征中に溜まった雪崩のような事務をこなしていた。もちろんバテレンの魔界遠征は非公式の行動であり、自らの休暇を使って出向いたのである。その間に溜まった仕事に文句を言うことはなかった。

バテレンが所属する組織は『人間帝国』という新興国家である。役職は『神祇長官』、いわゆる幹部の地位であった。

魔法が存在するこの世界において、宗教と学問、そして技術はほぼ三位一体といった具合に混ざり合い、地球上では既に失われてしまった「身のある」神権政治が行われている。帝国教会はその実権のおおよそを握っており、大まかに『治安部』、『兵部』、『(魔法技術の)研究部』等のセクションに分かれている。

バテレンは上記の三つのセクションそれぞれの特性をかねた特殊部隊『クルセイダー』を創設し、無理やり『神祇長官』という役職に滑り込んだ成り上がり者であった。上層部の仲間入りをどうにか果たしているが、まだまだ、といった具合である。だが、帝国上層部の誰からみてもバテレンは野心に滾った男に違いないはずなのに未だ生きながらえているのは、単に運がいいとかそういった類ではなく裏工作において彼の右に出る者がいなかったためである。

『クルセイダー』。創設してまだ十年も経っていないこの小さな部隊が人間帝国のジョーカーとなるのはそこまで遠い未来ではない。

さて、『クルセイダー』副隊長であり、科学者でもある『源内』^{ゲンナイ}が、バテレンの執務室を訪れた。ゲンナイはひよろりと長い背に白衣と眼鏡を纏った研究者風の禿げ男である。ゲンナイは何枚かの印刷物をバテレンに渡し、バテレンが命じた『研究』についての成果

を述べ始めた。だが、その顔は成果を誇るような表情にはとても見えないものであった。

「申し上げます。例の魔物の首から例の情報を盗み出すのは失敗でありました。申し訳ございません」

バテレンは表情を動かさずに、しかし「、やっぱりか。」と言わんばかりの雰囲気の中、口を開いた。

『詳しく』

ゲンナイは白衣の薄汚いポケットからフィルムのようなものを取り出した。このフィルムは人間界で新開発された『対象の脳から情報を引き出す』魔法がこめられている。

「こちらが例の『大工匠』の脳髓を記号化した結果です。ご覧の通り、魔法技術に関する知識を司るマホツカイ領域の65パーセントがきれいにだめになっています。恐らく例の魔法の記憶はここにあったものと思われれます。『月の書』の解析結果から予想される魔法的情報量と近似しています。」

『なぜ、例の魔法に関する記憶だけが駄目なんだ？』

バテレンは食いかかるようにゲンナイに問い詰めた。大工匠を「殺してしまった」バテレンにとって、奪い取った大工匠の首（正確には脳髓）だけが『例の魔法』へのとりあえずの手がかりである。

「ここから先は推測の領域に甘んじることになりますが、恐らく例の魔法は大工匠によって何者かに既に継承してしまったのではないかと思います」

『継承だと？』

「はい。魔物の魔法使いがよくやる手で、自らが生み出した魔法に『それを使う権利』と言う概念を発生させるシステムです。かいつまんで申し上げれば、魔法の製作者、及び許された権利者以外の術者を跳ね除ける結果、まあ、魔法版の著作権のようなものですな」ほんの少しだけバテレンの口元がゆがんだ。悔しさに顔をしかめたのではなく、口元がにやけたのである。

『と、言うことは、『例の魔法』に関する情報は未だ断絶はしてい

ないのだな。』

「はい、恐らくは読み取れた記憶の中に登場するベクトルⅡモリアと言う弟子がそれではないかと思われませんが、こやつ、情報によれば魔王候補のようです』

『モリア！』

「何か心当たりが？」

『奴の息子だ、ゲンナイ。あの馬鹿な魔導師の息子だ。一度会った事がある、そう、『ベクトル』、『ケミカルⅡモリア』の息子……ほんの少しの沈黙の間、バテレンの中でバラバラだった情報のかけら達が指向性を持って動き始めた。そして、とうとう一つの結論に行き着いたのである。』

『結局これは私とケミカルの戦いだったのだ。そうか、奴の息子……』

ケミカルと言う男を知らなかったゲンナイは、ただ指示を仰ぐことしか出来ない。

「いかがなさいます？。神祇長官殿？」

バテレンは即答した。

『今すぐ勇者を呼べ。出来るだけ早く、私はもう一度魔界へ行かねばならないようだ。』

「しかし、勇者は無理です。先日の怪我の治療中でまだ動かさせません。こんどこそ洗脳が解けてしまえます」

『だったら『死神』君を起こしてつれて来い。今すぐにだ』

「はい、直ちに！」

バテレンからただならぬ気迫を感じたゲンナイは、『死神』という男の眠る冷凍室へと向かった。

執務室にはバテレンの力に満ちた独り言が響く。

『奴の、ケミカルⅡモリアの息子……。フッフ、私は今度こそ手に入れて見せるぞ、究極にして至高の禁断魔法、『異世界召喚』を！』

帝国（後書き）

今回は魔物の定義、種族的な構成についての設定の補足をしようと思っていたのですが、さっき思いついたアイデアのせいで大幅に変わってしまいました。という訳で、今回は補足をお休みさせていただきます。すいません。

暗殺

魔法使いの海は使用されていない劇場のように静かで、殺風景で、物足りなかった。バグが呆然と無数の蟲の死骸の中に立ち尽くしている。大師匠は殺されてしまったのだ。

しばらくして、バグは慟哭した。

大師匠によつて救われた自分の命、大師匠に与えられ、自ら磨いた蟲術は一体何のためにあったのか。自責の念と、それにはるかに勝る悲しみに駆られていた。

バテレンの大師匠暗殺事件の後半部分を、バグを基点に暴く。

というのも実はバグは間に合っていたのだ。

この時バテレンはまだ穏便な手段で大師匠から情報を聞き出すつもりでいた。来るべき『その時』までは波風を立てたくはないというのがバテレンの考えである。

『と言う訳でして、私は魔物と人間の根源を探るべく例の魔法を求め歩いてきたわけでございます。』

話の後半の方では、大師匠はほとんどバテレンの絡みつくような話術に捕らえられていた。純粹な話術には魔力も殺気も必要としない、ある意味で魔法使いにとつて天敵に近い性質を兼ね備えていた人格としてはほぼ完成に近い境地に至っていた大師匠でも絡めとつてしまう威力はバテレンにしか恐らく出せないだろうが、やはり話術の『術』としての性質がこの変則的な『術の戦い』の行く末を決めたのである。

結果、バテレンの言ったこと、即ちバテレンがついた会話に盛り込んだ数々の綺麗ごとの嘘っぱちを大師匠は信じてしまった。これは毒を服するよりも危険な行為であるのだ。

あともう一息、とバテレンが心の中で念じかけた時のことである。魔法使いの海の入り口から大量の蟲が煙のように立ち上り、後か

らバグが現れた。大師匠の言いつけを破って駆けつけたのである。

「待てバグ。こやつらは敵ではない！」

哀れにもバテレンの言葉に囚われてしまっていた大師匠にとって、感じ取っていた自らの死の予感はずいぶん老いた年寄りの勘違いであり、バグの参上は勘違いによって踊らされてしまった取り越し苦労でしかなかった。

「何を馬鹿なことを仰いますか！。その少年、こやつは勇者ではありませんか！。このとち狂った力の波長が分からぬのですか？。

大師匠様！」

魔界トップレベルのバグの殺気に当てられて、勇者の力の波長も増す。抑圧された『何か』が目覚めかけていた。バグは周囲の虫を集め、ほぼ全力に近い戦闘体勢をとった。

まさに一触即発という言葉にふさわしい場が出来上がってしまった。しかし、思わぬハプニングではあるが、バテレンにとって混乱は好都合であった。

バテレンは悪巧みを思いつき、それをすぐさま実行した。乱を以って乱を制す。さらに場を混乱させようという策である。

バテレンは叫んだ。

『勇者よ、あの蟲使いは敵だ！。あの者を始末して大師匠殿をお守りするのだ。』

「了解いたしました。」

機械の様にそうとだけ言葉を吐いた勇者は、嬉々として背中にかけた剣を抜き放ってバグに飛び掛った。

バテレンの予想外の言葉に大師匠は

「待て。誰もここで力を使ってはならぬ。争ってはならぬ。止まれい！」

と、ここで力づくで止めていればまだよかったものを言葉で呼びかけて事態を收拾しようと試みた。この面子の中で一番強力であった大師匠が、この混乱の最中、恐らく彼の生涯最大であろう隙を生じて見せたのである。

言葉に感情を乗せて放つということは魔法使いにとっては消費活動に近いものである。大師匠にとってはそれが大きな大きな隙となった。

そして、バテレンが虫けらのように謙ってまで欲していたものはまさにこの隙だった。もちろん見逃さなかった。

一瞬の後、バグが口から放った甲虫と勇者の剣が交わった瞬間のことである。バテレンは口を小さくすぼめて、『何か』を大師匠に向かつて放った。

それは大した攻撃ではなかったが、大師匠の虚を見事につき、胸を貫いた。バグは、その攻撃があまりにも小規模なものだったためにそれに気がつかないまま勇者と衝突した（むしろこの時バグが大師匠を気にかけてたまま戦っていたら、勇者によってバグの本体は切断されていただろう）。

第一次のバグと勇者の衝突は引き分けであった。勇者の持っていた剣は折れ、相対した甲虫も角が折れ、シヨック死して転がっていた。

第二撃に備え、勇者は攻撃魔法の構えを取り、バグの口からは第二第三の甲虫弾丸が這い出してきていた。手抜き無しの命の取り合いである。

その影で、バテレンは止めを刺すべく無数の『何か』を大師匠の急所に叩き込んだ。バグが乱入してきた時点で話術のみで事を達成するのは困難であるとバテレンは判断していた。元々掴み様の無かったバテレンの目的が既に大師匠暗殺へと変わっていたのだ。死ねや死ねやと心に念じながら、大師匠を攻撃していた。

老齢の大師匠は一撃目で心臓と肺に深刻な打撃を受けて既に瀕死状態となった。いくらこの上ない地の利があるうと、強大な魔力があるうと、不意打ちをまともに受けて気絶しているのならば話は別である。まさしく絶体絶命。今更だが、これがこの世界における『術の戦い』なのである。

暗殺（後書き）

忙しくなったので、後書きに補足を書くのは不定期とさせていただきます。

怒り

「で、あなたが勇者に足止めを食っている間に大師匠様は殺され、首も持ち去られたと……」

バグは、大師匠の残された亡骸を魔法使いの海跡地に丁重に葬り、ベクトルの館に戻ってきていた。

咽るような無数の種類の薬品が立ち込めた部屋で、イゾウの肉体のメンテナンスを行っているベクトルが冷徹に言い放った。冷たい怒りが横たわっていた。だがそれは、バグに対してとも、人間達に対してとも取り難い複雑な怒りだった。もしくは大師匠への怒り、だったのかもしれない。

対するバグの怒りは単純かつ、どうにもしがたい熱を持っていた。彼の精神を支える無数のクモの糸が融けだすような熱である。

バグは既に隠居の身である。その老体と精神に不似合いな怒りは、我々人間には測り得ない具合で歪曲しているに違いない。少なくとも、基本的に単純で直情な魔物元来の粗暴さを体現するかのような態だった。

「今すぐに力を貸せ。あの人間を人間界まで追って、殺す。」

バグは我を見失っていたといっていだらう。彼の体のあちこちから蟲の這いずり回る音が響く。彼と一心同体である蟲が一齐に殺意に燃えているのである。バグの体内に寄生している蟲が暴走するだけでも下手すれば魔界を巻き込む一大事になるだらう。ましてや彼が放し飼いにしている蟲、その蟲に寄生されている者らが暴れだすような事態も起こしかねない怒り様であったから、ベクトルは念のために、この場でバグを始末する支度もしてはあった。

そういう意味ではベクトルの怒りの方がバグの怒りよりも残酷で、情けないものだったかもしれない。彼が父に近い存在を失うのは二度目であり、怒りへの対処の術をよく知っていたのだ。そんなベクトルにとって、大師匠がバグにとりどれだけ大きなウェイトを占

める人物であつたかを差し引いても、このバグの怒り方は全く駄目だつた。

「ベクトルよ、貴様何故そう平然としていられる？。大師匠様に拾われた身である我々が敵を討たずして何が……」
今のバグには落ち着けという言葉は逆効果だろう。

「今のあなたにそれが出来ますか？、バグさん。貴方の蟲の大半は勇者に焼き払われてしまつたではありませんか。」

「何を、この期に及んでそのような戯言を抜かすとは、大師匠様に神童とまで称された逸材もここまで落ちぶれたかつ。」

治療用の台座に寝かされていたイゾウは今すぐにもここを逃げ出したいと思つた。バグには蟲一匹で恐ろしい目に遭わされたのだ。起こつたバグなど恐ろしくて目も当てられない。

「私は今は勇者とは戦いたくない、いや、戦うべきではないのです。今の私の敵は魔界中の魔王候補たちなのですよ。」

決してベクトルは臆病風に吹かれてそんなことを言う訳ではない。ベクトルは本気でそう考えていた。

「バカなことを、勇者と戦うのは魔王になつてからというのか？」
「その通りです。」

ベクトルには、魔王になつてからどのように人間と戦うかについてプランがあつた。それは即ち、今まで一度も決着の付かなかつた歴代魔王と歴代勇者の戦いに終止符を打つためのプランである。だが、このように勇者が早くから現れ、魔界に襲撃をかけてくるという事態は前例にない、前代未聞の出来事であつた。

ベクトルは表面上はバグの人間界追討に反対であつたが、もしかしたら自らの目で勇者を見極め、プランを練り直さねばならないかもしれないとも思つていた。バグの怒りや大師匠の死に惑わされてはいけないという思いと好奇心と打算がせめぎあつていたのである。

ただ、ベクトルに断言できることが一つあつた。「この代の勇者は何かがおかしい」ということである。バグの報告からも、今回の事件の流れからも、それは色濃く見受けられる。そして、勇者を従

わせる男、『バテレン』という存在にもただならぬものを感じていた。

ベクトルの中で色々な思案がなされている中、バグはいきり立って殺意はさらに増していた。

「いい加減にしるベクトル。ゴキブリと異名で恐れられていた頃ならともかく、今の老いた私だけでは倒せない相手だということは私も分かっているのだ。だから、協力しろ。」

バグが論調を僅かに変化させたのを感じ、ベクトルはようやく決心がついた。

『ふう、分かりましたよバグさん。私もお供させて頂きます。ただ、その代わりに今はまだ勇者に手を出さないでください。それだけ承って頂けるのなら私も人間界へ参らせて頂きます。』

バグが本当に憎いと思っていたのは、下手人のバテレンのみであった。それに勇者と戦うべきは魔王のしるしを持つものだけであるということも頭の中では分かっていた。

「すまない。」

そう言うとバグの放っていた殺気は空気にとけ、再びイゾウと問答していたときの無愛想な爺さんに戻った。ただ、この男は今や復讐の鬼となっていた。

治療を済ませたベクトルがイゾウに言う。

『イゾウ、お前にこの館の留守を任せる、ククリを頼むぞ』

「心得ました、ベクトル殿。」

イゾウの内心には、

「ただの留守番か」

という思いが無かったわけではないが、鉄鬼との対峙、バグとの問答において失敗続きだったために仕方ないものとして心に受け入れた。

追跡（前書き）

現在自分はとても忙しい状況下にありまして、中々このお話に必要なだけの時間を費やせないでいます。がんばりますけど、もしかしたら……

追跡

聖なる壁と呼ばれる火山地帯が有毒ガスを噴出し、悠然とそびえているために魔界と人間界が分断されていることは前にも述べた。ただこの山を越えた行軍は不可能に限りなく近く、周到に用意済ませた者でも安全に通過できるかは未知数である。

だが、ベクトルとバグという規格外の魔物二人を相手にしてはその有毒ガスも世界を隔てる脅威としての地位を失ってしまうのであった。

勇者一行追討に向かうベクトルとバグは、ベクトルが発明した小型防毒結界発生装置によって有毒ガスの瘴気が立ち込める危険地帯を涼しい顔をして通り抜けていく。

今、彼らの表情が涼しいと述べたが、冷たいと言った方ががふさわしいかもしれない。彼らは敵討ちという名分によって動かされているのである。

聖なる壁を越える行程のおおよそ半分を踏破した辺りである。ベクトルとバグは追討について話し始めた。

『ところでバグさん。下手人の居場所は蟲でマーキングしたのですか？』

「いや、既に蟲は焼き払われてしまったようだが、匂いで分かる。

奴らはここを6時間前に通過した、そんな匂いがする……。急ぐぞ」

可能ならばベクトル達はバテレン達が人間界に逃げ切る前に始末をつけたかった。魔物は基本的に人間界の地理に疎い。人間界まで逃げ切られては追跡は困難なのである。

歴史の中で何度も繰り返されてきた魔界と人間界の戦争の過程で互いの地理的な情報が大きなカードとなることは証明されているのである。地図など本来はそうやすやすと手に入るものではない。戦争において実地の計測を試みた者もいたが、それらの記録は古く、しかも正確ではない。

この時魔界が保有していた最新版の人間界の地図はなんと、百三十年前にスパイによる偵察によって作られた『短冊人界図』という地図である。その名の通り短冊程度の縦長の範囲しか調査が達成できず、町一つ載っていない、すなわち聖なる壁付近の山と川の分布しか分からないという半端な地図である。

それほど双方、特に人間界は地理情報に対して堅かったのである。ベクトルにとって不思議だったのは、バテレンと名乗った男がいかにして魔界の地理を知り、大師匠のことを知り、魔界に侵入したかということである。人間界から魔法によってかろうじて魔界に忍び込んだ斥候が多くいるのは知っていたが、彼らごときに幻覚作用のある植物や特殊な現象を引き起こす魔界の地理状況を把握できるわけではないのである。しかし、把握していなかったのならば奴らは大師匠のところにはたどりつけてはいないはずなのだ。推測の域を出ないが、魔界から裏切り者が出た可能性も考慮しなくてはならない。とにかく、敵は魔界の地理をどうにかして知っていたということとは間違いはなかった。

魔界のことをよく知る人間というのは決まって魔界にあだなす存在である。また、勇者がその代表格である。

大師匠が殺されたという時点でももちろん大不幸なのであるが、ベクトルは、それをさらに上回るような不気味がこの先に待ち構えているような気がしてならなかったのである。

「急ぐぞベクトル、この辺りで奴らは休憩していたらしい、匂いが一気に近くなった。戦闘の支度をしろ。」

一方その頃、バテレンも追っ手の存在に気が付き、勇者に戦闘準備を命じていた。

だがバテレンは、自分を追い討ちに来るだろうと予測される魔物を（先ほど戦ったバグも含めて）恐れてはいなかった。

「あのときの蟲じじいかな。勇者よ、今度は手加減せずに焼き払いなさい。」

「はい。」

「この場が歴史的顔合わせになることは後の者が見れば当然のことであるが、当事者達はそんなことも露知らずに各々、自分の殺しの準備を済ませるのであった。」

追跡（後書き）

PIXIVでベクトルという名前の魔物が出てくる漫画を見つけました。タイトルもそれとなく似ていたのです。『魔王』というワードも入ってたし。

どうせただの偶然でしょうけど、興奮しました。

バテレンの布陣（前書き）

とんでももなく遅くなりました。とんでももなく忙しかったのです。すみません。

バテレンの布陣

バテレンは勇者に命じた。

『勇者よ、かつて教えたようにやるのだ。お前に力を与えている何者かに対して、もっと力を要求するのだ。お前を勇者たらしめている運命からありつただけの魔力を借り上げ、纏め上げて追っ手にぶつけてしまえ。』

「はい。」

『いい子だ。おい四六、勇者の準備が出来るまで足止めだ。』

勇者は腕を前に構えて呪文の詠唱を始めた。だが、それは周りに言葉として伝わる事がなかった。詠唱を用いる魔法には、詠唱自体に詠唱の中身をカモフラージュする幻聴が発生するように、巧妙に言葉を並べ替えた高等なものが存在する。勇者の唱えていたのはそれである。

四六は今回の遠征で初めて勇者に接したので、勇者の魔法攻撃がどのようなものかよく知らなかった。勇者としての素質は見た所申し分ないが、果たしてあの蟲の怪物から逃げ切れるだけの戦力がこちらにあるのかは、はなはだ疑問ではあった。

この期に及んで、本当に、どうして大師匠暗殺があそこまで簡単にかけてしまったのかが不思議でならなかった。

「旦那ア、勇者の小僧は何の呪文を唱えてるんですかい？」

バテレンはいつの間にか不機嫌な空気を纏っていた。ベクトルと同様に、バテレンも宿敵の存在を感じ取っていたのかもしれない。

『お前の知ったことではない。いいからお前も戦闘の支度をしろ。ククク、どうやら先ほどの蟲ジジイ一匹だけでは済まなさそうだぞ。』

この言葉に四六は絶句した。バテレンの得体の知れない予想は四六の知る限りでは百発百中であった。それが計算なのか魔法なのか、それともただの勘なのかはわからないが、どうせこの男の命令に従

う以外の道はいつも閉ざされている。しかも、バテレンの「ただでは済まない」は、本当にただでは済まないのである。

四六は負っていた荷物を邪魔にならない物陰へと降ろし、顔の下半分を覆っていた防毒用のマスクを外した。四六の戦闘形態の都合上、息をする度に空気の擦れる音が出るマスクは不要、むしろ邪魔な物だった。

毒ガス噴出のピークである山頂付近はすでに超えていたが、ここは未だ有毒ガスの吹き上がる危険地帯。四六は息を細く、長く、できるだけ毒による被害が最小限となるように努めた。

四六は自他共に認めるほどの小心者であったが、こと戦闘に関しては一職人であるということは気に留めておくべきである。

四六は懐からいくつかの呪具を取り出し、組み合わせ、小さな『結界発生装置』を組み立て、装備した。そして、それが完了した途端に四六の姿は消え失せた。

先ほど四六が立っていた辺りを向いて、バテレンが言う。

『蟲ジジイも新手の魔物も恐らくお前の手には負えん相手だ。攪乱するだけにしろ。お前の結界装置はまだ向こうには渡せない、最新技術だからな。』

返事はなかった。だが、逆にそれに対してバテレンは満足していた。

そして、思い出したかのように、

『おっと、首は取り返されんようにせんとな、ククク。』

と言ったとき、バテレン一派の周りにはただ勇者の魔力の唸りが響いていた。

ベクトルの布陣（前書き）

来週は多分休みます。ごめんなさい。

ベクトルの布陣

ベクトル達は、バテレンの後方約1km地点の辺りまで迫っていた。双方ともそのことは分かっていた。

この程度の間合いは、魔法使いにとつては在るようで無いに等しい距離である。攻撃、偵察の手段は星の数ほど存在するし、瞬時に相手の懐に飛び込む為の魔法を用いる事もできる。術の戦いにおいては一撃必殺の空間である。

ベクトルはこの場所から強力な先制攻撃を加えて手早く殲滅することを望んでいたが、バグはそうはいかなかった。バグは、バテレンに地獄の苦しみを与えて鬪り殺すことを強く望んでいた。

バテレンの生け捕りが目下の目標だったが、下手に手加減して未知数である勇者に対して隙を見せることも好ましくない。実は、ベクトルは攻め手にあぐねていた。しかも、魔王でないベクトルが先走って勇者を殺す権限も『選別』によって剥奪されている。

また、肝心のバグは体中に殺気を漲らせており、策を提案したところで通る見込みもあまりなかった。今は冷静な上つ面を見せてはいるが、敵の前でも同じとは限らない。

本来バグに与えられた『ゴキブリ』の称号とは「感情無き殺し」の象徴とまで謳われた、死神と同義の言葉であったが、今のバグを見る限りその頃の面影がなぜか感じられない。バグがひどくもうろくしてしてしまったのか、それともゴキブリ時代には魔法が何かで感情をコントロールしていたのか、はベクトルにすら測りかねる。

敵に関しても、味方に関しても、何か不自然な力が働いているようにしか思えないような事態が進行していた。

ベクトルは、どこかで無力な自分を少し情けないと思いつつも、バグに提案した。

『バグさん。ここは策などは構えずに力押しでいきましょう。ですが、くれぐれも勇者は殺さないようにお願いします。』

バグは元よりそのつもりだったが、ベクトルの口からその判断が出るとはあまり思っていなかった。

「分かっている。が、いいのか？。私はともかく、お前の魔法は近接戦闘向きではないだろう？」

「いえ、問題は皆無です。父の遺産が、この前の戦闘で完成したんです。」

「この前……、鉄鬼か？」

「はい。」

ベクトルが言っているのは、鉄鬼の攻撃を完全に無効化した、手品のように魔王水と自らの体を入れ替えた魔法のことである。あの戦いには実戦における魔法の最終動作確認という意味もあったのである。もちろん、あれがただの入れ替わりの手品よりもっと恐ろしい魔法であったことは、これから分かる。

「驚いた。ケミカルの奥義をこんなにも早く……、まあいい。ならば、行くぞ。」

「はい。」

次の瞬間、ベクトルはスポンジに吸収される液体のように地面に沈みこんだ。同時にバグは背中から巨大な蜂の羽を生やして、飛翔した。

戦闘開始である。

先手を取ったのは魔界サイドである。

勇者『第一段階』(前書き)

イズウの影が薄いですね。

勇者『第一段階』

そもそも勇者という存在が人間の大量に知れ渡ったのは勇者の出現から3世紀も後の事だった、と、バテレンは自らの手記に書き綴っている。

また、こつとも書いている。

勇者の精神構造とは驚くべき形で代々受け継がれていることが分かった。かつての私の常識からは想像もつかないことだが、なんと、精神の遺伝子が魔法によって構築されているという実験結果である。確か、私が祖国を出て宣教の旅に出た頃に、ようやく親と子が似るのは遺伝子というもののおかげだということが世間に知れたわけだから、この世界の方がはるかに魂の学問が進んでいるといえよう。私は感動している。

それもこれもあのゲンナイという男……。私が持ち合わせていたフリントロックをいともたやすく複製、改良、生産し、『私の』人間帝国をあそこまで大きくしてくれた。果てには勇者の分析、洗脳、『死神』の製作。これも神の思し召しという奴だろう。あのような天才は中々いないだろうに……。

『魔界研究の一環で、歴代の勇者に関して記述を集めていたバテレンは魔界の書物から勇者の精神構造に関する魔道書を発見し、そこに記されていた魔法によって勇者を操っていたのだ』という事実と異なる記述が、魔界の正史として何故か今でも残されている……。

それはさておき、勇者というのは人間の中で一番強い存在である。それは何故かというと、人間のなかで一番強いものが勇者となるからである。

よく巷では、勇者という存在を陰りのない、活発な好青年として

描く表現が多いがそれは自然なことではない。勇者にふさわしい力量、素質をうまれ持った人間を、世界を満たしている魔法が、あるべき勇者の人格へと変えてしまうのである。

そのことに薄々勘付いた勇者がいることを匂わせる記録が残っていることも興味深い。

例えば、今から六代前の勇者、通称『アンチ』は、『私の心は勇者のものだ。私のものではない。本当の私は、魔物と接している勇者らしからぬ、あの自分なのである。』と、最期の言葉を残している。

『アンチ』は歴代勇者の中で唯一魔物をパーティに加えていたことで知られ（後に「唯一」ではなくなるが）、人間と魔物の関係を考える上で一つの重大な特異点として物議を醸している。

『アンチ』の例のみならず、勇者という存在は先天的に押し付けられるようにして得る人格なので、時として大きな揺らぎを生ずる。そこに目をつけたのが、バテレンを含む幾多の魔導師達である。勇者と人間の共存という不安定な人格のマインドコントロール（もしくは打倒）が、実は人魔を問わずに人気を博していたらしい。

先ほど間違いであると指摘した、バテレンが魔界の書物から勇者洗脳の糸口を見つけたという説も結果的には間違いなのであるが、あながち的外れというわけでもないのである。

勇者とは魔王の対として設定されている存在であることは自明であるが、その精神的な内容は実に異なっているのである。

さて、以上のように色々と言者を語ってみたところで、バグと勇者の戦いの何がわかるというわけでもない。いわゆる蛇足である。

それはさておき、派手に蟲の羽音を撒き散らしながらバテレンにつっこんでいったバグは当然勇者に阻まれ、勇者と戦い始めた。ベクトルの書いた筋書き通りである。

大師匠暗殺現場では本領を發揮しなかったバグの蟲術であったが、今回はその成果を遺憾なく發揮した。

「行けい、我が子らよ！」

バグは体のありとあらゆる穴（毛穴レベルで）から無数の蟲を噴出した。正確に言うと、目に見えない微細な蟲の卵を空気中に排卵したのである。

その様はまるで黒い炎がバグを火種として燃え上がっているような光景であった。さすがの勇者もこの光景に生理的嫌悪を禁じえない。

対して勇者は先程からの詠唱で高めていた魔力を開放し、気柱を上げた。勇者の用いる基本の魔法、『光』属性の魔法である。また、勇者は光属性に加えて『風』属性の魔法を併用して自らの身の回りに風の障壁を構築した。蟲の卵の接近を防ぐためである。

この時バグが生成した卵は全て寄生虫の卵である。成長すればイゾウを操ったときの蟲のように、強力な支配力を持つ蟲となる卵である。例え勇者であっても体への侵入を許せばただでは済まない代物であった。

咄嗟にそれらの危険性を察知し魔法障壁を作ったことは、勇者の優れた戦闘的感性を示唆している。

しかし、これで勇者は魔力と意識の一部を常に障壁生成に当てねばならない。勇者はバグの出方をうかがう体制をとらざるを得なかった。形勢はバグに少し傾いた。

「成程、大した奴だ。わが甲虫達の大半を焼き払っただけのことはある。だが……」

バグは、今度は両手の指先を勇者に向けた。すると、バグの両肩が膨れ上がる。よく見てみると肩の脹らみの中を蟲がはっている様子が伺える。

勇者は危険を察知し、剣を抜いた。

「どこまでも勦の鋭い奴だな。」

次の瞬間にはバグの十指からそれぞれ蟲の弾丸が飛び出した。甲虫のような節足タイプではなくワーム型の蟲であった。本来『蟲』という字はこの系統の蟲を指す言葉である。

勇者は咄嗟に『炎』の魔法を剣から放出し、障壁を越えて進入してきた弾丸を焼き払った。

続いてバグは第二、第三と弾丸を次々と射出し、対して勇者は光の弾丸で反撃を開始した。激しい中距離戦闘がしばらく続くであろうことが予測された。

（一度に三種類もの属性を使いこなすか。準備さえあれば私にも出来るが、あれほど感覚で魔法を操れる者は魔界にはいないな。魔法使いとしての天性の素質は私よりも勇者のほうが遥かに上か……）

地中に身を潜めていたベクトルは、隙を見計らいながら二人の戦いを、特に勇者を観察していた。魔界一の大魔法使いの弟子であるベクトルにとつてすら、勇者の魔法の基本能力は驚異的であった。勇者は魔法に愛されているのではないか。

この世界における魔法とは、種類に限らずあらゆる物理、精神、呪術的エネルギーを他のエネルギーとして変換し、行使する行為であると定義される。我々の世界では発電や電気の使用などがその分類に当てはまる。

基本的に、魔法に使われるエネルギーの出所はその魔法の情報に於いての核心である。前に述べたような魔界における魔法情報の非公開性はこの、エネルギーの出所＝魔力の秘匿の為であると言っても過言ではない。要は、魔力とは手品の『タネ』なのである。

だが当然、手品を披露するためには『タネ』だけではなく道具や暗示、舞台設定などの準備が必要であるのと同様に、魔法にもそれ相応の準備が要る。

ここでベクトルが見抜いた勇者の恐ろしさとは、魔法行使においてその段階をスキップしつつ、膨大なエネルギーを自由自在に操れるという魔法使いとしての才能であった。そしてベクトルは、その魔力の正体が『精神エネルギー』であるとも予測していた。

前述の通り、勇者の持つ『明るく』『活発で』『正義感の強い』人格は魔法によって規定されている。だが、それは勇者という『人間』の心を阻害しないように『何者か』に上手く調節されて受け継

がれてきたものであり、同時に強力な精神エネルギーの温床であることが現在の研究で明らかになっている。いわば勇者という人格は精神エネルギーの原子力発電所なのである。

この時既にベクトルは勇者攻略の方法をいくつか編み出していたが、勇者には未だ隠された力が隠されているということとは、歴代魔王たちの戦いの歴史から感じ取っていた。とにかく、今はまだその時ではないということだ。

ベクトルはバグと勇者の戦いが膠着状態になった頃を見計らってバテレンの真下のあたりの地中へと移動した。

こちらでもまた、一つの戦闘が始まろうとしていた。

奇術（前書き）

遅くなりました。しばらくはこのペースが続くものと思われま

奇術

『おお、勇者の戦闘が洗練されていく。あの蟲ジジイは中々の経験値だな、今の勇者の邪魔はしたくないものだが……』
バテレンは口元を小さく歪めて余裕の表情を崩さない。

（地中の魔物を先に片付けておくか。）

寄生虫の卵が飛び交う修羅場で、バテレンは、まるで物見遊山の如く構えていた。この余裕は人格的な意味での器によるものではなく、既にベクトルの存在を感知していた上でのブラフであった。後手の先を取る戦法においてバテレンの術は最適であることが後に分かる。

地中からバテレンを標的にしていたベクトルは、バテレンの体が膜のようなもので覆われていることを発見した。広く使われている風や真空、熱等による障壁ではない、全く未知のエネルギーがバテレンから漏れ出していたのである。ベクトルはこのエネルギーに並々ならぬ好奇心を疼かせた。魔導師の性、ベクトル「モリア」の性であった。

魔界と人間界とは、魔法の研究は全く違う性質を持っている。まず社会構造が人間と魔族では異なるし、精神文化と実学の中間を行く魔法という学問は、それを有する共同体の性格を色濃く反映するのである。敵対し合っている多民族同士が同じ研究を有するわけがない。当然、人間対魔物のシチュエーションにおいては互いが互いの手の内を想像すらできないまま戦うのである。それは魔術師にとっては一種の喜びであり、それが人間と魔物の戦いを陰から助長しているとも言えるだろう。

それはそうとして、ベクトルは典型的な魔界の術師であった。つまり、興味津々なのである。

ベクトルはもはや大師匠暗殺と今の戦闘を切り離して捉えている。合理的に割り切ったというよりは、大師匠暗殺がこの戦闘のための

演出であるかのような錯覚を覚えていたからである。大師匠という存在はベクトルにとって第二の父親のような存在であったのだが、もちろん一種の親離れはとうに済んでいる。それも含めて大師匠の死には実感が湧かなかった。

そして何よりもこの一件に欠けていたのは事態の進行の自然さ、つまり、道理である。

ベクトルは不思議に思っていた。特に大師匠の遺言である。

どうして大師匠は、バグに『不自然』で『手遅れ』なメツセージを託したのだろうか。大師匠は魔界の中でも奇人変人に数えられるレベルの魔族らしからぬ性格を持っていたが、それでも魔導師である。その魔法や行動において意味のないことなどありえない。その不自然さこそがメツセージに意味を持たせ得るのである。

ベクトルは確かに、先ほど述べたようにこの戦闘と大師匠のことを分けて考えていたが、それでも迷いや戸惑いが無かった訳ではない。

後世の魔王ベクトルに対しての評価は『冷徹』だとか『合理的』だというイメージが前面に押し出されているくらいがあるが、魔王も所詮は生物であり、迷い、間違いも犯すものなのである。

ベクトルにもしもこの迷いが無かったら、バテレンはこの場で魔界に囚われ、野望が潰えていたかもしれない。だが、現実はそのようならなかった。

ベクトルは魔法で身の丈程の毒針を取り出した。この毒針には、魔界の食人植物が生物を仮死状態にし、体内に保存しておくために用いる猛毒が塗られている。また、さらにベクトルによって仮死効果強化のまじないが施されており、毒針の名が恥じるほどの危険性を持つ武器であった。

ベクトルは魔王水の時もそうだったように、戦闘において薬品を頻繁に用いる。これはベクトルの父、ケミカルⅡモリアから受け継いだ戦闘方法である。

ベクトルは毒針を片手に地中を音も無く移動し、いよいよバテレ

ンへの先制攻撃に移る段となった。

ここで、ベクトルが先程から用いていた『地中に潜る魔法』について説明しておく。これは、『融合』の魔法である。外界の無生物物体と自らの身体を、『定義』を操作することによって融合させる高等魔法であり、ベクトルがバグに語った『習得した父の遺産』の一部である。

つまり、これは人間界には無かった全く未知の魔法であり、人間であるバテレンには感知するどころか予測すら出来ないはずなのである。

ただ、そこが甘かった。だが、そこが術の戦いの面白さとも言えるような。

バテレンがにやけた顔をして放った一言が状況を一変させた。丁度ベクトルがバテレンの足の裏に毒針を突き刺そうとした瞬間、

『見つからないとでも思っていたのか、馬鹿めっ！』

次の瞬間にはベクトルの胸部に寸分違わず衝撃が送り込まれてきた。先制攻撃はバテレンのものだった。ベクトルが警戒していた未知のエネルギー、大師匠の意識を不意打ちで刈り取った際の術と同じものである。

ベクトルは地中で吐血した。青みがかった血液が融合解除され、地面に吸収されていく。

『間抜けな魔物だ。尻どころか頭すら隠れていないじゃないか。』
そう言ってもう一発。今度は鳩尾の辺りを殴打されたような感覚がベクトルを襲った。今度は血の混じった吐瀉物を嘔吐。意識は朦朧とし、大地との融合も解除されかかった。

全ては地中で起こっていることなのに、バテレンはそれが手に取るようにわかるらしい。残虐を好むバテレンの本来の眼光が光る。
『おや、いい物を持っているじゃないか』

バテレンが目をつけたのはベクトルの特製毒針である。バテレンが息を短く吹く（例の術を使う）と、毒針は地面から飛び出した。ベクトルはそれを留めることも出来ない。

つづいてバテレンが気合をこめると、ベクトルの身体の大地との融合が解除され、ベクトルは地上に飛び出した。この時、勇者との戦闘に集中していたバグが、初めて異変に気付く。しかし勇者を振り払うことが出来ず、奇しくも大師匠の時と同じような構図となった。

ここまで来ると、もはや運命なのかもしれない、などと心にも無い幻想が浮かんだりするものである。

バテレンは、ベクトルが死に体で立ち上がるうとする様を見ては面白がっている。。もちろんただ面白がるだけでなく、大師匠のときには無かった手ごたえを微かに感じている。

ベクトルは薄れ掛けた意識の中で、何とか鉄鬼の時のように攻撃を受け流す準備をしようとするが、もはや間に合わない。あれは地面との融合と魔王水との融合解除で行われる奇術、即ち手品であり、このような状態では真価を發揮できないのだ。

ベクトルの意図をなんとなく受け取ったバテレンは口元の歪みを深める。恍惚の笑み。

『中々器の在りそうな良い顔だ。こういうボウヤは殺しておくに限る。』

毒針がベクトルの胸を貫いた。

人間辛勝

ベクトルが刺された瞬間、バグは大きなリスクを背負ってでもベクトルを救出する腹を決めた。即ち強大な攻撃力を持つ勇者に対して『肉を切らせて骨を断つ』戦法を採った。

バグは甲虫弾丸を打ち出す左腕を勇者に向けたまま突撃した。甲虫の弾幕が瞬時に展開されるが、勇者の前では心許ない。バグは本来は暗殺者、火力で勇者にかなうことは到底ありえなかった。

勇者は凄まじい速度で弾丸をなぎ払い、飛び上がり一閃、バグの左腕を刺し貫いた。バグの左腕からは幼虫達の悲鳴と体液が漏れ出した。剣からあふれる光の魔法はバグの体細胞を完膚なきまでに焼き尽くすだろう。

『よし、蟲ジジイもここまでだな。』

バテレンがそう一息をついたのも束の間、次の瞬間には勇者が地面に叩きつけられていた。バテレンはその決定的瞬間を見逃していたため何が起きたか分からなかった。

勇者もバテレンと同様に、この攻撃によってバグを概ね仕留めたものだと思っていた。だが、それは勇者の戦闘経験の浅さを物語る結果となった。魔物が自分の体の一部を犠牲にするということは、そこに何らかの罫や、呪術が仕掛けられているものとして見なければならぬ。対魔物の戦闘の鉄則の1つである。

驚くべきことに、バグの左腕は傷口を境に本体から独立し、一つの生命体として勇者を攻撃した。左腕はまるで蛇のようにしなやかかつ素早く勇者を襲う。勇者は一瞬の出来事に瞬時に反応して見せたが、隙は大きく、本体のバグが繰り出す体術をまともに受けてしまった。

バグの用いる体術とは『ゴキブリ』の称号を持つ蟲術師が代々受け継いだ秘伝である。もちろんそれは蟲を支配する者の扱う術であるため、飛び道具として蟲を使用することや蟲の羽を体に宿してい

ること等が体得に必要な条件であった。魔界にはこういった肉体改造を前提条件とする数多くの術が存在している。

この術は魔界の数ある体術の中でも最高位に近いものであり、隙の生じた勇者には見切ることが出来るはずもなかった。バグは背中の羽を使って超高速で前転し、勇者の右肩に踵落としをお見舞いしていた。バグの羽による昆虫的な『速さ』による一撃は強烈、勇者の右肩は酷い音を立てて砕け、地面に叩きつけられた。

この一瞬の出来事に、バテレンは顔色を変えた。

『勇者っ！』

バグは勇者がその場で気絶しているのを確認すると、そのままバテレンへと直進する。当然バテレンを殺すためである。殺すなどベクトルは言っていたが、こうなってしまうては仕方ない。バテレンだけでも殺しておかなければ……。

しかし、再び謎のエネルギー体がバテレンから噴き出してバグを襲った。

また、バテレンのあの正体不明の術である。バグも先ほどのベクトルと同じように本体胸部に攻撃を受け、沈んだ。

一瞬のことであったのでさすがに動揺したバテレンであったが、秘術の敵ではなかった。

『まさか魔物がどいつもこいつもここまで馬鹿の一つ覚えで攻めてくるとは思わなかったぞ。ククク、これで研究のサンプルも増えるというものだ。おい、もういいぞ四六、出て来い。』

戦闘中姿を消していた四六は重症の勇者を抱えて再び姿を現した。

四六はいつの間にかマスクを付け直していた。

「旦那、そのジジイまだ息があります。」

『放っておけ。もう戦えまい。それよりさっきの若い魔導師は？』

「こっちはもう脈もありません。見た所かなり強力な毒針のようです。だからイチコロですな。なんとも呆気ない。」

四六がニヤリとほくそ笑んだ時、勇者の体が光を放ち始めた。勇者特有の回復魔法である。正確に言えば、勇者が得意とする光属性

特有の魔法効果である。この魔法はいわゆる万能薬であり、魔力さえあれば生命エネルギーの回復すら行える優秀なものである。

だがバテレンは、慌てた。

『しまった、このままだと魔法の回復効果で洗脳が解ける！。おい四六、早く注射器を！』

四六に預けていた荷物から手早く注射器を取り出したバテレンは、勇者のまだか細い少年の首筋に注射針を滑り込ませ、なにやら得体の知れない色の薬品を注ぎ込んだ。すると回復魔法の反応は直ちに止み、また元のように重傷者が四六に抱えられているのみとなった。

さすがのバテレンも焦ったらしい。

『危なかった。まさか自動で回復を始めるとは、何たる戦闘の才能いや、勇者の本能というべきか……』

感心しているのか文句を言っているのか分からないような始末ではあったが、とりあえずバテレンにとっての危機は免れたらしい。

『そうは言っても魔法を止めてしまっただけは勇者が役に立たんな。四六、さっさと脱出するぞ。』

「へい、分かりました。」

二体の魔物を後にして、バテレン、勇者、四六の三人は魔界を脱出し、人間界に帰還した。

大師匠暗殺事件はこうして、深い爪痕を残しながらもとりあえずの終結を迎えたのであった。

魔王軍大將軍の記録 　↳ 追討戦と事件 　その一↳ (前書き)

遅くなりましたので、二連続です。

魔王軍大將軍の記録　↳追討戦と事件　その一

まことに申し訳ないことなのですが、今までの話の流れの通り、私めは聖なる壁においての追討戦には参加しておりませんので、この戦いのことにはそこまで詳しくありません。

もちろん、バテレンや勇者、そして四六などの人間達については後々に関わることになるので存じておりますが、とにかく、私が彼らと因縁を持つのはもう少し後のことなのです。

さて、ベクトル殿とバグ殿のお二方が追討に出ていらつしやる間、私は館の守備と鍛錬を言い渡されていました。思い返してみれば、ベクトル殿から受けた命ですので何の異存もなく喜んで引き受けたつもりでしたが、もしかするとどこかでこのことを気に入っていない思いがあつたようにも思われます。本来ならばこうした追討の使命は、人斬り包丁であるこの私がなすべきことのはずです。

もちろん当時の私は魔界の地理や人間対魔物の世界的構図すら知らなかったわけですから、そんな状態で出向いていったら返り討ちに遭うどころか、彼らに追いつくことすら出来なかったように思われます。

ですが、それでもやはり戦いたかった。そんな気概のようなものを悶々と押さえ込むように、館ではひたすら訓練課題のゴーレム組み手に打ち込んでいたのです。

お気づきの方がいらつしやるとも思いますが、実は私が魔界に來てから斬つたのは岩鬼の衛兵のみで、大した働きも出来ないままだったのです。もしもベクトル殿の勢力がもう少し大きなものであったら、私はその中で蹴落とされていたことでしょう。

とにかく私は強くなりたかった一心で、ゴーレムと戦い続けていたのです。私の魔人の体は不眠不休で活動をつづけられるように出来ていたので、ベクトル殿のバテレン追討の三日間は全て修行に費やしました。

そして、その締めくくりがああ事件の始まりだったのです。大
師様が仰っていたことの意味がああ時ようやく分かったのです。

それではしばらく、奇奇怪怪にとりつかれていたククリが館で起
こした事件についてお話ししようかと思えます。

奇奇怪怪とイゾウ

ベクトルが聖なる壁にて瀕死の重傷を負ったのと同じ頃、エルフの領地内にあつたベクトルの館でも動きがあつた。

館には当時、奇奇怪怪に間接的に支配されていたククリ（奇奇怪怪「ククリ」と、ゴーレム相手にひたすら組み手を続けるイゾウしかいなかった。この時奇奇怪怪「ククリは、ククリの寝ている間にベクトルが何かの用事で出かけたということをやゾウから聞いており、せつかく自らの意識を分割してまでククリを支配しているのにつまらん、と苛立っていた。自分の相手になりうるのはここにはベクトルをおいていないだろうという判断である。

ただ、そのおかげで誰にも怪しまれることなく館内を探索できたとし、本当につまらなければククリの未来透視への返し技でつながってしまった魂の接続を断ち切つて本体に帰ればいい（一度切断してしまつたら、繋ぎ直すにはもう一度何らかの幻術をかける必要がある）。ククリには大迷惑だが、奇奇怪怪にとっては何があつてもお気楽なもの、何かあつて欲しい、いやむしろ何かやらかしてやろうとすら思っていた。

それはさておき、奇奇怪怪「ククリは人造魔人イゾウがどこか気に入っていた。別に大した理由ではないのであるが、なんとなく自らの率いる盗賊団の子分共に通じるがさつさを見出していたのだ。蓋し魔導師の配下には到底見えない。魔導師が部下を持つときにはバグのような、無機質かつ陰険な部下を好んで用いるのが普通なのであり、イゾウはちょっと不思議な存在だ。

奇奇怪怪「ククリはイゾウを試したくなつた。幻術で少し試して、骨のある奴だつたらそのまま部下にしてしまおうという魂胆である。当然これから部下になるかもしれないという男を幻術でだまぐらすことには何の抵抗もない。

奇奇怪怪の幻術は何らかの方法で相手の感覚と繋がることで成立

する。つまり、意識が重なった部分から相手を侵食するタイプの幻術であり、これは一見難しいようで、至極簡単である。例えば『視線を合わせ』たり、『体の一部を接触』することでも幻術が成立する。人間の中にはごく稀に息をするように嘘をつける者がいるが、奇奇怪怪にとつての幻術はそれに近い。彼の願いは全て幻術によって叶えられるに違いないのである。

『だが、面と向かって幻術をかけるのはまずいな。今はまだこの正体をばらしたくねえしな……』

奇奇怪怪の幻術にかけられると、奇奇怪怪と感覚の一部がつかなくなってしまふということは先ほど述べたが、感覚を共有するということは、術者からすれば、自らの意識を相手に曝け出すことでもある。即ち、直接イゾウに幻術をかけては十中八九ククリの中にいる自分の存在を知られてしまふのである。また、結局はククリを媒介にして幻術をかけるわけであるから、当然幻術の支配力、侵食力にも不安がある。

奇奇怪怪「ククリは攻めあぐねて館の中をふらついていた。館の中はイゾウの訓練が発する様々な打撃音に満たされていた。

『どこかに実験中の人工魔法生物とかが置いてあれば操って使ってみよう。やるんだがな、クハハハ。』

魔導師による生物製造は思いのほかポピュラーに行われている。魔法を三十年も愛好すれば、使い魔程度の生物は簡単に生成できるといった認識が浸透している程度に広く行われており、相まって実験中の暴走や野生化なども珍しくはない。それに見せかけて物言わぬ化け物たちを操って一暴れしてやろうというのが奇奇怪怪「ククリのこの時の思惑であった。この方法ならばイゾウに勘付かれることもなく試せる。

ただ、この時奇奇怪怪が犯したミスが1つ。それは、暴れさせる『魔法生物』の選択があまりにも性質の悪いものであったということである。

館ではイゾウの孤軍奮闘が始まるうとしていた。

奇奇怪怪とイソウ（後書き）

二週間も間を空けてしまい申し訳ありませんでした。

実はこの度受験シーズンに突入いたしましたので、更新速度がさらに落ちることが予想されます。

何とか更新自体は続けようと思しますので、寛大な御心で待っていただけると幸いです。

死体合掌

奇奇怪怪という男について、幻覚を操る怪鳥の妖怪だという記録もあれば、ありとあらゆる邪道に手を染めて妖怪化した人間のなれの果てだという記述もある。後者の方は、奇奇怪怪の活躍がバテレンの人造魔物製作の時期と重なることからそのバテレンの事業と混同されたという説もあるが、とにかく奇奇怪怪は諸説を呼ぶ男だということがわかる。

後世の研究者からすれば当然、様々な推測を許す彼の存在は大変魅力的である。歴代魔王の魔王軍の中でも特に有名であったベクトル・モリアの魔王軍幹部の中でもっとも異質で、最も謎に包まれた男であった。

何故こうにも奇奇怪怪がミステリアスにその名を残しているかといえは、結局は誰にもその素性を明かさなかったことが原因なのだろう。

魔界の歴史とは、悪魔族の長老ホウ・ノーレッジを中心にホウによる口伝と『史』と呼ばれる専門職業者たちによる歴史書とが補完しあって成り立っている。逆に言えば、真実がその網に引つかからないうちに世界に溶けてしまえば、それは魔界にとって歴史でなくなるのである。

今回の事件なども、イズウがホウに直接語るといふ形で記録していなければ魔界の歴史から抹消されていたであろう案件である。

奇奇怪怪・ククリは、ベクトルの館を徘徊するうちに大まかな館の構造を理解しつつあった。また、館内のどこかに魔導師の住処にありがちな隠し部屋の存在をもうつすらと見出していた。しかし、機密を多く抱えている部屋の存在を確信できたとしても、侵入することは全く不可能であるとも悟っていた。

とにかく、手に入る範囲で何か自分の存在の隠れ蓑になるものが

必要だった。

『あの魔人に聞くかねえ？。まさかここまで嚴重だとは思わなかった。』

つくづく幻術を除いては自分は無力であると感じていた奇奇怪怪Ⅱククリであったが、ついには面白そうな場所を見つけた。そこは廃棄物処理の区画であり、立ち入りはベクトルを除いて禁じられていたのだが大したセキュリティがあるわけでもなく、すんなりと侵入出来たのである。

そこには、魔法処理される予定の魔物の死体がいくつかうち捨ててあり、奇奇怪怪Ⅱククリを喜ばせた。

この魔法の世界では、死体とは放っておけないものである。死体が残っている限りは靈魂の何割かが肉体に残留するということは魔法的に証明されており、魔法に転用しない限りはさっさと処理してしまうのが魔導師達の暗黙の掟である。

例を挙げるならば、何代か前の魔王『欲のトウテツ』に仕えていた魔導戦士で、魔王に次ぐ地位と実力と地位を持っていたマギンという男などは、死体を軽んじて死に至ったケースの好例である。彼は、彼が生涯を通して魔法の生け贄に捧げてきた、一万を超える人間達の死体に宿った怨念に取り殺されたという記録が残っている。彼は死体に残る怨念というものを軽視して、わざわざ殺してきた人間たちの死体を部下達に保存させていたらしい。魔王軍大幹部レベルの膨大な魔力も、一万の人間の怨念にはかなわなかったということだ。ちなみに『欲のトウテツ』の魔王軍による人間界侵攻は、強硬派筆頭であったマギンの死によって、終息の方向へと落ち着くこととなった。

マギンのケースは極端な例であるが、死体とはこの世界では歴史を動かすほどに力を持つものであった。奇奇怪怪の使う幻術が死体を蘇らせる効果を持ちうるのも、死体に靈魂という精神的エネルギーがかすかに残っているからである。奇奇怪怪は他者の力を利用する事に革命的に長けていた。

『お前らを使つてちよつとした合成生物でも作つてやるうか？。魔導師に使われた死体の怨念は格別だからな。クハハハ』

奇奇怪怪「ククリは軽い気持ちでこう呟いているが、正規の手順を踏んでこの死霊魔術を行おうとすれば、ほとんど大魔法の域であると言える。ベクトルが魔物の死体をかき集めてイゾウを作り上げたのも、相当な労力と魔力を要したのである。後世の魔導師達の一部はこうしたことを軽々と実行できた奇奇怪怪の幻術の研究に身を捧げたが、ついには奇奇怪怪の術が魔法学的に解明できない未知のものであるということが分かったのみであつた。

奇奇怪怪「ククリは幻術を発動させた。いくつかの死体には電撃が走つたような反応がみられる。他の反応がみられなかつた死体は実は、ベクトルによつて人工的に合成された元々魂の無い人形のよくなものであつた。こうした人形達が他の死体と同じように怨念を有することはまず無いが、それとは異なる危険性があることは後に分かる。奇奇怪怪「ククリは、その魂を持たない人形達については諦めた。

『起きろ、お前らは今から奇奇怪怪になるんだ。』

その言葉と共に死体たちは起き上がった。両方の足がもげて無い者もいたが、両隣の死体が助け起こしたりしている。

首のみだつた者も含めて、奇奇怪怪「ククリの呼びかけに応じた死体は七体いた。それぞれ違う種族の魔物であり、相当な怨念を抱えているように思われた。

『お前ら、この館の魔導師が憎いんだらう？。この奇奇怪怪の自我と融合すれば、お前達は晴れて生を取り戻すことが出来る。お前ら、まずは一つに成りやがれ。』

奇奇怪怪「ククリはさも死体たちの意思（怨念）を焚きつけるよくな言葉を口に出しているが、実際は死体たちに拒否権はない。ただ、生の快感が約束されているのみである。

文字通り物言わぬ死体たちは、奇奇怪怪の言葉に従いそれぞれの肉体の健全な部分を差し出し合つて密着し、やがて溶かして混ぜ合

わせたような全く新しい姿の肉体が誕生した。

奇奇怪怪「ククリの顔は悦に塗れた。そして、ククリの肉体から奇奇怪怪の意識は離れ、合成死体へと乗り移った。

後に奇奇怪怪に『本体』として使用されることとなる肉体『鵺』は、実はゴミ捨て場で誕生したのであった。

絶叫

奇奇怪怪は、死体を『騙し騙し』生き返らせては手下にする、いわゆる『死霊幻術』^{ネクロマンシー}を狗夜叉の時のように時たま行っていたが、死体そのものに自らが入り込むことは初めてであった。肉体を捨ててまで他の体に移るメリットは平常時はほぼゼロに近い。例え自らの肉体が滅んだとしても、再生方法などいくらでもある。

前にも少し述べたが、その上奇奇怪怪の幻術の本質とは相手と意識を融合、混合させることである。当然相手に自らの意識が混ざるのと同様に、自分の意識にも相手の意識が混入する。相手にしてみれば厄介極まりない術であることには変わらないが、術者たる奇奇怪怪には術を繰り返すたびに自らの魂の切り売りを要求されることに他ならない。常人ならば一度たりとも用いようとはしないだろう。だが、好奇心が勝った、怖いものが無かった。奇奇怪怪という男はそれだけのためにあそこまで複雑怪奇の妖物であったのだと言ってもいい。とにかくやたらと奇奇怪怪は、この未曾有でやくざな幻術を使い尽くすこととなる。その最期まで。

そして憑依は成功である。奇奇怪怪本人は当然のことと知っているが、奇奇怪怪はこの時既にほぼノーリスクの肉体再生、及び不老不死の法を手に入れていた。生物万願の夢である。

だが、奇奇怪怪はそのようなことには構わず、ただ、新しい体に心が湧いていた。

何度も言うが、奇奇怪怪とはこのような妖物なのである。

新生奇奇怪怪は自らの体を改めて見回した。既にどんな死体を使つたかなどはもちろんのこと、今の今まで一体化していたククリの事すら頭には残っていなかった。

『いいな、この体。』

腕を振るう力はククリのか細い腕とは比べ物にならないほど力強い。しかも、見た目以上の異様な力の漲りようがあった。恐らくは

複数体の死肉のハイブリッドであることと統合された怨念の力が生み出す、キメラテックでオカルトな要因からだろう。大元の本体が脆弱だった奇奇怪怪はこの暴力的なまでの漲りに歓喜した。

「そうか、死体にはこういう使い方もあった。クハハハハ、もっと早くに試せば良かったぜ！」

新しい体という規格外の手段を入手した奇奇怪怪「鵺は、歓喜に耐えられずに絶叫した。もはや言葉に出来ない悦びであるが、別に彼はこんな事のためにここまで来たのではもちろん無い。むしろ、一連の流れに目的など元々無かったからこそ、ここまで行き当たりばったりに術が使い、悦べるのである。

奇奇怪怪はたとえ同じ術師でもベクトルやバレンとは全く真逆の、一貫した目的を持たない快樂術者であった。

さて、悦びの奇奇怪怪「鵺ではあったが、絶叫したということは当然イゾウが異常と知ってとんでくるということを忘れていた。

自業自得ではあるが、周りが見えていなかった奇奇怪怪「鵺は駆けつけたイゾウに気付く間も無く、一刀のもと首を刎ねられたことは言うまでもあるまい。

首を刎ねられるまでの流れはこれでもかと言うほどに盛り上がり欠ける。けたたましい悦びの絶叫を上げている侵入者を後ろから一閃。こんな馬鹿なことがあるだろうか、と言わんばかりの場面で意味が無いので省略する。

が、本番はむしろ首を切られてからであった。

イゾウはゴーレムとの組み手によって魔人の体をおおよそ掌握していた。魔人特有の高い魔力は未だ発現していないが、鉄鬼と真っ向に戦うことぐらいはできるだろう。目覚しい成長である。例の魔剣の切れ味も格別であった。

イゾウはあっけらかんとしながらも魔剣を収め、落ちた首を足で転がして顔が見えるようにした。もちろん知らない顔である。

「誰だお前は？、と言った所で最早首か。……ククリ殿、ククリ殿、大事では御座らぬか？」

ククリは無事だった、とは言えないものの体に目立つた外傷は無かった。奇奇怪怪の幻術からの開放による反動で弱りきっていた。

イズウに揺り起こされて意識を取り戻したククリは、そこに転がっている奇奇怪怪の死体がまだ終わっていないことを直感していた。期間こそ短かったが今の今まで一体だったのである。あんな恐ろしい怪物が首を刎ねられたぐらいで死ぬわけが無い。そして何より、ククリには天性の未来予知能力があった。

「イズウさんだめです。奴はまだ死んでいません！」

それだけ言っていると、ククリはさっさと気絶してしまった。気力を振り絞ったの忠告であった。

そして、このククリの言葉が第二回戦の口火を切った。

奇奇怪怪対イゾウ

ククリは薄れゆく意識の中で一つの事を疑問に思った。

（死んでいない？、いや、そもそもあの男は生きていたのか。あんな生物が存在するわけがない！）

いかに魔法や魔物が存在する世界とはいえ、魔法学的に説明できないオカルトはいくらでもある。奇奇怪怪という男はそんないかがわしさを体現している。「奴はまだ死んでいない」というメッセージは正確には間違っていた。少なくとも「死なない奴」よりは遙かに危険でいかがわしい。そんなことを律儀に思いながらククリは気絶した。

それと同時に奇奇怪怪の胴体は首を拾い、胸の辺りまで抱え上げていた。そして、それを見たイゾウの純粋な反応がさも面白いかのようにニヤニヤと笑みを浮かべている。

『あんまり驚くなよ魔人よお。天下の魔人様に驚かれたら照れちまうじゃねえかよ、クハハ』

奇奇怪怪はイゾウの隙を衝こうなどとは決して思わない。首を切られたところで仮の体。それが戦闘だとはあまり思わないのであった。

対するイゾウは、首を切っても蘇る相手とは戦ったことがなかったために動揺を隠せない。首はおおよそ全ての生物の急所であり、魔法学的に見ても首への攻撃は生命への直接作用であるといえる。それ相応の復活の準備をした魔導師でも首をもがれて生還することは高難度のスタンドプレーである。現に最高峰の魔導師であった大師匠も、バテレンの攻撃に意識を刈り取られ魔法効果を打ち消されたためにあっさりと首を晒して死んでしまったのである。

首は急所。種は違えど生物の基本である。

だが、イゾウの目の前の怪人は自分の首を抱えてニヤついている。少なくとも『人斬り』にどうこうできる事態ではない。ある意味で

イゾウは魔界において、常に『人斬り』を超えた存在に昇華することを怪物たちに要求されていたと言ってもよい。

イゾウはベクトルの配下になった以上、奇奇怪怪のような面妖な魔物たちとの戦闘は免れようがないのである。

やるしかない、怪物との戦いこそが元人斬りの為の新しい土俵なのだ。その決意とも諦めとも取りがたい感情は第二撃目となって奇奇怪怪に襲い掛かる。イゾウが自棄になったわけではないと見た奇奇怪怪は少し感心してみせる。

『お前は魔人のくせに弱そうだが中々やるな。面白いからこの奇奇怪怪が真面目に相手をしてやるうじやないか』

次の瞬間、魔剣の刃は奇奇怪怪の腕に弾かれた。鈍い金属音が遅れて響く。

イゾウは体勢を立て直してよく見ると、奇奇怪怪の体表に鈍い鋼の鱗のような皮膚が浮かび上がっているのを見つけた。魔剣は恐らくこの鋼のような皮膚に弾かれたのだろう。しかも、ただの鋼以上の何らかの反発力を持っているようであった。

イゾウはこの身体的特徴に見覚えがあった。その男の名が口を開いて出る。

「鉄鬼……？」

奇奇怪怪は首を有るべき所に押し付けるようにしながら笑っていた。『鉄鬼かあ、そういえば使った中に首が混ざっていたような気がするが、今はこの奇奇怪怪の力なのさあ！』

奇奇怪怪の不恰好な蹴りがイゾウを襲う。もはや首は元通りになり、その上に金属コーティングまでもが生されてしまっていた。

だが、奇奇怪怪は戦闘が元々不得手であったから、鉄鬼のようなサイズもバグのような速さもない攻撃はイゾウを捕らえることが出来ない。対するイゾウも蹴りをかわしたすれ違いざまに魔剣を奇奇怪怪の頸動脈に滑らせるが、引つかいたような微細な跡しか残せない。奇奇怪怪は鉄鬼と比べて無駄なサイズがないために防御力が何割か増したように感じられた。

奇奇怪怪は苛立ち混じりに

『速いなあ、お前』

と、吐き捨てる。奇奇怪怪は恐らく格闘戦に固執せずに幻術を用いていけば、イゾウなどすぐに物言わぬ死体にしてしまえるだろう。実際のところ狗夜叉のような魔王候補レベルの武闘派ですら奇奇怪怪の幻術には歯が立たずに自殺させられ、死体を使役されているのである。そもそも専門外である術師が格闘をするなどということ自体がおかしいのである。

奇奇怪怪の格闘への興味と妄執が、闘いを見た目上イゾウ有利の局面へと変えていた。イゾウは奇奇怪怪を体捌きで圧倒していた。イゾウは生前幾多の『斬り合い』の死線を突破してきている。例えその常識が通用しない術者との戦いであろうとも、その経験がまんざら役に立たないわけではなかった。人型の相手ならばとりあえずイゾウは互角の勝負が出来る。

奇奇怪怪の金属の皮膚に傷が増えていくばかりである。

幻術を使わずに肉弾戦でイゾウを倒すことを自己目的化してしまっていた奇奇怪怪は防戦に徹する。

イゾウは防御の隙間を縫って眼球を刺突し、奇奇怪怪の左目をくり貫いた。

さすがの奇奇怪怪も、この有様にはたまらず

『うひい。やっぱり俺は喧嘩じゃ勝てねえ、クハハ』
と、自らの表面上の劣勢を悟る。

途端に温まっていた狂気も冷めてしまった。ベクトルにちよっかいを出すという目的もとうに忘れていた。つまり、戦う理由などは彼にとって既に無いに等しかったのである。

奇奇怪怪はここに居る理由を自ら消し去ってしまった。

『新しい体といっても所詮は俺か……。つまらねえ、帰るか』

戦いに背を向けた奇奇怪怪の拍子抜けな言葉に、イゾウは怒りを通り越して呆れてしまった。

「は？」

イゾウは隙だらけの奇奇怪怪の右目をも刺し貫いた。しかし、もはや奇奇怪怪の戦闘は終わっていた。一太刀がやかましい金属音と同価値であった。

イゾウの価値もいつの間にか消え失せてしまった。奇奇怪怪には最早そこいらの蠅と変わらない。恐ろしい気移りの速度である。

『だから、俺は帰るんだよ馬鹿野郎。死ね!』

奇奇怪怪は、今度は自殺を強要する幻術を躊躇うこともなくイゾウに送り込んだ。

次の瞬間イゾウは絶叫し、嘔吐し、卒倒した。イゾウの世界は夢想へと落とされ、夢想の世界でたった今、地獄に落とされた。

もはや奇奇怪怪はイゾウに見向きもしなかった。まもなく勝手に自殺する男には感慨すらも沸かないから勝手に死ね、といったところである。

この幻術は五感を苦める幻覚を相手に見せ、苦しみから逃れるための自殺へと誘導するオーソドックスな術である。奇奇怪怪以外の術師でも似たような術を使う者がいくらか記録に残ってはいるが、変態的な想像力を持ち、かつ天才的な技量を持った奇奇怪怪のそれは一撃必殺、格別であった。

『そうだそうだ。最初からこうしていれば良かったんだ、クハハ、ハッハッハッハッ!』

館内に奇奇怪怪の下品で抑えの無い勝鬨が渡る。最悪の事態であった。

奇奇怪怪対イソウ（後書き）

やっぱりイソウは酷い目に遭います。まだまだ脇役臭い彼ですが、
いつかは……

魔人の地獄

幻術世界でイゾウは仮想地獄を引きずりまわされていた。そこそは見紛うことなき夢幻、無限の地獄である。奇奇怪怪の残虐かつ無秩序な嗜好によって作られたその世界は、おおよその死の世界よりも残酷な場所であった。

その世界は拷問のために用意された哲学亡き地獄であり、正確に言えば苦痛こそあれど本来の地獄とはだいぶ異なった存在の成り立ちである。

通常の地獄には、罪人を様々な苦しみを通して苛め抜く『過程』というものが存在し、基本的に輪廻における浄罪器官としての役割がある。だが、この奇奇怪怪の魂の中に創設された地獄には時間という概念が設定されていない。時の流れを感じさせるような周期的な事象は何一つ存在しないのである。つまり、全く新しい苦しみが全く新しい感性に脈絡を持たずに入れ替わり立ち代り、または同時に現れてはイゾウの心を犯すのである。

また、相手を幻術にかける時間を須臾程度にも必要とせず地獄に叩き落せる、きわめて合理的な幻術でもある。逆に言えば、奇奇怪怪はこの空間を常に自分の心の中に飼っているのである。それは大変に気味の悪いことである。

相手の心に死の世界を挟み込むようなこの術さえあれば、奇奇怪怪はどんな戦闘でも自分の思うように切り上げて相手に首をくくらせることが出来る。奇奇怪怪は興味の無くなったおもちゃを叩き壊すようにこの術を使うのであった。

術としてのマクロな性質も大したキワモノであるが、実際に（幻術世界においての『実際』は、被術者にとっては全くの現実である）イゾウを責めた苦痛の内容も中々に酷いものであった。

例えば、イゾウの臓物を全て糞に詰め替えて風船のように皮が張るまで肛門から尿を注入した後、そのまま串刺しにして丸焼きにす

るといふコンテンツがある。大体の生命は臓物を入れ替えられた時点で死に至るが、幻術世界には時間がないため生と死の波長の一側面である死も当然存在しない。イゾウはこのような馬鹿げた内容一つ一つに対して目を見開き、鼻を利かせ、耳を澄まし、味わいつくし、感応することを要求され続けたのである。幻術空間では時間が存在しないと言うだけで許される非道である。生と死という枠組みを外れた陵辱は、おおよそ生物の魂をボロ雑巾のようにスタスタにしていまえるだろう。

苦行、おおよそその数一万。現実の一つずつ行えばイゾウの人生を数千つなぎ合わせても足りないような時間を、幻であるという理由だけで一瞬に消費してしまったのである。

だから、イゾウが絶叫し、嘔吐し、気絶した時には既に幻術のコンテンツは終了していた。それは無限の苦痛からの開放であるはずなのだが、その後被害者を襲うものが何であるかということは想像に容易い。

脳という器官（むしろ中枢であるといってもいいかもしれない）は、時間の中の連続性と複数の知覚による視点の中においてはじめて情報というものを正常に処理できるように出来ている。実在をその生物の次元で捉えられるのである。

その連続性と客観性が失われ、脳がそれ相応の苦しみを受けないまま魂のみが苦痛によって破壊されてしまえばどうなるか。言うまでもないことであるが、体がそれに合わせて自壊するのである。自殺であれ病であれ狂死であれ、幻術によって魂が傷つけられれば相応の惨憺たる現実が顕現するのには間違いないのである。

奇奇怪怪は『幻術とは魂を殺す毒だ』と後にコントンに語ったが、全くその通りである。奇奇怪怪は夢と現の境界線のような能力を手にしたがために破綻した性格を持て余しているのである。能力はまぶしいがそこには闇の魔毒が満ちており、奇奇怪怪はいわばその中毒者なのであった。

かくあって、奇奇怪怪は快樂と苦痛を求めた彷徨の末ここにいる

のである。

毒がこの世から無くなればどれだけ良いだろうと思う。

だが、毒とは時として薬に成り得る存在でもあることを忘れてはならない。我々がこうやってファンタジーと実生活を楽しんでいられるのと同様に、薬となる幻も確かに存在するのである。

地獄の幻想の次に、イゾウを包むのはそれであった。

夢想微分

そもそも魔剣とは何故魔剣と呼ばれるのか。唐突ではあるが、イゾウの魂の救済はこのことを説明してからでなければならぬ。

魔剣とは元々魔力の宿った刀剣その物を示す言葉ではなく、剣に魔力を上乗せすることによって様々な効果を生み出す魔法戦闘技法『魔法剣術』のことを指した言葉であった。この技術の歴史は古く、初代魔王の右腕と呼ばれた大剣豪『キウハイ求敗』が創始者とされており、その後継者達によって様々な流派が今日の魔界にまで連綿と受け継がれている。しかし、『求敗』という名前そのものがかなり伝説的な代物であり、それぞれの流派の語る魔剣の歴史に信憑性があるとは言い難い。

求敗はいわば剣の神のような存在である。ホウヤ『史』の持つ記録を覗いても「山を縦に裂いて谷にしてしまった」だとか「居合い斬りで魔王に外科手術をした」だとかという魔法云々以前の怪物的な所業を成したとしかない。求敗は実在「は」したという説が濃厚であるが、日本の聖徳太子のように、人物像や能力が都合よく脚色されていると言われている。だが、そこそこに魔剣の使い手である『魔剣士』達からは信仰されているようである。

『魔法剣術』を取り巻く環境において、我々の世界における江戸時代の日本の武術流派の乱立に似た現象が起こっているとも言える。優れた武芸者は当然魔王選定後の魔王軍編成において出世のチャンスを得る。実際に出世した魔剣士は多く、また、種族を問わず習得できるので魔剣は特に親しまれている。選定終了によって終わることの約束されている魔界の乱世は複雑な武芸事情をも孕んでいるのである。

何はともあれ、魔法剣の効果は確かなものであり、奇奇怪怪に惨殺され、配下に成り下がっている狗夜叉も魔剣士であった。魔王候補の中には他にも高名な魔剣士が名乗りを上げている。全くもって

侮れない武術である。少なくとも、バグの蟲術の数千倍はポピュラーな術である。

さて、イゾウの持っているような刀剣そのものである魔剣について話を移すが、こういった魔力を持った剣は元々魔力を有していたわけではない。魔法剣として使用されているうちにその魔力が蓄積されて妖怪化したのである。ここで言う妖怪化とは魔剣の人格化を必ずしも指すものではないが、この現象は術者の魔力が大きければ大きいほど、使用期間が長ければ長いほど強力なものとなり、中には術者の魂の一部が魔剣の精霊としてとり憑いている場合もある。この現象を自ら引き起こすことがある意味での魔剣士のステータスとされており、実力の強い魔剣士が用いた（作り上げた）魔剣ほどマジックアイテムとしても、宝剣としても価値が高まる仕組みになっているのである。

イゾウの持つ魔剣もその一つであるが、余程のレア物だったのだろう。イゾウが倒れると仄かに光を放ち、なにやら独りでに魔法をイゾウにかけ始めたようである。奇奇怪怪は狂喜乱舞することけたたましく、魔剣に起こった変化には気付きもしなかった。

さて肝心のイゾウであるが、文字通り魂を破壊されていた。苦痛と汚物に塗れ、おおよその生物が持つであろう尊厳までもが木っ端微塵に粉碎されていた。その惨憺たるや意識を失った夢想の中にまで侵食する凄まじさであり、イゾウは現実に帰還しきれていなかった。

夢の中も幻もイゾウにとってはそう変わりのない地獄であった。ただ違うのは、今度は本物の苦しみを脳が解釈して自分なりに夢の中に再現してしまうところである。脳は魂の得た地獄の膨大な情報を処理しきれず、いわゆるフリーズ状態であった。科学的に言えば、奇奇怪怪の被害者は皆その状態から逃れるために発狂し、あるいは自ら命を絶つのである。イゾウにとってもそれは逃れられない定めとなるはずであった。

それがどうしたことが、夢の中である地獄においてイゾウは気絶

した。正確には「気絶させられた」のであるが、それは夢の中で夢を見せるといふ常人には理解不能な荒業である。イゾウは訳の分からぬままもう一段下の階層へと意識を落とした。

夢というものは連続する多様な情報をひとつの大きな流れに変換して簡略化する、いわゆる数学の微積分分のような次元変換を脳内で行っているのだといわれている。それは生物にとつては基本的で不可欠な情報処理であるのだが、今のイゾウには魂を侵す傷を肉体や脳のダメージに返還してしまうことであり、おおよそ死を意味する。その威力は麻薬の数千倍程はあるだろう。

魂と肉体はそれぞれ平衡するように設定されたシステムであり、奇奇怪怪はその仕組みのおかげで、魂だけを攻撃することで敵を殺せるのである。

そして、さらに今起きていること、つまりその夢を断ち切つて新しい夢を挿入するということは当人にとつての過去を摩り替えることに等しい。だが、それこそが奇奇怪怪の幻術への力無き者のための処方箋であるということ、無意識に悟り、行った者がいたのである。ここまで来ればその正体は薄々感づかれるかとは思うが、しばし待たれよ。

イゾウは混沌とした空間に放り出された。地獄よりかは幾分かましな混沌ではあるが、イゾウは錯乱したまま手負いの草食動物のように狂乱している。

しかし、デジャヴがあった。

イゾウは一回目の死亡の時と同様に、またどこかへ異世界召喚されたのではないかと感じた。実際にその通りではあるが、夢の中のことなので道理は大した問題ではなく、本当に死んでしまったのだとしても地獄から逃げられるのなら本望というくらいの気持ちであった。大切なのはその新たな夢の内容である。

イゾウはめまぐるしい景色の変転に巻き込まれながらも、デジャヴによって物事の経緯を思い起こし、平静を取り戻した。あるいはその変化に意識をそらすことで魂の痛みを和らげる暗示的療法が偶

発的に行われたのかもしれないが、とにかく、イゾウは落ち着いた。ここはイゾウの頭の中であるから落ち着くことで世界も定まる。

不定形であった空間が何物であるかが分かる程度にまで意識のブレが落ち着くと、なんだか懐かしくない場所に行き着いた。頭の中の事象なのに懐かしくないとはこれいかに。

「え、何故？」

というのがイゾウのその世界への第一の感想であったが、それは当然。そこは、脈絡も無く道場であった。むやみにツルツルとした床の感覚といい、典型的な剣術道場のような空間である。

作者が思うに、ここまで読んだ読者諸君はこの道場がイゾウに馴染みの深い思い出の場所なのではないかと思つたことだろう。だが、そんなことは決してなかった。奇奇怪怪に遭遇した時レベルの脈絡の無さである（イゾウにとっては）。

何故脈絡が無いかといえ、イゾウは道場なぞには何の思い入れも無いからである。確かにイゾウは生前の一時期を剣術道場巡りに費やしたが、イゾウの剣の強さの根拠とは道場における鍛錬ではなく、幾度となく人生において繰り返してきたルールも意味も無いばかりか喧嘩の数々である。イゾウ自身は道場剣術など歯牙にもかけなかった風がある。もちろん彼の時代にも道場剣術使いの剣豪は掃き捨てるほどいたのであるが。

そんなイゾウにとって都合よく現れたこの道場は、バトル漫画にありがちな修行の場というよりは、素行の悪い学生を体育教師が無理やりに押し込めてしばくような場所のイメージしか湧かなかつたのである（もちろん幕末に体育教師はいない）。

繰り返すが、イゾウは地獄からとりあえず生還したが、脈絡も無く道場なのである。もちろん何者かの意思が働いていた。

誰の予想する所でもなかつたことだが、これまであらゆることの流れに翻弄され、目の前の敵やら仕事やらにかかりつきりであったイゾウは、ここで生まれ変わることになる。この道場から、本当の意味で魔人イゾウの懐刀としての魔人生が始まるといつてもいいの

だ。

そして、こんな事を催した犯人が堂々と道場に現れた。

魔剣の精霊（前書き）

少し文体を変えてみました。

魔剣の精霊

驚いたことに、夢想空間の道場に忽然と姿を現したその男は人間であつた。しかも、

「俺と同じ顔じゃねえかつ？」

とイゾウが驚いたように、その人間は生前のイゾウそっくりの姿形をしていた。申し訳程度に結つた頭といい、血の匂いがべっとり臭つてきそうな風体といい、人間時代のイゾウを体現している。現在のように鏡が大量生産されることも無く、当然ビデオのような映像技術も無かつた（写真はあつた）時代の男であるから、水面に映る顔ぐらいでしか自らの顔など知る由もなかつたイゾウである。しかしやっぱり目の前におぼろげに知っていた自分の顔が現れると驚くわけで、夢なのではないかと目を疑つた（その通り）。未だイゾウは魔界には慣れきつていないと見える。

イゾウはこの辺り、臨機応変の「リ」の字も出てこないほどにたんでこ舞いである。バグや奇奇怪怪（下手したらベクトルも）達のようなサイコパスに遭遇してばかりだからそう見えるのかも知れないが、結局イゾウにはかなり人として抜けたところがあり、純粹戦士殴りこみ稼業以外の才能は無かつたのだらう（いわゆる鉄砲玉）。ベクトルは召喚する魂の選択を誤つたかもしれない、と作者は書きながら思つた。

しかし安心したまえ諸君。何を隠そう、このドツペルゲンガーこそが、ひよつ子イゾウを叩き直すために現れた魔剣の精霊なのである。

イゾウはそうとは知らずに吠え掛かること狂犬の如し。

「誰だてめえ、また幻術か！」

などと久しぶりに見る人間の面に突つかかつてみる（自分の面など見飽きていて怖さは微塵も感じない）イゾウであるが、どうにも生前の自分とは異なる印象を受ける。このあたりに気付けるあたり、

イゾウの（野性の）才能は捨てたものではないが、やっぱり品性や知性は無い。

対して、人間姿のイゾウも品は無かったが、不思議なことに威嚇があった。このあたり、倒幕組織の幹部達を思い出させた。

『黙れ、このたわけの青瓢箪めが！』

と一喝。自分の姿に怒られたのでイゾウはたじろいでしまった。何か、母親の折檻に近い強制力を持っている気がする。

それをいいことに魔剣の精は、

『貴様は何が悲しくてそんなに弱いのだ青瓢箪。魔剣たるこのわしの名に糞を塗ったくる気か。夢の中で死にそうになった（惨殺されること数億回）くらいで何故本当に死にたがる、この腰抜けのヒヨッコめ！』

と言いたい放題で、魔剣のくせに我が強すぎるらしい。むしろ、これ程の我を持つことは膨大な魔力の証明ともなるわけだが、イゾウにはそんなことが分かる訳も無く、有り難い救援であることに気付くまでに相当の時間を要することになる。今そうして正気を保っていられるのは誰のおかげなのかと諭してあげたくなる。

仮にイゾウに、

（ん、今自分のことを魔剣だと言わなかったか、こいつ？）

と気付くぐらいの洞察力があればもう少しまともな会話にもなったかもしれないが、結局魔剣が事の次第を一から説明するも、イゾウは訳の分からぬまま勢いで会話を続け、自分の言いたいことだけあだこうだ言っていた。馬鹿かこいつは、と誰でも思う光景に違くない。

魔剣の精霊はイゾウの予想以上の唯我独尊ぶりに形相を変え、

「青瓢箪の聞かん坊めがっ！よいか、わしは、お前が身の程知らずにも使いこなしている気で振り回している魔剣（の精霊）だ！。魔剣たる尊き身に在りながら貴様のような死に損ないの凡骨に剣を教えに貴様の夢の中までやってきたのだ。だのに貴様は姿かたち（イゾウの姿）であだこうだと騒ぎおって、クソのような戯言をタラ

タラ吐きおつてからに！魔界はいつから貴様のような出来損ないばかりになったのか？……」

と、現代の若者の素行を嘆く大人のようにくどくどと、それでいて激しい愚痴をイゾウに撒き散らし始めた。

実のところ、この魔剣はベクトルの母方の一族の宝物として長年嚴重に管理され、ベクトルが魔王候補に選定されたのと同時に正式に継承された実に由緒正しき魔剣であり、少なくとも千年以上の歴史を持つ代物である。魔剣にかかればどんな強者でも軟弱な若者のようにしか見えならしい。その上剣として想像を絶する退屈な時間を過ごしていたらしく、曲がりなりにも自分を扱うイゾウを言いくるめて、自分の手足の如くに働かせて退屈しのぎ（殺し）をしようという気だっただらしい。その都合上、イゾウに元の主並みの魔剣士になつてもらわねば面白くないという思いがあり、恩を売るついでにイゾウの夢の中に救援に現れたのである、というのが真実であった。

しかし、そんなことで納得するイゾウではない。

（馬鹿め、説教臭い老人なんぞ、俺とて数十人はとづくにぶち殺してらあ）

などと、筋の通らない対抗意識を燃やしており、殺意を湛えた刃物のような目で精霊を睨みつけていた。

魔剣の精霊は老齡とはいえ所詮は魔剣であり、普通の生命体とは少し精神構造が違う。と言うのも、彼にとつての究極の価値とは戦いであり、戦いにしか自分の価値を見出せないのである。結局力づくで強くしてやるしかない、彼の中では最初から結論が弾き出されていたのである。

それはともかくとして、魔剣がついに痺れを切らして言い放つ。

「よし決めた、貴様、ここを死なずに出たければこのわしと勝負だ。もし貴様が負ければ貴様は一生涯の殺人奴隷（意味が違う）だ！」
いつの間にかイゾウと精霊の傍らに竹刀が置いてある（夢の中は便利である）。つまり、自分のことなど理解しなくてもよいから戦え、

強くなれ、というオーダーである。魔剣の精霊は、魔剣である自分を
使うための技術も戦いにおいてイゾウに教え込む算段のようだ。
「その勝負受けたっ。覚悟しろ説教爺（のようなことを言う自分）
！」
と単純なイゾウは二つ返事に竹刀を握り締め、彼独特の殺人剣の構
えをとった。

上半身を前にかがめて重心を前へ前へと移し、自ら剣の切っ先と
相手の首とを右目からの視線が一直線に貫くように構える、西洋の
ナイフ使用のような極端な構えであるが、一対一の真剣勝負におい
てイゾウは必ずこの構えをとる。これは後に魔界の剣士達に中途半
端に改良された結果、使用者から多量の死者を輩出することとなり
『死神の構え（術者にも相手にも危険）』と呼ばれることになる。
対する精霊は両手で正面に竹刀を構えた。こちらはオーソドック
スの王道を行くような構えである。

道場という景観に似つかわしくない馬鹿馬鹿しいほどに戦闘欲で
満たされた試合であるが、これこそイゾウの魔剣士としてのスター
トに相応しかったのだ、とベクトルは後にこの勝負を苦笑を交えて
後に評価している。

ここに、魔剣対剣士の世にも奇妙な勝負が成立したのであった。

魔剣のすすめ（前書き）

段々とイゾウの知能レベルが低下しています。大將軍への道は長いです。

魔剣のすすめ

先に仕掛けたのはイゾウである。

イゾウは先程の構えからさらに深く前に沈みこみ、上体の自然落下の力を推進力に変えた突きを繰り出す。筋力よりも重力の加速のほうエネルギー効率が良い事を感じ覚的に理解していたイゾウの剣は、降ってくる雨粒のごとく速く、直線的である。

が、精霊は竹刀を突きの軌道に滑らせて剣をいなす。無駄のない動きで突きをいなした精霊はイゾウに生じた隙を突く。ここが本当に道場であつたら感嘆の声が挙がるであろう美しいカウンターの動作である。

「良い突きだが、予想の裏を掻いた所でわしは倒せん。魔剣術の真髓を見せてやろう。」

と、精霊は竹刀を突き出す。ただの素振りのような単純な動きだったのでイゾウは難なく竹刀を受け止められたが、それだけでは済まない。

精霊の剣の軌道の延長線上にあつたイゾウの左肩にどす黒い線が走り、そこから魔王水配合の血液が噴出す。見えない刃にイゾウは驚いて飛び退いた。

夢の中のことなのでこの程度の傷は気にもならないが、竹刀ごときでどうして肉が斬れるのかが分からない。真空波の一種なのだろうか。

あからさまに異様なものを見る目で精霊の「斬れる竹刀」を見つめているイゾウをみて、

（魔力の匂いがしないから不思議だとは思ったが、まさか本当に魔法剣を知らんのか）

と、精霊はむしろ驚いているイゾウに驚いていた。先ほどの刃は、たとえ不可視であろうと、魔道の心得が少しばかりでも有る者には見えるはずの刃なのである。

その後も彼らは幾度か切り結ぶのだが、純粋な体術を除いては全く精霊に敵うところが無いイゾウである。今までのイゾウの戦いぶりと同じように、魔界という世界特有の戦闘技能の点における無知さが、イゾウを不利へ不利へと追い込む敗因となっている。ゴールム相手にいくら修練を積もうと、その欠点を押さえない限りは高位の魔物相手には勝てない。あの修行を用意したベクトル自身は魔術戦闘の天才だったが、こと部下の戦闘教育に関しては才能が無かつたらしい。後にこの事は魔剣に看破されることとなる。

魔剣は方針を見直す必要があると踏んだ。

(こんな物知らずの阿呆に巡り合うとは運が悪いのう)

魔界に生を受けてまだ一年も経たない赤ん坊の青二才であるから仕方のないことではある。

ちなみに、精霊が用いていた技術は、魔力で空気を固めた物を竹刀に纏わせて操作性とリーチを高めただけの初歩的な魔法剣である。達人同士の戦いともなればその流れを読み合い、蝟の触手の絡み合いのような中距離戦闘を展開することも出来るのであるが(もはやそれは剣士ではなく魔法使いの戦いである)、その基本中の基本でこつも驚かれては、張り合いが無いというものである。

(待て待て、魔法剣の真髄を披露するのはこれからだと言うに……) 魔剣の精霊は行く先を案じ、むしろ放り出してしまいたいようなどうしようもなさを感じた。魔力を使いこなせないどころか、『魔力の使用』という概念すら知らないような小僧に魔法剣を教えるということは、アメーバに性教育をする事ぐらい空しいことかもしれない。

かと言って、このままイゾウの魂に魔力の応急処置を施して叩き起こしてやったところで、もう一度奇奇怪怪に地獄に叩き落されるに決まっているのである。そうすればもう助からないかもしれない。魔剣にとってイゾウは仮にも主であるのに加え、奇奇怪怪のあの気味の悪さは気に入らない。負け越しはもちろん、奇奇怪怪の手に落ちることなどもってのほかである。どうにかしてイゾウを生存可

能なレベルまで育て上げなければならぬ事を感じ覚的に悟っていたのである。

（まずは型だけでも叩き込まねば話にならない。はて、どうしたものか）

もちろん、魔剣は人に剣術を教えたことなど無かった。剣なのだから。仕合、会話において優位に立っていたのは断然に魔剣の精霊なのであるが、結果に困り果てていたのもまた魔剣の精霊なのであった。

（いつそのこと気味の悪い死体人形（奇奇怪怪のことであるが、イゾウもそうであると言える）が立ち去るまで狸寝入りを決め込ませるか？）

イゾウと出会ってしまったばかりに、この魔剣は歯がゆい思いをこれから幾度となく味わされる事となるのであるが、それはまた別の話である。

それはさておき、魔剣の精霊はようやく決心が付いたらしく、口を開く。

「お前、今みたいな剣技を扱いたいのか？」

剣から気合のようなものを放ち、直接触れずして斬る。現代の少年漫画はこの現象を何の怪しみもせずに表示しているのだが、魔剣の精霊のそれは全く合理的な技術としての側面を持っていた（扱う、という言い回しがいかにも術士のものっぽい）。江戸時代に剣から『かまいたち』が出るという現象が想像されていたかどうかは知らないが、イゾウもこの格好良さの虜となっていたのである。

イゾウはほんの少し物を考えた後、

「どうか、どうか私めに貴殿の剣の業をお授けくださいまし」

などと、畏まって慣れもしないクサイ敬語であっさりとは即答してしまった。かっこいいものと強いものには目がないのである。ベクトルとの主従の誓いも、半分ぐらいはノリでやっていたのかもしれない。

この時、魔剣の精霊はもうほとんどやけくそな気持ちであったと

魔剣のすすめ（後書き）

来週はきつとお休みです。

魔剣の理学

結局、奇奇怪怪が立ち去るまでは狸寝入りをするということでは話
がまとまった。ちよつとやそつとのイメージトレーニングで勝てる
相手ではなかったのである、ということにした。その間は魔剣がレ
ーダーとなって奇奇怪怪の魔力やら妖気やら腐臭やらを観察し続け
る役目を負った。この魔剣、上手く使えば大抵の事が出来るコン
ピュータのような剣であると考えたと、気難しい爺を搭載してはい
るが、宝剣として伝えられていたのにも肯けるところがある。

イズウが倒れてから十分近くが経過していたが、奇奇怪怪は未だ
に館内を徘徊している事が伺える。ぶつちぎりのサイコパスである
奇奇怪怪の行動原理など知ったことではないが、とりあえず止めを
刺される心配は無さそうであった。さつさと帰れとは思いつつも、
一安心である。

では、再びイズウの夢の中の更に夢の中の仮設道場へと話を戻す。
イズウは自前の型を中々直せずにおり、隣では精霊が気難しさ半
分、気が抜けて半分の何とも言えない顔をして、イズウに指導を施
している。

ちなみに、夢の中と現実はそれぞれ時間の進みが異なることは前
にも述べたが、奇奇怪怪の拷問地獄の四次元的な時間の混沌とは異
なり、道場内の時間の流れは現実とは大きく波長がずれてはいるも
の、いくらかは周期的であった。

イズウは単純であったからこの時、奇奇怪怪の地獄のことは頭の
片隅にも置かずに精霊の剣に熱中していたが、それだけでは多大な
後遺症を残したまま現実へと戻ることとなる。夢の中の出来事につ
いては夢の中でカバーした方が道理に適っている事は言うまでもな
い。これを踏まえて魔剣の精霊はイズウの魂の救済措置として、魔
剣術を通した軽い人格矯正をもすべきだと考えていた。つまり、根
性を叩き直そうということである。

「貴様は剣を振り回す事においては天才だが、魔剣士としてはクズ以下だ。」

魔剣の精霊が思うに、

『魔剣とは探求也。』

なのである。武骨な武闘派の魔剣が幾多の闘いを通して素朴な哲学である。

誰も気付いてはいなかったが、他を凌駕し、殺すのみでは辿り着けない極地を求める点において、魔剣士の剣への情熱は魔導師達が有する魔道への感情と一致している。つまり、道を極めた魔剣士は本質的に魔導師と同質のものであり、手に持つ物が杖か剣か、戦いに価値を見出すかどうかと言う点においてしか変わらない者達、同じ求道者なのである。

酒と女と殺しと倒幕のこと以外考えていなかったイズウは、そんな世界に踏み込もうとしているわけである。だが、人斬りとしての才能と経験は、イズウの剣術への探究心を曇らせていた。と言うのも、かつてのイズウはあまりにも簡単に人を斬りすぎたのである。

人を斬るという仕事は常人には向かない仕事であり、こなすには『何のために殺すのか』、『殺した相手は何者なのか』、『この殺しは正しいのか』等の他への関心を極限まですり減らした『現実的な』思考を持たなければやっていられたものではない。そしてしかし、その先には手段と目的が境界線を亡くして人を飲み込んでしまふ闇の領域が口を開けて待っているのである。作者思うに、現代地球で取り沙汰されるようなテロ行為を行うテロリスト達も、この思考に囚われたために道を踏み外したのではないだろうか。

そして、そんな思考を持ってしまったイズウにとって剣とは手段としての価値しか持たないのである。斬った相手も手段の領域内である。

魔剣の精霊は正にその思考をを剣としての直感で見抜き、改善したいと思っている。

つまり、まずはイズウを殺人狂から戦闘狂に作り変えるのである。

魔法剣を初めて見た時の反応からしてイズウの中の純粋な強さや技術へと向かう心はまだ萎えきっていないらしいから、望みはあった。改めてイズウの殺人マシンとしての体さばきを評価しつつ、精霊はほんの少しの光明でも見えたのか、意気込んで伝える。

「イズウよ、貴様がわしの持ち手となった以上は貴様をまともな魔剣士に叩き直して見せようぞ。魔力の使用は追い追い修練を積むとして、今はわしの剣の一通りの型を真似して覚えるのだ。お前には分からんかもしれんが、動作の一つ一つが魔力の精密操作のために完成された我が剣をとくと見ておれ！」

気合が入ると話が長くなるのは説教だけではないらしいが、少なくとも教育理論としては悪くない方法だった。

そして、ここから先はひたすら根性の時間である。睡眠学習であると言う点だけはほんの少し現代臭い（抜け道っぽい）が、それを除いては修行僧の苦行を三倍濃くしたような青臭さと血反吐の量と言っても過言ではない。

疲労の面では奇奇怪怪の地獄を遙かに越えるほどに気を揉まねばならなかった。一つ一つの剣の型を体で覚えるまでにはいいのだが、その運用の段階に入ってからには魔術理論や現代地球で言う古典力学のような分野の理学までをも総動員して考えながら戦うのである。

例えば、妖怪を模した『東方妖怪流魔剣法』が魔剣の精霊の元の流派なのであるが、その内の『かまいたちの型』基本の六つの型においては、理想的な真空の形を形成するために刀を持った全身の重心を中心に回転するように剣を振らねばならないという鉄の掟がある。そのうえ真空を媒体とした魔法の性質も把握しておかなければならず、それゆえに剣に速さも必要なのである。イズウはこの六つの型を魔力を使う前の段階まで完成させるだけまでにおよそ八千回の素振りを繰り返し返した。そりゃ強くなれるわい、と突っ込みたくなってくるが、それでも勝てないのが魔界の恐ろしさである。

先ほどは苦行と比喻したが、もっと正確に言うと、現代日本の『受験勉強』にも匹敵するような情報量、頭脳労働量だったかもしれない

ない。単純なイゾウにはある意味で最も恐ろしい地獄だった。

よくよく考えてみれば、江戸時代の鉄砲玉が理学の訓練など受けている訳は無く、そういうことに関してイゾウは先天的にも後天的にも向いていないのである。

義務教育を受けた現代人にはイメージが難しいかもしれないが、例えば、就職内定が決まっただけで意気揚々と大学を卒業した矢先になりたくもないのにやくざの殺し屋をやらされ、意味もなく人を殺し続ける羽目になったとしたらどうだろう。大抵の者は指をつめて勘弁してもらおうか、自ら命を絶つてしまおう。イゾウにとって理学とはいわば、そんな苦行なのである。

常識外れの修行であったが、あとは本当に努力と根性の究極の鍛錬であり、書き記すことは何もない。『東方妖怪流魔剣法』についても後に詳しく述べることで、とりあえずは現実魔界の動きに戻ろうかと思う。

と、言うのも、意識不明のベクトルを抱えたバグがやっと帰ってきたのである。

蟲の王

イゾウが奇奇怪怪と遭遇する日の前の晩。聖なる壁から30キロほど離れた森において、数十億匹、数億種類のありとあらゆる蟲が集まる一大サミットが起こった。もちろん、この怪奇現象はバグの仕業である。

バグは蟲を支配する。バグは蟲の暴君なのである。暗殺者としての分を弁えてはいるが、彼は従来の蟲のヒエラルキーの頂点を媒介として蟲世界の半分以上を水面下で征服していたのである。彼の存在自体が蟲社会の支配体制であり、彼の体は蟲の共有コロニーなのだ。

蟲の王になる。この新しい形での蟲の支配は、バグが大師匠の元で学んでいた頃に考案したものであった。自分の命令に絶対服従する分身の呪いをかけた蟲を他の種と交配させて勢力図を増やすという単純な奴隷栽培システムであったが、世代交代が恐ろしく早い蟲の社会においては爆発的かつ絶対の方法であり、さらにバグが考案した、自らの肉体の要所要所を蟲のコロニーへと改造する術と相まって色々恐ろしいことになっている。

そのためにバグは思いつきで背中から羽も生やせるし、体から甲虫や寄生虫を射出できるのだ。

バグのこの方法はかつての蟲術界の（超マイナーな）常識を覆した。従来の蟲術師はあくまでも暗殺に有益な特定の蟲しか使わず、持ち運んでもせいぜい百匹程度だったのだ。汎用性、量、質、全てにおいて圧倒的であったバグは、永い間蟲術師たちの神の座に座り続けた。

しかし不思議なことに、バグより後にこの術を使用した者は魔界にはいないということになっている。何か決定的な欠点、もしくは何か他の仕掛けがあるかもしれないと提唱する学者もいるが、単に、誰も蟲の穴蔵にはなりたがらなかったからではないかと作者は思う。

戦闘に関してならば、強くなる方法は他にいくらでもあるし、蟲は道具だという意識までは彼らの中で払拭し切れなかったのである。どちらかというところではバグはやはり異常者であった。

ベクトルを

さて、バグは見事に片腕を勇者に焼き切られてしまっていたが、重症のベクトルを半日かけて近場の安全な巣に移送し終える頃には体から湧き出した働きアリ達の突貫工事によって腕の骨組みのほとんどが再生されていた。それでも勇者の退魔の魔力によって相当回復が阻害されているらしい。バグの算段によればこのまま患部に繭を張り、血管や神経を繋ぎ直し、肉と皮を再生するという手順を踏んで、完全回復にはあと一月というところである。通常ならば十日で完了する工程であった。

そういった具合でバグは短い間の片輪をなんとも思わなかったが、問題はベクトルの胸の穴である。戦いの結果は全くの敗北であったと言う他ない。

ベクトルがあっさり胸を突き破られてしまったのでやむなく退却したが、バグ自身はまだ戦えたという未練でいっぱいであった。

しかし、バテレンの謎の術に対して何の抵抗も出来ずに退散してしまっただのも事実であり、現に大師匠もあの術の餌食になったのである。加えて、ああいうタイプは恐ろしい奥の手を平然と二つ三つ隠し持っているに違いないのである。

仮にバテレンが何か奥の手を一つでも持っていたら、バグには一対一では勝ち得ないことをバグは自覚していた。髑髏殺しは必至である。実際、あの場にはバテレンと勇者以外に四六も透明状態で潜伏していたので、その判断は正しかったと言えよう。

寝台でぐったりと動かないベクトルを見て、バグは自らの無力さを呪った。ベクトルが毒や致命傷で死ぬような男ではないのは分かっているのだが、バグの心に渦巻くのは熱の籠った呪いであった。

「わしも老いぼれたか。失ってばかりではないか」

老いという絶対的な諦観を背負いつつも、バグは語気にはまだ復讐

の炎が燃え滾っていた。

そしてその時のために、バグは脱皮をせねばならなかった。長年独自の研究を続けてきて完成間近の秘術を使い、蟲の神の座に上り詰めなければならぬ。

しかしその前に、目の前のベクトルを何とか助けられないことには何も始まらないのだ。バグは一応ベクトルの体内に蟲を放って回復に奔走させているが、そこから先は何もできないのが実情であり、実に困っていた。

しかし、そんな折にベクトルは胸に穴が開いたまま、突然起きだしたのであった。

蟲の王（後書き）

忙しくてしばらくは更新が遅れるかもしれませんが。

尸解

ベクトルは胸にぽっかり穴を開けたまま何事も無かったかのように起き上がった。ちよつとしたホラーである。と言つても最近の創作物（この小説もそうだが）ではこれぐらいの復活は普通であり、キリストの復活信仰とは何だったのだろうと聖書を読み直すレベルのキャラクター復活率にお目にかかるのも珍しくは無いのである。

バグはそういう世界を生きてきた魔物であるから（どうしても殺せない奴は蟲に食わせる）、今更奇奇怪怪の復活を見た時のイソウの様に驚いたりはしないが、むしろ復活しなかったらどうしようという不安の方が強かつたりした。

「む、ベクトル気が付いたか!？」

バグは一応真剣そうにベクトルを見つめるが、ベクトルは常の無愛想な表情のままである。いや、普段通りの冷静であると言うよりは気が抜けて呆けているようにも見える。むしろそのように見えた。そんな面をしている奴の言うことも、大抵気の抜けたものである。

『バグさん、人間達は逃しましたか』

バグは拍子抜けした。

「馬鹿者め、貴様が敵の手に落ちたためにこうして撤退しておるのだ。あれからもう半日も経つとるわ。貴様のような青二才が出しゃばったせいで私の腕もこの通りだ（そのうち直るが）!」

と、粘着質の音を立てながら腕を振りかざす。その勢いで働き蟻が数匹ベクトルの顔にとんだ。

対してベクトルの方は、蟻どころか胸の傷すら気になつてもいないようである。

「何とが言つたらどうだ!。大師匠様の敵討ち、あの忌々しい妖術師を殺すのではなかったのか!」

と凄まれてもベクトルの方は全く悪びれない。人間達をあの中で逃すことが彼にとっては予定であったためである。

ベクトルはさらりと言つてのける。

『申し訳ありません。実は今、私の体の本体の方は人間界に出向いておりまして……』

衝撃の事実。今度のバグは腰が抜けた。

「おい、何を言っている？」

『ですから、こちらの私は本体から制御、操縦されているだけのただの人形ですよ』

と言つて自らの胸に手を当てながら首を横にクルリと一回転させる。そのうち目が飛び出したりしそつである。よく見ると胸の傷からは血ではなくて、何か油のような粘液が代わりに噴出していた。恐らくベクトル特製の合成血液だろう。イゾウの時の魔王水といい、実はベクトルは合成血液マニアなのではないかと思えてくる。

バグはさすがに驚いた。完全に予想の斜め上を行かれていた。

「ま、待てベクトル、もしやお前、あの時はわざと……」

あの時とは、『聖なる壁』での戦闘のことである。

『もちろんわざとです。彼らを尾行してみたくて、負ける予定のお芝居で敵を騙してみたんです。まあ、敵があんな術を使つてくるとは思いませんでした……』

「何ということだ！」

バグは怒つた。腕の傷が泣いている。

「何故私まで騙すのだ！」

ベクトル人形はフンと鼻を鳴らした。そこはかとなくベクトルらしくない。

『人間達の言葉にこうあります。『敵をだますにはまず味方から』と。私は人間ではないので意味は分かりかねますが、こんな事を言っているくらいなのですからそれに乗つてやればころりと騙せると思ひまして……、と言つのは冗談でして、ただ、お伝えする前にこの体が人間に壊されてしまったものですから、アハハハハ！』

ベクトル人形は普段の物静かな立ち振る舞いとは真逆のとんでもないハイテンションと共にバグに色々と段取りの種明かしをした。

バグとしては、

(種明かしなどどうでもいいから静かに話せい!)
などとさらにむかむかしてきてもいいのだろうが、ベクトル人形の解説する種明かしが思いのほかダイナミックかつ芸術的で、ついつい聞き込んでしまったのである。

種明かしそのものは大したことではないので割愛するが、その大した事の無さの割には、バグはそれを聞いて、
(わしとしたことが何たる不覚かつ!)

と心中で地団太を踏んでいた。手品の種とは常にそういうものである。敵に見破られないことにこそ魔法や呪術の真価が問われる。魔界の魔術師達の神秘主義にはそういう背景もあった。

魔王ベクトルについて、この手品師じみたトリッキーさはあまり歴史の表舞台に出ることはない。先ほどは魔法の真髄は手の内を明かさぬことにあると書いたが、魔王ベクトルの場合は魔界中の魔物がベクトルの真面目そうな顔にまんまと騙されることとなるのである(別に不真面目なわけではないのだが)。

ベクトルの種明かしが一息ついたところで、バグはベクトルに今後の予定を問うた。単身で上手く乗り込んでいても所詮は魔導師、数に物を言わされればひっ捕らえられて死ぬ目に遭うのは必然である。おまけに人間界にはバテレンのような怪物がうじゃうじゃ蠢いているかも知れないではないか。

「そもそも、お前は今人間界のどこに居るのだ?」

『人間帝国という国の大教会に。奴らの拠点のようなので』

「あ?」

バグはもうどうでもよくなってしまった。魔物を絞め殺すために存在するような地理的、呪術的条件がそろったA級危険地帯、教会に侵入とは狂気の沙汰か。流石のバグであっても殺虫剤一本でやられてしまうほどに、教会施設というのは魔物にとって危険なフィールドなのである(入った事が無いのでバグの勝手な想像なのである)。

「貴様、本当に何なのだ？、何がしたいのだ？」

「偵察です。聞けば、大師匠様を襲ったのはこの帝国教会という組織の人間だそうじゃないですか。わざわざ魔界まで足を運ぶ連中が黒幕な筈がありません。この大教会のどこかにその黒幕がいるはずです。今はまだ様子見ですが、魔王になった暁には盛大に事を構えねばなりませんから、教会とはね」

「確かに、そうかもしれないが……」

この時、ベクトルは大きな間違いを犯していた。確かにベクトルの推察は間違っていないかったが、バテレンの存在をまだまだ甘く見ており、抹殺に尽力しなかったことは大きな禍根を残すことになる。しかしベクトルは自信満々なのである。今まで冷徹で理性的、シリアス満点なベクトルを見せられ続けた（イゾウみたいな）読者には申し訳ないが、ベクトルにはこんな一面があるのも事実なのであった（てこ入れと勘違いされても仕方が無い）。

そんな具合で言いくるめられてしまったバグは大人しく身を引くことにした。怒りに身を任せてもろくなことはないと思いきらされた気分である。大師匠の仇の事は決して忘れてはいないが、妙に冷めてしまった。

「私はまんまと囿を演じきったわけか。ならば一度貴様の館に帰って待機させてもらう。貴様、ただでは戻ってくるなよ」

『もちろんです』

ベクトル人形はそう言うと、糸が切れた人形そのままの有様でその場に崩れ落ちた。

この時の会話以降、ベクトルの人間界での行動は全くの謎となっている。大戦後には本当に人間界に行っていたのだろうかと疑う歴史家が現れるほどにうやむやであり、ベクトル七不思議（残りの六不思議はいつの日かまた）の一つとして数えられている。

ただ確かなのは、ベクトルが帰還したときには鉄砲の製造法や教会の秘術である『聖霊魔法』の情報を手土産に持って帰ってきたらしいということである。しかし、やっぱり「元々ベクトルは知って

いたのではないか」と言い出す連中が現れ、結果、『ベクトル、バ
テレン戦サボリ説』が後の魔界でささやかれることとなってしま
うのである。

それはさておき、会話が終了したあとは元の重病人（人形）に戻
ってしまつたベクトルを抱え、バグは一路、ベクトルの館へと戻る
こととなる。

ベクトルと同等、もしくはそれ以上に面倒な怪物の待つ館へ。バ
グの災難はまだ続くのである。

奇奇怪怪の未完成

時は再び奇奇怪怪による館襲撃に移る。

館に着くと同時にバグは異変を感じ取った。侵入者在り、排除せよと心の中で警告音が鳴り響く。蟲達と共に興奮し、いつの間にかベクトルの人形もどこかに放り投げてしまっていた。

(こんな人形、そこら辺で腐ってしまおうが問題は無かるう)と、ここまで運んできたのが馬鹿らしく感じられるような気持ちであったことはいうまでもあるまい。

ここまでの移動にバグは体力の半分ほどを使い切っていた。片道100キロメートル相当の追跡路を一日で往復したのである。しかも帰りはベクトル人形付であり、いくらバグが上級魔物の力を持っているようと移動に労力が少なからず付きまとうのも当然であった。まあ、そもそも現代日本の人々などはたった二時間飛行機や新幹線に乗っているだけで疲れる脆弱な生き物なのであるから、比べてみればやっぱりバグは超人的なのである(人ではない)。

ベクトルがイゾウとともに鉄鬼を殺しに行った時もベクトルは涼しい顔をしていたが、奇襲のための魔法の近道を作るまでには実は一日ほどかかっていたというのはここだけの話である。

バグは蟲を使わずとも強い。蟲を使うような余裕が無いときでも奇奇怪怪〓 鶴のいやらしい邪気ぐらいならば察知できて当然である(奇奇怪怪自身が隠す気もないから当然かもしれないが)。

(強いとも弱いとも分からん、ただただ狂った気だ。何者か?)
もしかしたらベクトル本人かなー、などとチラリと思ったりもしたが、バグはベクトルがさすがにそこまでおちゃらけているとは思わなかったため、真面目に侵入者を偵察しようとした。

気配を消して異物に接近するバグ。そこに居るのは気絶したイゾウとククリ、そして気の狂ったサイコパスキマイラこと奇奇怪怪〓 鶴であったことは言うまでもない。

ベクトルでなくて少しほっとしたのはここだけの話である。

(それはさておき、あの妖怪は何奴か。しかしまあ、また若造を助ける羽目になるとは、やれやれ……)

と、半日前の聖なる壁での戦いを思い出しながらふと思うのだが、さすがにあの二人は助け出したところで、

「いやあどうも、実は自分偽者です」
などと言わないだろうかいいのである。

一方奇奇怪怪は、館をふらついて回った後に飽きてまた元の死体処理場に戻ってきていた所で、意味もなくニヤニヤして隙だらけ、というより隙しかなかった。

だが、そもそも奇奇怪怪は作戦や戦闘を効率良くこなすという考え方自体を持っていない。そこが敵地であろうと、腐臭につられてきた蟲に体を齧られて、

「痛え、痛えよお！」

とびつくら仰天するまでは絶対に警戒心を持って物事に励むようなことはしない、どうしようもない男なのである。

(仕方ない。残りの輩(蟲)で奇襲して二人をさっさと助け出してしまう。死なれては困る)

バグは物陰から飛び出し、寄生虫やら甲虫やら、とにかく害虫らしき害虫を奇奇怪怪に浴びせかけた。

視覚的にイメージするならば、全身に仕込んだマシンガンから無数の弾が発射される光景を思い浮かべるのがそれに近い。復旧中の右手からは何もでなかったが、それでもたいした威力である。

魔界でこれを用いられて正しく対処できるものはそうまい。奇奇怪怪は瞬く間に蟲の大群に集られて取り込まれ、泥人形のようになってしまった。こんな事を言えば先が読めちゃうが、普通ならば即死である。

奇奇怪怪は、

「痛え、痛えよお！」

と叫ぶ間もなく必死に蟲を取り払おうとしてもがいている。だが、

キマイラの怪力も無数の蟲には暖簾に腕押し。体中の穴という穴から巧妙に侵入する害虫たちに対して為す術もない。蟲の卵やら幼虫やら毒やらをずぶずぶと体内に注ぎ込まれるその様は、強姦の被害者とそう変わらない無力の権化であった。

バグはこの時、気付かぬ内にイゾウに与えられた苦痛の仕返しを成功させていたのである。夢の中のイゾウと魔剣は手を打って喜んでいることだろう。

バグはあつという間に奇奇怪怪を打ち倒してしまった。如何に不死身の奇奇怪怪と言えどもこのような仕打ちを受けては反撃のしようも復活のしようもない。下手をするとこのまま身体を蟲の国に変えられてしまう。そうなれば奇奇怪怪にも自分がどうなってしまうかは分からなかった。

最悪でも自分に群がる蟲のどれか一匹に幻術融合をかけて乗っ取ってしまえば、奇奇怪怪はこの場をひっそりと逃げ出すことが出来た。だが、それだけはあくまでも最悪、最終の手段である。奇奇怪怪は生涯を通して、面白いもの以外に幻術をかけようは決してしなかった。

前にも述べたように奇奇怪怪の幻術の真髄は相手との意識の融合にある。もつと具体的に言い表すのならば、意識を自我の溶けた溶液のように考えてみればよい。奇奇怪怪の幻術とは元々保たれていた他人の意識の心の平衡に自らの自我のエキスを流し込んでしまう術であり、本来はそれだけでは自由自在に幻覚を見せたりするようなことは出来ないのである。であるから、この術が幻覚を見せるのは全て、混ぜ込む奇奇怪怪の自我エキスの濃度、性質の奇怪さによるものだと言える。

何十、何百回とこの術を使う奇奇怪怪の自我はその度に少量ずつ他者と溶け合ってシチューのようになっていくに違いないが、それでも自らの自我の領分を保ち続けているのが奇奇怪怪の真の恐ろしさと言える。つまり、我が強過ぎるのである。

そして、そんな私の強い奇奇怪怪だからこそ、相手と意識を融合

するだけで相手を苦しめられるし、逆に生き延びるための最適の手段が取れないのである。

奇奇怪怪のこの本質とは彼にとって最大の武器であり、弱点でもあった。

よって、後の者が勝手に奇奇怪怪の幻術能力だけを評価して、「奇奇怪怪が理性が妥協かを持つていたのならば、彼が魔王になるはずであった」

などと言うのは全くのお門違いなことなのである。全国数万の幻術ファンには申し訳ないが、奇奇怪怪がそんなことをするのであれば彼の幻術は相手と自分をつなぐテレパシーほどの効果すら発揮し得なかつただろう。理性や妥協は我を薄める中和剤なのである。

そもそも、一般において幻術は便利でイカサマなイメージを抱かれているかもしれないが、そのイメージそのものが間違っている。

幻術の祖とは、自らの共同体への他者の干渉を防ぐ呪禁なのである。それらは自らの共同体と外との境界線の道に施されており、結界のようなものや精霊使役のサモンラップなどもこれに含まれる。つまり、自らと他者の境界たる道に術を施すことで関係を調節するというのが幻術の本当の意義なのであり、幻を見せるという効果も幻術の為せる業の一端にしか過ぎないのである。

奇奇怪怪の術も意識の支配的融合という点では他者との関係を図るといふ幻術の真意に適うものであるといえるが、不完全なのである。奇奇怪怪が完全なる幻術師であれば、蟲と融合などせずとも切り抜けることが出来たはずであるが、彼には相手と和を結ぶような幻術は全くもって専門外。幻術師としての未完成を証明している。

そして、不完全な奇奇怪怪は蟲団子になりかけていた。数千の蟲が宿主にお構いなく暴れまわっており、バグも決してそれを止めるような事はしない。奇奇怪怪＝鵜の中の奇奇怪怪は雨傘山にいる奇奇怪怪の分身、意識の一部でしかなかったが、それでも奇奇怪怪＝鵜は事実上の終了を迎えてしまうのである。そんなものは御免であった。死なないからといって死ぬような目に遭うのが怖くないとい

うのは大間違いである。心が乱れすぎて幻術も使えるような状況ではなかった。

万事休す。不完全ながらも不死である幻術使いの巨星であっても相性の向き不向きでこうも簡単に敗北して、文字通り蟲の巣窟にされてしまうのだろうか。

だが、ここで発揮されるの奇奇怪怪の狂気じみた悪運、荒唐無稽に与えられるラストチャンス。奇奇怪怪Ⅱ鵜の肉体を滅ぼす最初で最後で最大のチャンスではあったが、ここにまた、新たな闖入者が現れることによって事態は一変するのである。

奇奇怪怪の義兄弟、コントンが現れた。

奇奇怪怪の未完成（後書き）

気がつけば五十話です。記念すべきナンバーです。途中で文体が変わったりイゾウの知能レベルが急降下したりもしましたが、かれこれやっと一つの大台に乗ったような気持ちになります。幸せです。百回まで行ったらキャラクター人気投票でもやりましょうか（笑）。あと、どんな些細なことでもいいので感想をいただけたらさらに幸せです。

帝国崩壊と自由な放火魔（前書き）

前に鉄鬼を倒したあたりで「ここまでが第一章ですよ」みたいなことを書きましたが、やっぱりここまでが第一章ということにしておきます。あのころはこんな展開になるとは考えもしていなかったのです。

あ、『第一部完』などと言うと誤解されそうですが、まだまだ続きますよ？

帝国崩壊と自由な放火魔

コントンは何食わぬ顔で現れた。まるで自分の家か何かにいるような気持ちだったのかもしれないが、とにかくのっそりのっそりと通路の物陰から歩いて出てきた。妙にだらけた姿勢が休日のお父さんのようである。

「だから言ったじゃねえかよ兄弟。周りに気をつけなきゃあ」

と、殺意をギンギンに漲らせているバグを背景か何かのように言いのけている。奇奇怪怪一派は基本的に緊張感が無いが、それはもはや職業病のようなものである。

魔界ではそんな余裕をかます魔物から死んで行く習いであるが、コントンのそんな余裕には理由はちゃんとする（のかもしれない）。「すまないね爺さん、こんなに散らかして……。ここはあんたの館かい？」

確かに辺りは散らかっていた。奇奇怪怪が散らかした死体が主であるが、半分ほどはバグの蟲である。

このコントンのフレンドリーな口調にいやみつたらしさが微塵も感じられないのがむしろ嫌味であり、バグの琴線を荒くなでた。

バグは本日三連戦目に突入しようとしている自分が少し情けなく感じた。若い頃は戦いと聞けば大喜びした血気盛んな部類に属していたが、今日は戦うたびに相手のランクが落ちていつているような気がしてならない（実際はそんなことはないのだが）。一人目からは敗走し、二人目は蜂の巣にしてやった。三人目はいかようにしてくれようかという疲れの混じった怒りがバグを動かしていた。勢いに任せて、

「まったく害虫の多い日だ。殺してやる」と物騒なことを言い放つ。

この小説は今までずっと命の取り合いばかりだったので勘違いされてしまうだろうこと請け合いであるが、まず、魔界の情勢を乱世

の一言で片付けてきたのがまずかった。乱世乱世と分かり切ったことのように言ってはきたが、それは魔王を志す魔物たちが魔王の座を奪い合うための戦いに明け暮れていて統治機構が安定していないという意味であり、国家総動員して上から下までみんなで殺し合いしている訳ではないのである。

魔界にもそこそこイケてる都会はあるし、(戦闘に巻き込まれない限りは)のほとんど平和に魔物たちが暮らす村々もある。魔王が誰であろうと大して影響されない魔物たちの営みというものが確かに魔界には存在しているのである。

この魔界のイメージに一番近いのは三国時代の中国である。力を失った封建権力の復興を大義名分に、屈強な強者達が覇を争う様などはちようどいい。また、戦場にならない場所では割と平和だったりするが、とぼっちりで数十万レベルの命が虐殺されたりもするのイメージに合う。とは言いつつも魔界はユーラシア大陸ほど広くはない上、一勢力の兵力も多くとも一万を超えない。

なんともはつきりとは示せないのであるが、魔界はミニマム三国志でも言うべき世界観を持っている、と誤解を招くこと承知でここに断言しておく。だが、あくまでこれも隣接する人間界のことを考慮しないで言っていることなので忘れてもらってもかまわない。

そう、忘れてもらってかまわないのだが、蓋し、ファンタジー小説において世界観があることだと作者が言い出すということ自体が描写力不足を表すパラメータともいえるのではないかとふと思っ

た。
そもそもファンタジーにおいて世界観という言葉語り手が口に出すこと自体がタブーである。ファンタジーという空間においては幻想を大真面目に語らねばならないわけで、

「世界観はこうですよ」

と言ってしまうは舞台装置のボロが見え、全ては台無しである。そういったギャグが好まれるケースもあるようではあるが、ファンタジーでは基本的に「法度なはずである。ちなみに、私はギャグのつ

もりではなく、大真面目に書いているつもりである。

また、そもそもこの小説はイゾウの語りであるという点からしても作者が何か口出ししていいものではなかったはずなのだ（別に設定を忘れていたわけではなかった）。

架空戦記ファンタジーものを書くこうとしたときに世界観を自然に展開できなくてどうする、と自嘲混じりにこうして書いているわけであるが、そもそも小説にはこれだと言う決まりがないというのも真実の一端ではある。その自由ゆえに作者は今困惑している。

結局何が言いたいのかと言うと、この小説は作者にも何の小説か分からなくなってきたということである。読者が作者のメタトークに晒されたりこんな愚痴をこぼされたりするのもこの小説がファンタジーとは少し異なった謎の小説であるからである、ということを一応言っておきたかった。言い訳である。

長々と書いたが、そんなことは物語には全く関係ない。

「爺さん、そう怒らないでくれよ。俺は兄弟を迎えに来たんだ。見逃してくれよ」

と、あくまで穏便に済ませようとするコントンを尻目に、物騒なバグは奇奇怪怪の時と同じように蟲をけしかける。

コントンは無防備であった。質素な衣服を除いては何も身に着けていないし、勇者のときのように物理的バリアを張っている様子もない。無抵抗の相手には惨い仕打ちである。

しかし、不思議なことが起こった。蟲たちがコントンに接近した途端に蟲たちの統制が取れなくなり、結果コントンに蟲は寄り付かなかった。バグが自らの手足を動かすように動かせるはず蟲たちがコントンを襲うのを拒むようである。

バグの蟲たちは基本的に死を恐れないように訓練（呪術的洗脳）されているため、殺虫剤はおろか何かしらの罠があるうと臆することなく突っ込んで行き、少なくとも犬死するはずである。だが、コントンは無傷どころか一匹の蟲も殺していない。

バグは蟲たちの王として蟲が文字通り虫けらのように死んでいく

事に対しては仕方のないことと心を動かさなかったが、蟲に背かれる事だけは決して許せなかった。そんな蟲は社会不適格者であり、度々遺伝的欠損などで現れては同族によって始末されてきた。専制下の人間社会とそっくりである。

遺伝的欠損ならば不適格者が現れるのも仕方ない。だが、今ここで起こっていることはそれとは違うようなのである。

今度は甲虫弾丸をコントンに向けて放つ。が、当たらない。弾丸の推進力は甲虫の飛行によるものであるから、甲虫に影響が出たのは確かである。だが、蟲の本能としてバグがプログラミングしてきた呪縛がこつも簡単に無力化されてしまうのはおかしい。どうやったのだらう。

コントンはほくそ笑んでいる。驚く暴君の顔が面白かったらしい。「はあ、無駄だよ爺さん。このコントンの周囲では何者も自由だ。」戦闘に何ら関係無さそうな言葉が出てきた。

「自由だと?」
「ああ、自由さ。あなたの陰湿な支配からこの虫からは解放されたのさ。」

そう言い放つコントンの足元ではムカデと蜂が無意味に争っており、互いに毒針を相手の体に突き刺したかと思うと、そのままポトリと仲良く死んでしまった。このような事もバグの支配下ではありえない事である。まるで、術として洗練された蟲が、ただの蟲に戻ってしまったたようである。

「あんたみたいな奴隷使いの術師はこの『自由結界』でイチコロさ。面白い術だらう?」
どうやらコントンの周囲に球体状の結界が張つてあるようだ。しかも、中に入ってしまったものは自由になってしまつらしい。『自由』という言葉と相まって胡散臭さが際立つた術である。

しかし、結界とは空間を抽象的に束縛して一定の意味を与えるものであるから、結界に入つたら自由になるというのは些かおかしい話である。バグは専門外なのでこの謎について深く考えもしなかつ

だが、大師匠のような魔法を哲学して止まないタイプの術師が仮にこの術に行くわけば、戦闘そっちのけで面白がったかもしれない。コントンはこういう変な術を好んで使った（しかも効果的に）。

確かに変な術ではあったが、蟲を封じられたのはバグにとって致命的である。バグにとって蟲とは剣であり盾であり、そして身体そのものなのである。むしろバグにしか効かないような術であるが、コントンはバグの戦い様を覗いていたのだろうか。

「爺さん、まあそんな怖い顔をしないでくれよ。俺は本当にただ、ここに転がっている義兄弟を引き取りに来ただけなんだ」

もはや生物かも分からない姿の奇奇怪怪を指差して大きく欠伸をしているコントンがバグは無性に気に入らなかった。バグは体術の構えをとった。

「生きて帰すと思うか、若造！」

バグの強さは蟲と体術との融合にある。蟲を体術で活かし、体術を蟲で活かす。この戦法が封印されれば戦力は大幅に減殺されるのは承知であったが、それでもコントンが気に入らなかった。殺す。

バグは複雑に関節をしならせ、半ば這うようにコントンへと向かっていく。尺取虫の蠕動のような動きに飛蝗のような跳躍、ゴキブリのような速さを備えたグロテスクな美しさを孕むモーションであった。この超低空姿勢から繰り出される体術は常人の想像を絶するものに違いない。しかしコントンは余裕のだらしなさを崩さなかった。

コントンは余裕である。

「あなた、自分というものが分かっていないねえ」

その言葉の意味はすぐに分かった。コントンはたった一つ張っているだけの結界で、バグを封殺するつもりだったのである。

バグは結界の中に入ってしまったからようやく自分のミスに気がついた。頭で考えて気付いたというのもあるが、体の中で起こり始めた変化を知覚したということもあった。その結論はバグにとって最も揺らがないはずのものの崩壊であり、生命の危機でもあった。

コントンは計算通り（何時計算したのかは不明）、
「自由の本質とは何か、それこそ単純明快。支配への『反乱』さ。
気付かず入ってきちゃったのが運の尽きよ」
としたり顔である。何が起こったか。

と言う程の事でも実はない。バグの身体に潜む数万体、数千種の
蟲どもが『自由』になり、バグの体の中で好き勝手始めたのである。
バグという蟲のコロニー帝国の崩壊である。

むしろ不思議なのはどうやってコントンがこうも的確にバグに効
果的な術である『自由結界』を用いたかということであるが、それ
をここで解き明かす術はない。

ただ、想像してみても欲しい。生きていく上で当然の働きを持つ
要素、例えば内臓器官や筋肉が、身体の主たる頭部に反乱を起こし
て自分勝手に収縮したり運動を激しくしたり、果てには体の中を這
い回ったりしたらどうなるだろうか。

バグは屈辱と苦痛に塗れた。帝国の王たる存在が民衆の反乱に
うちもさっちもいなくなつて地べたを這い蹲っているのである。
まるで蟲のように。

コントンは、
「勝手に入ってきたあんたが悪いんだぜ、爺さん」

と、本来は自分たちが侵入者なのに言い放つた。「コントンよ、
それがお前の言う自由か？」と問い詰めたくなる身勝手である。

バグは苦痛に身を擦じらせ弱弱い吐息を漏らし、やがて気を失
つた。意識が途切れたのと同時に体中から蟲が湧き出し、大半はど
こかに行ってしまった。バグの体の中でしか生きていけない少数寄
生虫を残すのみで、それらによる生命維持に手一杯のようである。
下手をすれば植物状態にもなりかねなかった。

それを見ていたコントンが、一瞬だけ侮蔑の表情を見せた。

「ふん、奴隷使いの末路とは浅ましいものよ」

コントンは自由結界によって奇奇怪怪から蟲を取り払った。蟲と
は本来何の意味もなく一箇所に群がったりするものではないため、

バグの呪縛から自由になった途端に溶けるように飛び去っていつてしまった。

そして、恐るべきは奇奇怪怪の生命力である。

『助かったぜ兄弟!』

と、いつの間にか意識を取り戻しては穴だらけの体で騒いでいた。適当な性格の奇奇怪怪のことだから以前にも恐らくこういったことがあったのだろう。コントンは手馴れた様子で奇奇怪怪を担ぎ上げた。奇奇怪怪の体からは体に残留した蟲の卵が粘液と共にだらだらと垂れている。

館には気の狂いそうな静寂が敷かれていた。コントンは少しの間その狂気に酔いしれていたが、やがて

「帰るか、奇の字よ?」

と我に帰った。

そう、このまま帰ってくれるのならばどんなに良かった事か。もし彼らがこのまま帰っていけば互いに痛み分けという形で一応の決着がついたはずだったのだ。

だが、ここで奇奇怪怪は余計なことを言い出した。

『待ってくれ兄弟。火、持っていないか?』

「煙草か?。持っていないぞ」

煙草の煙で体内に残った無視でも燻すのかとコントンは予想した。しかし、奇奇怪怪の思考は常に他の予想の斜め上、あさつての方向を突っ走る。

『馬鹿野郎、館に火いつけんだよ』

何故そうなる、とは誰も突っ込まない。

「ん、そうか。それも風情があるかもな」

さすがはサイコパス盗賊。物を取らずに火をつける。たいした嫌がらせ根性である。

この下劣な提案にコントンは何の躊躇も示さなかった。次の瞬間には指先からポツと小さな火の玉を出だし、近くの壁に火をつけていた。そして、当人達は火付け遊びに飽きたらどこからともなく消え

去って行ってしまった。

炎とは侵略と活力の象徴である。火の手は瞬間に館に広がり、特殊な防御の生されたベクトルの秘密研究所以外は全焼する他なかった。

ベクトル館はエルフの森の中にあつたというのは前述の通りである。幸い森に飛び火して延焼を起こすような事態には至らなかつたが、エルフが火を嫌う種族であるのも重なり合つてエルフの里に大打撃を与えることとなる。

そして、何よりも気になるのは館に残されたイゾウ、ククリ、そしてバグ（とベクトル人形）の安否であるが、火事を敏感に察知して殺到したエルフ達が見つけたのは残された館の残骸のみであつた。彼らはどこへ行ったのか。それを説明するのは簡単なことであるがその前に、彼らが新しく行動を起こすまでの世界の動きについて次回からは触れていこうかと思う。

帝国崩壊と自由な放火魔（後書き）

さて、人間界サイドと魔界サイド、思えば定石を無視した無茶な数の登場人物数と相成りましたが、この先もつと増えていくかと思えます。それを通じて色々な視点からこの世界を書いてみたいと思っていますのでまた大きく文体が変わったりするかも知れませんが、どうかお付き合いください。

これからも『魔王の懐刀』をよろしくお願い致します。

十字架の邪教

バテレンは世界最強の世界宗教、基督教の徒でありながらこの世界において邪教徒として始めなければならなかった。しかし、彼は宣教師である。異教徒の渦巻くアウェイでの布教こそ専門であり、邪なものが正に取って代わる過程を幾多も目撃し、また、創造してきたのである。弱者につけ込み強者に媚び、中流階級に一目置かれることにおいての技術において彼の右に出る者は存在しないだろう。邪のプロフェッショナルである。

そもそも、邪というのはアンチ、草葉の陰から忍び寄る暗黒の属性である故にアウトロー、歴史の正位置には決して座ることができずに日陰を歩む事を宿命づけられた属性である。そして、彼らの敵意の先には必ず燦然と輝く正義があった。

つまり、邪教というものも正教らしきものがあつて初めて成立する概念である。そして、世に正しいとされる価値観があるところに疑問をもつて挑む、これが狂気の始まりである。

狂気。この自我の象徴のような不回転のエネルギーは、これを押さえつける正しさの力と複雑に絡まり合つて社会を渾沌と調和の振動の波に巻き込んでいるのである。

だからテロが起こる、弾圧がある、裁判がある。

だからこそ、邪教というものは特性として民衆支配には向かず狂気を煽り立てて正義を真っ向から否定する性質を十字架のように背負っているのである。あえてここで誤解を招く覚悟で言おう、狂気とは十字架であり、十字架とは狂気である、と。

途中で何処かに下ろすこともできず、かと言って否定することも誰かに押し付けることもできない我が神への奉仕。我々の歴史で哲人と呼べるような人間共は皆これを背負って生きていた。考える人間は皆少なからず狂気を持っている。

しかし、それが何か決まりきつた結果に帰結するとはもちろん限

らず、数々の偉人、変人、英雄、猟奇者が世の暗黒を跋扈しなかった時代はない。

狂気を持った個体が世界を動かし、正気を持った個体が世界を保つのであり、その過程が進化とも言える。

そして、これは我々の世界に限ったことでもないだろう。勇者と魔王という対立するシステムに永らく依拠してきたこの人間界と魔界も変わらなければならぬ日が来る。多分。

さて、ここで人間界に目を移すのはもちろん、ベクトルだけでなくバテレンも大師匠襲撃の一件を通して次の行動に移ろうとしていたからである。

しかし、バテレンは直ちに自ら行動できるほど自由な立場にはいなかった。魔王選定によって人事機構が滅茶苦茶のまま放置されている魔界とは違い、人間界は組織的だった。彼のやるべきことは人間界にも沢山ある。

その中にはバテレンが大好きな政治的権謀術数合戦も当然含まれる。バテレンは大いにその邪な才能を振るう。

帝国首都、皇領大議館にて。バテレンはある男の執務室に呼び出されていた。

「宗教屋が。無用に魔界にちよっかいを出しよって」

苛立ち混じりにバテレンを詰る男は帝国幹部の一人、陸軍を司る大將軍ナルビナであった。顔から今にも「余計な事をしてくれたな」という文字が浮かび上がってきそうである。

「魔界への無断での接触は死罪。忘れたわけではあるまい」

ああ、そうか。つまり、バテレンの魔界潜入がこの男に知れてしまったのである。聖なる壁を含む魔界及び他国との境目の警備は彼の率いる陸軍の与り知るところであるから、恐らくその方の口から彼に情報が渡ったのだ。

当然のことであるが人間にとって魔界との接触は第一級の国事行為として行われなければならないものである。一国、一勢力どころか

「一人の差し金で魔界に手を出すなどということはあるとは思ってはいない。『お前何様やねん』とどつかれるようなへマ、というより出しゃばりな行為である。」

「しかも、やっとの思いで我が国が確保した勇者をパーティを組む前に魔界に連れていくなど重大な越権行為であるぞ。分かっているのか」

ナルビナの言う通りである。しかも、未完成なままの勇者を魔王不在の魔界に連れ込んだというだけでもRPG的に考えてアウトである。勇者が仮に傷でも負ってしまえばそれだけで人間界は大混乱に陥るだろう（もう負っちゃった）。それほど勇者とは大事な存在なのだ。

そもそも、人間界にとって勇者とは何であるかを説明していなかった気がする。いい機会であるからこのままナルビナの口を借りて勇者という存在が如何なるものかを解説しようかと思う。

「よいか、勇者とは人間の希望にして唯一、人間でありながら強大で邪悪な魔王と互角に戦いを挑める存在なのだ。数十年に一度、人種国籍を問わず『勇者のしるし』を体に宿して生まれてくる勇者は同時に魔王の出現と魔界との大戦を告げ、十四歳になったら魔王討伐のためにパーティを組み、魔界へ行く。その戦いの結果如何でこの世界のバランスが決まってしまうのだ。未だかつて歴代魔王と勇者の間に明確な決着が着いたことはないが、もしも勇者が負ければ人間界は魔物に攻め滅ぼされてしまうに違いないのだぞ！」

『左様ですか。その調子でドンドンどうぞ』

と、狂言回しにはバテレンもノリがいい。こういったことをホイホイ言ってくれるから人間は好きだ。魔物は自分勝手にいけない（特に奇々怪々）。

「うむ。そして今回、我々人間帝国の民に勇者が現れたのだ。そして、それは人間界の主権を握ることにほかならない。我らが皇帝様はこれを機に人間界統合を目指されたのである。だが、その王道のさなか、貴様という大馬鹿者は……」

勝手に勇者を連れ出して肩を砕かれ、変な薬を注射して帰ってきたのである。しかも魔物の首付きである。お叱りを受けるだけならまだいいが、場合によっては首をちょんぎられてお終いである。

だが、そうなることも計算してバテレンはいろいろ手を回していたらしく、ここでも大師匠の時のようなバテレンマジックが起こる。ただし、今回は卑猥なうえにきわどい。心せよ。

アリス

バテレンは、

『まあまあ、勇者はしばらくは我がクルセイダーの特殊戦闘員見習いとして私が教育すると、前の会議で決まったではありませんか』
と、しれっと答える。それ故に勇者の監督権は我にあり、多少の戦闘訓練や教育は必要不可欠の事として見逃していただきたいと言いたいらしい。確かにかつて会議にてそう決めたのなら筋が通るかもしれないが、実際のところはその会議においてもバテレンのいやらしく毒々しい策と術が飛び交っていたに違いない。そうでなければまだまだ若手のバテレンが陸軍に先だつてそのような権利を持つはずがないのである。例えば、参加者に気づかれぬように会場に精神錯乱剤を焚いて参加者を混乱させ、うやむやの決議を通すぐらいの事はしかならないのではないだろうか。

バテレンはぬらりとナルビナの追求を躲した。ナルビナにお叱りをいただくようなことは別に痛くも痒くもないので、この程度の情報は隠蔽することもなく意図的に適当にやっていたのである。むしろ敵対派を炙り出すには丁度いい餌である。

しかし、ナルビナは未だバテレンの策と術の波には捉えられていない様子だった。將軍の地位についているだけあつて舌戦には相当慣れているようである。「叩き上げの軍人をなめるな」と目が言っている。

ナルビナは霧を腕でかき払うように、

「越権には変わりない。貴様あ、このナルビナが、お前が裏でこそそやっていふことに気付かんとでも思うか」

と語調を荒らげた。ここでナルビナは本題を持ち出したと言ってもいい。勇者の件のみならず、油断ならないバテレンに対してこの場で釘を打っておくことが第一と判断したのだろう。バテレンをさっさと抹殺してしまう事の次に賢明な選択である（バテレンがさうす

るように仕向けたのであるが)。

当時、バテレンは人間帝国上層部において最も謎のヴェールに包まれていた男であった。その信ずるキリストの教えとやらも相当危険だが、そもそも帝国への参加の経緯からして怪しさ満点である。

ある日東方からふらりと現れては数々の新技術と秘法を伝えて皇帝に取り入り、のらりくらりと経歴を明かさぬまま今の地位に上り詰めたという異常な経緯はどこぞのRPGの悪役を彷彿とさせる。しかもその背後には皇帝のみならず有力貴族、既存の教会勢力の重鎮達までもが控えていて彼に異様な肩入れをしているのである。さらに気味の悪いことに、何時の間にも彼らの支持を得ていたのか、彼らは何のためにバテレンを支持しているのかすら今をもって謎であるのだ。

ある時、ナルビナは痺れを切らしていくつかの貴族を問いただしたことがある。しかし、

「なぜあなたはあの男に肩を貸すのだ？」

という質問に対して返ってくる返事は彼の疑念を増大させることにしか意味をなさなかった。中にはバテレンを神か何かのように褒めちぎるような者もいる始末であり、奇妙で不気味な印象を振りまいていた。

このような状況にナルビナは口にも出さないが、皇帝をはじめとするパトロン達はバテレンに何らかの弱みを握られているのではないかと考えていた。だが、その証拠は皆無に近いものであった。

しかし、その線が巧妙に隠してあるのみで他には叩けばホコリが出てくることばかりであり、本来ならばすぐにバテレンを処刑台に上らせるようなネタも上がっているのである。だが、これもバテレンの撒き餌であることに気付くものはいなかった。

『私めが何か？』

「とぼけるな。あのゲンナイとかいう術者と裏でこそそとやっている儀式(我々の世界という実験)、あれの事を明るみに出せばお前の首などすぐに飛ばせるのだぞ」

と、きつとおぞましくて人に言えないようなバテレンの裏仕事の証拠の一つを、水戸黄門の印籠か何かのように示した。ナルビナにとってはバテレンを屈服させる秘密兵器のような存在だったのだろうが、バテレンにとっては、

「あ、それね」

という程度のものであった。その証拠品は所謂麻薬であったのだが、この程度で悪の証拠というには余りにも平和ボケしている。お前本当に將軍かよ、とバテレンは心中でせせら笑った。もちろん、ナルビナが自分をすぐに処刑台に上らせるような度胸はないとも踏んでいた。

そして、

(釣れた)

と内心でほくそ笑んでいるのである。

相手をいつでも処刑台に上らせられるようなネタを握った、と思いついた人間はむしろ相手を意のままに操ろうとする。バテレンにとってはそれが最大の間隙なのである。

バテレンはお得意の術を発動した。

『ああ、そんなことまでお耳に入っていたとは……。見逃してくださいませ、どうか、どうか』

と一転、大師匠の時のように不自然なほどに態度を変え、相手の意識の変調を誘う。こうやって相手が自分の上に立っていると錯覚している時が一番安定であり、逆に相手を支配してしまうのに向いているとバテレンは知っていた。

ナルビナはやはり、

「ええいやかましい。このことは白日のもとに晒し、絞首刑にしてくれるわ」

と言いつつも、やはり心のどこかでこのネタを使ってバテレンを支配しようという心理を働かせていた。政界のスキヤンドルの握り合いの世界では、ネタを握って相手を支配する関係は捨てがたい。人間には、制御できるものは敵性があつたとしても制御したがるとい

う習性がある。『上手くやっていく』のが好きなのである、人間は。『ひい、どうかお見逃しください』

と命乞いに近い文言の中にバテレンはありったけの術を仕込んでいた。相手が増長し、有頂天になってまともな判断力を失うように言葉、波長を選択し、抑揚をつけて話す。相手を気づかぬ内に特定の精神状態へと誘導する、『話術』の中でもかなりの高等技術であった。

つまり、ただ媚び諂っている訳ではない。バテレンはこのような手で相手を精神的、肉体的に暗示をかけ、一度優位に立たせた後に徐々に相手の心を腐らせて我がものにしてしまっているのだ。しかもそれは催眠術のように不可視である。

実際に人間帝国中枢には、自分ではバテレンに大して優位性を保っているような気でないが逆に支配され、利用されてしまっている者たちが少なからずいた。そしてさらに恐ろしいことには、その殆どは、

「バテレン？、あのような小物など眼中にない」

と割と本気で思っている（そう思うように催眠されている）ために、健常者もその異常さに中々気付けないのである。

そして、この大將軍ナルビナもこの男の毒牙にかかり、来る日の野望のための手駒にされようとしていた。

ナルビナはバテレンの怯えぶりに満足し、

「貴様、わしの目の黒い内はこれ以上好きにはさせんぞ」

などと言いながら証拠品を懐に戻した。バテレンを実際に抹殺せずともこの優越感さえ味わえればいい、という不気味精神構造にナルビナの思考は改造されていた。やがて、この感覚に対して中毒患者のようになり、

「頼むから媚びてくれえ！」

などと言いだす程に精神を病むことになる。

これでほぼ仕込みは終わったと言っていていいが、バテレンはここで最後に決定的なトドメの一手を指した。バテレンは頃合を見て、

『お見逃しいただいた、ほんの感謝の気持ちの印でございます。どうかお受取りくださいませ』

と言ってドアの方に注意を促すと、そこにはよそいきのお洒落を決め込んだ一人の少女が立っていた。

この少女、どう見てもいいとこのお嬢様にしか見えないのだが、バテレンはまるでこの少女を性的賄賂としてナルビナに贈るようなことを言っている。

「どういうつもりだバテレン!？」

こういう『贈り物』は、薄汚い女奴隷と相場が決まっているのではないか?、などとは聞けず、とにかくひたすら混乱する。

対してバテレンはさもそれが当然の習いであるかのように、
『ですから、贈り物でございます。ご自由にお使いください』

と下品な笑みを作った。つまりは、やはりそういう意味である。

少女は、バテレンの言う意味を知ってか知らずか莞爾として微笑んだ。そのあどけない様から放たれる魔力は状況と相まってナルビナに、彼本来のものでない幼女趣味の性癖を発現させるのに十分なものであった。

思わずナルビナは生唾を飲み込んだ。もはやバテレンを疑う気持ちすらどこかに消え去ってしまった。

「も、もうよい!、下がれ、バテレン!」

『では、お部屋の準備をしまいましょう。』

尋常でない剣幕のナルビナに一瞥をくれると、バテレンは何事もなかったのように執務室を退出した。

少女がこの後どのような目に遭うかは想像に容易い。しかし、少女の身を青少年保護条的観点から案じる必要はない。あくまで被害者はナルビナなのである。

なぜならば、この少女こそが後にバテレン、ゲンナイと並んで帝国の『三怪人』と呼ばれることになる妖女(もとい幼女)、性魔導士『アリス』であるからだ。

三怪人（前書き）

番外編を挿むつもりが本編の続きのようになってしまいました。軌道修正するかもしれませんが。

三怪人

一つ断つて（謝つて）おかなければならないことがある。と言うのは、あからさまに卑猥なシチュエーションで登場した性的美少女アリスであるが、彼女がナルビナを見た目からは想像もできないような性的暴力で陵辱、屈服させる場面の描写を語ることを控えさせていたきたいのである。

彼女の魔法使いとしての恐ろしさのおおよそ半分はベッドの上で発揮され得るものなのであるが、それでも、それでも今回は語れないということにしておきたい。

理由はいくつかあるのだが、最も大きな理由はこの小説がR - 15（残虐な表現あり）設定だということである。一度この設定で連載を始めて多くの方にご覧いただいている以上は、今更R - 18（性的表現あり）に変えて迷惑をかけるようなことはせず、アウトな部分は『語らずして語る』の技で誤魔化してしまおうという判断である。申し訳ない。

ただ分かっていただきたいのは、性的表現自体は作者にとり大好物であつて、こうして表現を我慢しなければならないことを画面の前の諸君と共に悶え苦しんでいるということである。

だが、ルールはルールである。昨今の表現物における性的表現の過激な規制思想には作者も心を痛めているところであるが、そのようなことを言い出す現実と幻想の区別のつかない可哀想な輩（と子供）のためにも、ルールだけは守ってあげなければならないのである。

であるから、場面は次の日の昼、魂の抜けたようなナルビナの居室からアリスがひよつこりと抜け出し、元のとけない純真無垢な面持ちで神祇長官執務室に現れたところから始まる。ちなみに、ナルビナとアリスが夜を共にしたのは皇領大議館ではなくバテレンが用意した帝国教会の一客室であり、当然神祇長官執務室と同じ館内

である。

執務室にはバテレンと、実験書類らしき紙の束を持ったゲンナイがいた。自分を慰みものとして上司に提出した男の下に向かうなど正気の沙汰とは思えないかもしれないが、アリスの顔や体にはそういった悲壮さが微塵も現れていない。その全ては同意の下に進めた『仕事』だった。

「バテレン。仕事は終わりましたわ」

宿題を終わらせたばかりの子供のような顔をしてバテレンに歩み寄り、スカートの手をちよんとつまんでお辞儀をした。先程までナルビナと共に粘液の海を泳いでいたとは思えないあどけなさ、分かる者には分かるようにいやらしく立ち上っている。

とはいえ、こんな顔をされれば、

「偉いなあ」

などと言つて頭を撫でてあげるのが定石なのだろうが、バテレンはククツと含み笑いするのみである。三者三様、場には容易ならぬ雰囲気は漂っていた。傍目からはまるで歪な家庭を想像させるようなシチュエーションではあったが、それは彼らの不和を示すものではなかった。怪人たちのちよつとした戯れである。

『うむ、よくやった。指示した私が言うのもなんだが、いたいけな少女の貞操の危機は何時見てもはらはらさせられる。大將軍殿も幸せだったろうに』

そう言うと、バテレンは策が事通りに運んだという何気ない喜びに口の両端を吊り上げた。途方もない野望に着実に駒が進んでいると、子供じみた恍惚を感じざるを得なかった。

バテレンの戦法は、相手を麻薬のような快楽に陥れて内より支配するものが主であった。勇者の洗脳にもそのノウハウが存分に役に立ったであろう。バテレンは危険極まりない薬師でもあった。

そしてアリスも、バテレンの有する劇薬の一つであるといえる。

しかし、アリスは劇薬というにはあまりにも魅力的であり、半分は媚薬のようなものであつてところかまわずあらゆる対象に対して訴

えかけるのである。

「あら、羨ましいのでしたら今夜でもいかが？」

一瞬、少女のそれとは思えない蛇のような動きをしたかと思うと、アリスの体はバテレンの下半身に擦り寄っていた。その、身長が倍ほどもあるバテレンを地面に引きずり込むかのようないやらしい動きはクリオネが怪触手バツカルコーンを用いて捕食を行うかの如く可愛げのある外観に魅かれた観測者の心をずたずたにしてなお引き込む魔性の力を持っていた（ある特定の性癖を持つ者にはむしろただの興奮の材料かもしれないが）。アリスはあどけない少女の笑みと毒蛇の如き妖女の笑みを内包していた。

このいやらしさから逃げ延びるには、彼女の術の秘密を暴く必要があった。術とは、本質を見破られればその威力と魅力の大半を失ってしまうのである。

その証拠にバテレンの傍らに立っていたゲンナイは、アリスの媚態にむしろ苛立たしさを表明するかのようになりアリスを睨みつけた。

「小娘、宣教師殿につまらぬ色目を使うな」

アリスは興ざめた目つきでゲンナイを見た。

「あなたでもいいのよ？」

と訴えかける魔力でゲンナイを撃つが、ゲンナイは心も体も不快の姿勢を崩さなかった。種が知れた手品は魔法ではない。その形を取り繕った滑稽な『何か』でしかない。

「悪いが、効かん」

「あら、おじ様には私の術が効かないの。ウフ……もしかして、殿方をお好みだったかしら？」

ならばそれでも手はあるわ、と言いたげなアリスであったが、

「馬鹿を言え。お前の術など見破ってしまえばただの若作りよ」

と言うゲンナイのデリカシーのない言葉にハッと我に帰った。手品の途中で客にネタ晴らしをされた奇術師の如く、神秘のヴェールが魔力とともに薄れていき、アリスはただの子供と変わらなくなった。それは

「何よあなた、バテレンにネタ晴らしされてたのね？。つまらないわ。私の秘密を知っていいのは私を實力で暴ける殿方だけなのに……」

アリスはバテレンの体から身を引き剥がし、涙ぐんだ目でバテレンを見た。その目は、

「私の秘密を知っていていいのはあなただけ」と言っていた。

この一瞬だけ、アリスは心の底から感情をひり出して表に出した（かのように見えた）。それは幼女でも妖女でもなく、ただ一人の恋煩った少女のものでしかないということを見抜けたのは、その感情の対象であるバテレンのみであった。ただし、これが演技でないという保証はどこにもなく、バテレンは決してこの表情を信用しなかった。

悲しい腹の探り合いである。何度も書くが、術師はやろうとしていること、思考が見破られれば命を失ったも同然の生き物なのである。

バテレンは決して底を見せるようなことはしない。例えばアリスが100パーセントの真心をこめてバテレンに接したとしてもバテレンの心を本当の意味で開くことは不可能なのだ。術師とは、バテレンとは斯様な生き物なのである。

『すまんアリス。ゲンナイ君に余計な手出しをされると研究が滞って困るのだよ。大丈夫、もう言ったりはしないさ』

愛娘を優しく諭す父親の如き威厳と労りが籠ったバテレンの言葉が、アリスを無理矢理押し包んだ。たとえ見え透いた嘘、演技であろうともバテレンの言葉には何か脅迫的な性質（魔力）が含まれており、アリスは決して逆らうそぶりすら見せることは出来なかった。話の術においてたった今、バテレンに力を持ってねじ伏せられたのである。今の術を可視化すれば、バテレンがアリスの頭を押さえつけ、暴力の限りを尽くす光景が浮かぶことだろう。

アリスは

「……許しますわ」
と言って俯いたかと思うと、力の無い、じつとりとした睨みをバテレンに向けた。

バテレンとアリス、この二人の関係は後々まで他の追隨を許さない不思議で魅惑的な関係であったといえる。そもそも、アリスという超常現象のような少女が居なければ存在し得ない関係であり、我々の世界では未来永劫お目にかかることはないかもしれない。そういう意味でも希少性の高い、奇妙な男女の関係の一例として挙げられると思う。

しかし、アリスは突然、

「それでは。お兄様たちと遊びに行つてきますわ」

と声を弾ませた勢いでそのまま部屋を立ち去った。いたずらを思いついた子供のようにであったが、アリスのいたずらは子供の遊びでは済まされないだろう。ゲンナイはその後ろ姿を穴が空くほどに睨みつけた。

そして、執務室からアリスの気配は全く立ち消えたが、ゲンナイは依然として不快な表情を保っていた。彼女の秘密を知っていなければ、もしかすると自分は彼女に飲まれていたかもしれないという恐怖がゲンナイの脳裏にちらついていた。不快感の正体の内の一つである。

「宣教師殿、あの小娘は手に負えるかわかりませんぞ。今のうちに勇者か死神で始末を……」

バテレンは逸るゲンナイを平常の顔で留めた。

『よい。アリスは私に打ち勝つことも、逆らうことも出来やしな。絶対に、だ』

ゲンナイはバテレンにほんのわずかの恐怖を感じた。アリスとバテレンの秘められた因縁を知らないだけに、バテレンの余裕が際立つて気味の悪いものに見えた。

『そんなことよりもゲンナイ君、年上に向かつて小娘とは酷いじゃないかね』

「時間の止まった人間は年を取るに値しません。よってあやつは小娘、敬する必要など皆無です」

『君にしては中々非科学的な表現だな』

「宣教師殿も、話の術を使っていないにしてはしゃべり過ぎではありませんか？」

『分かるかね？。こう見えて少なからず興奮しているのだよ』

バテレンは纏う気配を変えた。例の術を発動させたとすぐに見て取れた。

「敵襲、ですか」

『ああ、館内に魔物が一匹入り込んでいる。しかも、君の魔力探知結界にも引つかからずに、だ。嬉しいじゃないか、この前の爺共よりは楽しめる相手だろうな』

「ということは、魔王候補クラスの術師ですな。死神か勇者を供になさいますか？」

『要らぬ。アリスがさっき、いきなり嬉しそうに飛び出していったらう？』

「あ、そういうことですか」

『そういうことだ』

「でしたら、先に報告の方をあらかた済ませてしまってもよろしいでしょうか？」

『ああ。だが、術で観戦しながらだから大事な部分は後回しにしてくれよ』

「かしこまりました」

そして、バテレンの術は薄く広く、やがて教会を覆いつくすような巨大なオーラへと広がり侵入者の動きを完全に捕捉した。

もちろん、この侵入者とはベクトルのことであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1581o/>

魔王の懐刀

2011年10月28日17時06分発行